

---

# まじょがりっ！

ハク アキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

まじょがりつ！

### 【Zコード】

Z6899X

### 【作者名】

ハク アキ

### 【あらすじ】

魔女。病名、心欠落障害。それはサバトと呼ばれる何者かに心臓を奪い取られ、命をつなぐ為に超能力を与えられ、そして生きているものを食べなければ生きてはいけない少女たちのことを指示します。その社会に弊害をもたらす魔女たちを捕獲し、元の人へと戻すべく、政府は心欠落障害捜査機関を設立し、機関の捕獲員たちは罪なき魔女たちを強制的に捕まえていった。これはそんな強くて弱い彼女たちの物語。色々とやりたい事を、混ぜに混ぜこんでいつたら、ぶつ飛んでるものができあがりました。右も左も知らない

で突き進んでいる若輩が書いたものなので、当然、設定に無理があります。矛盾だらけ穴だらけです。読む時は、どうか非常に温かい目で、ありえねえ、とつっこみながら読んでやってください。それから、グロいです。エロいです。比率的には7：3くらいです。苦手な方は「」注意を。

## あんぐりー！ K a n u r a A n g o - e ( 前書き )

グロテスク、性的描写が多數（特にグロ）ありますので注意して  
お読みください。

頑張れば毎日更新予定ですが、たぶん、無理っぽいです。  
誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「この世界は腐っている。

君はそんなことを一度は考えたことはない？

こんな常套句なんて、主食のごはんやパンように毎日食べ飽きる訳でもなく、寧ろ好んで食べるみたいにそんな若者受けの良い言葉だよね。

大人たちは、そんなのマンネリだとか、如何にも偉そうにいうんだろう。どこからそう宣う自信がくるのか検討もつかないけどね。そりゃそうだ。大人たちも随分前の青春時代にそう考え、悩み、どうしようもないから諦めた。そんな苦い過去を通り過ぎているのだから、無意味なんだなと悟つたように貶すことは当たり前だし、間違いじゃない。

しかし、君たちはその道を通り過ぎるどころか、まだ入り口の目の前にいる。まだ人生で一度も出会つてすらいない。それなのにマンネリだと、あたかもそれが正しいかのように罵るのはおかしいじゃないか。というかフェアじゃない。

大人たちが先に知つていたとしても、君がまだ知らなければ、それは君にとっては新しい物であり、マンネリじゃないし、罵つてもいけない。同じように苦しむ権利もあるんだ。

大人たちにも分かりやすくいうなら、百年前に書かれた小説を読んで、斬新だと感じたのに、その小説を十年も前に読んだ人に、感性が古いと呆れられる感じ、とでも言えば分かりやすいかな？ 古い物に新しさを感じるのは、なんか矛盾してて面白いよね。

つまり、言いたいことは、新しいってのは、知らなかつたって事で、ただ、己の人生で一度も出会つてなかつたこと。だから世界は腐っているって思うことは、それは正しい感性だし、ダサくもないんだよ。

そんな、腐つてまじめ「」しい世界なんだ、見たくも聞きたくも

なのに、知らなければ、社会に捨てられて、拳げ句の果て殺さず  
に自ら消えさせる。と思うのも間違いじゃないし、君がキチガイで  
もない。

そう、何も知らない君の場合はね。

狂わずに世界を生きている大人たちは、その上、応用の域にた  
どり着いているから、どうせ何とも成らないんだから考えるだけ時  
間の無駄、くだらない、と人生の道端に吐き捨てるんだよ。こちら  
としては、その台詞もマンネリで、飽き飽きするんだけど、気づか  
ないのかな？ まあいや、どっちもどっち、つて言うことにして  
おこう。

その応用って何なのか？ 答えは単純。君たちの中にもたどり着  
いているかも人もいるかもね。なんせ機械的なことなんだから。

じゃあ、意味もない、ぐだぐだな前置きは「」までにして、唐突  
だけど、物語を始めるとしようか。

腐りきつた物語を。  
アンダーグラウンドな  
世界が目を背けた物語を。

それから、一応さつきの答えを書いておくね。

「考えるだけの時間がもつたいない。さつさと血口、時間、名譽、  
意地、恣意、命を捨てて、社会の為に使えなくなるまで働け」

「の世界に生きるには、まず第一に、人生を諦めなければいけないだよ。

残念ながら、大体の人はね。

あんぐりー！ B a n g a A n g o - e 9 / 1 - 6 (前書き)

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

急に雨が降り出した。

蒼天を覆い尽くすほどどの灰色の雲から、涙のような雨粒が空から落ち、ポツポツと乾ききったアスファルトを斑模様に濡らして、最後にはある一ヵ所を除き、同じ色に塗りつぶした。

その雨は洗い流すかのように周りに立ちこめていた、生臭い鉄の臭いを消してゆく。

そんな温もりも何も感じられない硬いアスファルトの上に、べたりと座っていた魔女は、ぼーっと、どんよりとした灰色の雲を見上げて呆けていた。口元についた血や脂は雨ごときでは落ちてはくれない。何一つ洗い流してはくれない。

ここにいても、意味はない。

早くしないと捕まってしまう。

魔女はその場から立ち上がった。ここから逃げだすために、だ。このまま血の付いた顔で行動したら田立ってしまう。袖で口元についた血や脂を拭き取ろうとしたが、袖もしつかりと血に染まつこれでは拭いてもさらに酷くなる一方だと感じた。

他の汚れていない部分を探し、拭こうとしたが、着ている服の自分が届く範囲は全体的にべつたりと血が付着し赤く染まつている。思いの外、どす黒くはない。雨で少し薄くなつたのだろうか。服に血がついている方が顔よりも目立つのだが、顔はなんというか、直接皮膚について気になるので拭きたい。

仕方がないので、服に飛び散った小さな肉片を摘んで取って拭いた。顔に雨と血で重く湿った服がべつたり付くが、気にせずじき

しようと拭いていく。ふき取れるとこりはさらにおしつたような気がする。でも何となく落ちたような気もする。どうなんだろ？

自分の顔にこびり付いた汚れをふき取れたのか、確かめられる鏡。 ようなものはないから確認できない。

だが、今自分がどんな表情して生きているのはわかつていた。

誰よりも、気持ち悪くて、そして、誰よりも、おぞましい、と。

もうここにや、このまま逃げよう。

人目に付かないように魔女は、路地裏の奥に向かって逃げるよう に歩き出した。どこに逃げても、逃げきれないことには変わりないが、ここにいるようには幾分、長く逃亡生活が続けられるだろう。 そう感じた。

歩きながら魔女は、これで何人目だつと頭の片隅で考えていた が思い出せないでいた。

その代わりなのだろうか、あることは思い出した。些細なことだ がやらなきやいけない気がしたのだ。

魔女はくるりと向きをさつきまで食べていたモノ 食べ残し が落ちている方、自分がぼーと呆けていた場所に向け、両手を合わせて祈りを込めて言つた。

「へりやつをまでした」

その落ちているモノは何も答えず、濁つた目を見開き、口をあんぐりとあけてたまま体をぱっくり開かれ、中に詰まっていた何かを食い散らかされて鎮座していた。周りには長くて少し湾曲している白い棒や、肌色や白、赤や黒の混じった柔らかそうな破片など、その体を囲むようある赤く染まつた水たまりに何かの風情のように存

在していた。

それは沢山の水とタンパク質と脂肪、カルシウムなどを材料として出来た、動いていた塊だった。

中身をぱらぱらと引き千切られた塊だった。

それにしても、なんというのか、お行儀が悪い、散らかし方だつた。

魔女は後悔するといつよりもどこか高級レストランで床にスープをこぼしてしまったよつに申し訳なさうにその場から立ち去つていった。

雨は絶え間なく、降っている。

魔女はもう、そこにはいなかつた。

午後になると雨は止み、厚い雲の切れ間から、さんさんと太陽の光の筋が赤く濡れたアスファルトを照らしていた。

しばらくすると、魔女から見れば一（偏見だが）とても美味しそうに肉を拵えている一人の女子高生がその路地の前を通りかろうとしていた。

その塊を世間一般的には、

モノではなく、人の死体といううらしい。

誤字脱字などあつまいたら指摘お願いします。

魔女。

病名、心欠落障害。

サバードと名乗る、正体不明の何者かに心臓を奪われてしまつた少女たちのことを差す。

心臓が奪われたからといつても死ぬわけではなく、どうしてか心臓が欠落したままで、生命を維持することができ、平然と生きていられるのだ。

回復能力が高く、腕を切り落とされても、頭を吹き飛ばされても再生し、心でも生き返ることもできるらしい。

だが、ここまでだつたら、ただの怪奇超上現象として受け止められ、哀れみの対象か、もしくは羨ましがられる存在に成り得ただろう。

だが、神様は試練を与えるというのだろうか。とある罰を与えた。心臓が無いのに生きていられる対価に、魔女は生きていた物を食べなければ生きていけない。

生きていた物、つまり、生物の生肉だ。

魔女はそのままの調理されない、魚類、両性類、爬虫類、鳥類、哺乳類の生肉しか、体が受け付けなくなる。それ以外は食べてもすぐに戻してしまう体質に作り替えられてしまう。食べないと命ある物と同じ摂理で、当たり前に死んでしまう。だが、ある一定の時間、食べない期間が続くと、飢えによつて理性を失い、見境無く生きている物を襲つて食べようとする。獲物が見つかるまで、もしくは命がつくるまで徘徊するのだ。

対外、腐るほど、そこら中にはいる人間という生き物が襲われてしまつただが。

それだけでは魔女とは呼ばれるのではない。それだけならもつと他の代名詞、ゾンビとか呼ばれたはずだ。

この人喰いが魔女と呼ばれる由縁は、文字通り、魔法 超能力が使えるようになるからだ。

政府機関である、心欠落障害検査機関の捕獲員のような先天的な能力者も実際にいる。国、世界でも、超能力を持つ人間がいることを公式に認めため、にわかに信じ難いが、そういうあり得もしないことをやれてしまう、起こせてしまう者がこの世界にいるのだ。

それなら捕獲員などの能力者と魔女は本質的には、ほとんど同じで、捕獲員がただ政府公認というラベルが張られているだけであり、魔女には牛や豚、鳥のような不要になつた家畜を食わせて飼い慣らせば、捕獲員とほとんど変わりなく、物騒で揶揄的な名称をつけなくともいいじゃないか？ と思うところだが、捕獲員、先天性の能力者ほどの能力は、治癒や回復、搜索 大ざっぱに言えば攻撃系ではない能力、要するに、非攻撃型の能力を持つ能力者しか確認されていない。それに対して、魔女が持つ能力は、攻撃特化の、殺傷能力特大の桁外れの能力を持つのだ。

ゆえに魔女。

時に鬼とも言われるのだが、こちらの名称はあまり使われていない。たぶん差別的に聞こえるからなのだろうか。どちらにせよ変わりないよう聞こえるのだが。

研究者の推論では、先天性の能力者の能力が治癒系が多いのは、単に己を守るために特化したのであると言われ、魔女が物騒な能力を持つのは、楽に獲物である生物を狩るために進化したようなもので、いわば蛇や蜘蛛や蠍が毒を持つのと同じ理由だといわれている。

そういわれ続けているのにも関わらず、魔女＝キチガイのレツテルは張られたままで、それが剥がされたことはない。兵器や武器が自分たちを守るべき道具ではなく、人を殺すための道具でしかない

と、忌み嫌われてはいるよう、世間一般では、魔女は人を殺す超能力が使える人喰いの狂った女の子と思われて恐れられている。

そんな魔女たちは、ほとんどが十代の青春のど真ん中を生きる生き物だ。異性と恋したり、友情を確かめ合つたり、夢を叶えるために努力したり、世界を知つたりする。そんな人間形成と社会を生き抜くための大切な期間を生きている女の子たちだ。

そして、魔女にされた彼女たちは、人生の中でも重要な大部分の青春を謳歌できずに、社会のルール、秩序の為に食い殺されてしまう、か弱い存在でもあつたのだった。

【9月18日 10時29分】

「雅樹っ！ 聞いたっ！？ ここら辺で魔女がまた出て、人を襲つて食べたんだつてつ！ これで五人目だよつ！」

僕が戸を開けると、青い空と七階から一望できる街並をバックに、幼なじみの熊崎珠奈くまざきたまながいた。服装は平日にも関わらず、いつもの制服ではなく、チェックのチュニックに赤いカーディガン、ブラウンのショートパンツの下に黒いタイツを御召しになつていやがる。肩からは最近買つたと言つていた灰色のショルダーバッグがあつた。それに対して、僕は長袖の黒のTシャツにジーパンというラフな格好だつた。そして開けるや否や、今日のトップニュースを知つていいのか訊いてきた。

「ああ、聞いた聞いた。昨日、帰つてきてからすぐに回覧版回つていたし」

僕は素つ気なく答える。

人が殺されたつていうのに、こうも流行の推理小説や、昨日放送していた連続ドラマを見たか？ みたいに言つて、うんうん、みたみた、おもしろかった、つまんなかったとか、声を弾ませて返すのはおかしいじゃないかと、思う。

確かに、人との会話で、相手の話に乗つて会話を弾ませることは重要だと、日々の日常で痛感する。だが、このような暗い、しかもノンフィクションの話題で、ブラックジョークのように盛り上がるのではなくだか、死んだ人を見せ物にして楽しんでいるみたいで、どうも僕はそういう野次馬気分にはなれない。なりたいとは一切思わないが。

「ていうか珠奈、今日は魔女がこの近くいるからって流石に生徒の安全のために自宅学習になつてたんじゃなかつたつけ？」

僕と珠奈が通っている高校は、今日は生徒の安全のため臨時休校になつていて、この周辺の小中高校も臨時休校に同じ理由でなつてゐるはずだ。本当の理由は、魔女に関する個人情報はすべて規制されていても関わらず、マスコミ関係が風漬しに、この周辺の学校に押し寄せ、引きこもつているような生徒がいないか直接聞いたり、学校周辺に居座り、直接生徒から情報を引き出して手に入れようとするモラルに欠けた記者への対応に、学校職員全員が忙殺されるからだ。

「うん。 そうだよ」

珠奈は笑顔で返事を返した。

分かつていてるなら、真面目に自宅学習しろよ。試験まで一ヶ月くらいあるけど、お前はいつも赤点ギリギリなんだから、早めに対策しろつていつも言つてているじゃないか。

まあ、心の叫びはここまでとして、僕は頭を抱えそうになつた。

「……何で、僕の家に来たの？」

「おとーさんは会社、おかーさんはパートに、いつも通り働き行つて家にいなかから、暇だから来ちゃいました」

珠奈は追撃するようにいつた。相対するように僕はあきれかえつた。

ここ周辺には食事を終えた魔女が彷徨いていて、それを政府機関（詳しい名称は忘れた）の捕獲員やらその魔女を捕らえるべく、この町に集まつてくる。つまり、世界で一番平和とうたわれてゐるこの

の国の中で、この町が一番危険な場所になるということだ。

実際、魔女は食事を終えたばかりだから、すぐには人を襲わない可能性が高いので、今は安全なのかもしれない。だが、捕獲員の魔女捕獲のとばっちりを食らう可能性も少なからずある。警察も魔女捕獲のために拳銃を発砲して（そうしないと逆にやられる）対応するのだ。

前に、警察が今にも人を襲いそうな魔女に向けて発砲（威嚇射撃）は魔女に対して全く効果はないため）して、見事に襲われそうになつた人に当たつた（しかも、当たつてしまつた人は残念ながら魔女に連れ去られ、のちに無惨な姿で発見された）こともあつたり、自衛隊を出陣させたが、たつた一人の魔女に壊滅させられるという、お国にとつてとても痛い事件もあつたりと、魔女に対しての黒歴史がたくさんある。

そんな何が起こるか分からぬ、何が起こつてもおかしくない状態である。だから、今が絶対に安全とは言い切れない。

この状態での一番の安全策は、家に引きこもつてることで、少なくとも、外にいるよりは魔女に襲われす確率は少ない。魔女が家の中に入つてまで襲つて来た事例は少ないからだ。

それは、家の中にはいる人という生き物より、外にいる生き物の方が圧倒的に多いからで、魔女が出た地域では、まず先に飼い犬や野良猫、カラスの動物が食い殺されることがよくある。田舎だと熊、猪、鹿、狸などの大型の野生動物が多いから、そちらが先に食べられる為なのか、人への被害は少ないらしい。

それでも襲われる人は、逆に立ち向かう人（捕獲員、警察、自衛隊）と、魔女がここ周辺にいるにも関わらずにこうやって人の家に遊びに来るような、己の安全管理に無頓着な奴だ。ちなみに一番多いのは魔女の身内だ。理由は匿う際に近くにいるから。

そんな身の安全よりも暇をつぶすことを最優先する命知らずは僕の目の前でへらへらと笑つていた。

「と、言うわけで、雅樹のお宅拝見と行きますか？」

「どう言つわけだよ。そもそも何回も来てるだろ？」

僕は闖入者、もといい、命知らず じゃなかつた、珠奈の進入を拒んだ。

「むむ、さては、朝からえつちな本 オル AVでお楽しみ中で、まだ片づけていないのかな？……………つ！？ そそそそそそれ、じゃあ、雅樹の、このつ、このつ、の手は、雅樹のアアア、アアア、レを、もしや、せ 汚ないつ！ 触らないでよつ！ この変態つ！」

「…………」

バタンッ。ガチャッ。

「うああつ！ ジョークだつてばあつ！ 拗ねないでよおつ！ 閉め出さないでえつ！ お願ひだからあつ！」

そんな思春期真つ最中、脳内桃色の女子高生の声に耳を傾けることなく、僕はいそいそと、部屋に向かい、テレビの下の棚の上においてある写真を絶対に見つからないとこに隠した。断じて、その手の写真ではない。

見せたくない物を隠したところで、問題の女子高生をビリにかしぬければならない。部屋の前で朝から騒がれていても困る。隣近所に変な誤解をされたくないからだ。仕方がなく玄関の方へと向かった。僕だって女の子を閉め出すほど鬼畜では 、

「…………まさか…………本当に…………やつてたの…………？ あ。

あたし、ちょっと用事を思い出したから

よし、さつさと部屋の中に入れよう。

珠奈は、変な臭いがするところには入りたくない、騒ぎ、駄々こねて逃げようとしていたが、僕は、無理矢理、自分の無実を証明するために、珠奈を部屋の中に連れ込んだのだつた。

本当に、隣近所に誤解されそつ…………。

誤字脱字などあつまいたら指摘お願いします。

ちなみに僕は高校生のくせに一人暮らしを満喫している。

元々は別のマンションで叔父さんと叔母さん、その二人の息子の従兄と、四人で暮らしていたのだが、叔父さんが地方へ転勤、その息子の従兄もこれまた同じ地方の大学へ入学、叔母さんもそれについて行つた。そのため、僕ひとり、ここに残し、前のマンションよりも、狭い一人暮らし用の部屋を借り、ここに住むことになったのだ。僕としては、トイレと風呂場が別であれば、なんでも良かつたので、最近出来たばかりのきれいなこの部屋は、かなり満足している。

なんて都合の良い設定？

違う。

この部屋は、檻のない牢屋だ。

どう考へても、あの家族には、僕という異端者キチガイは邪魔だつたのだ。

だから、一人、ここに、残したのだ。

もう人生の最後まで、僕に、出会わないと。

「10時37分」

「はあ、雅樹の家に来てもつまんないな。なんでゲームとか、パソコンとか、トランプとか、人生ゲームとか、操り人形とか、マンガとか、えつちな本とか、ないのかな？」

僕と珠奈は部屋にある数少ない娯楽道具のテレビを見ていた。

珠奈は部屋に上がるなりベッドにダイブ（年頃の女の子として、その行動はいいのか？）して、一悶着あつたが、それにも飽きたのか、今の彼女の興味は僕がつけたテレビへと移つている。

「なんで、エロ本を遊び道具としてとらえているんだよ？ それと

操り人形を一人でやるのは辛いよ

操り人形は確かに面白い。しかし、ある程度人数がそろわないと面白くない。ていうかその前に持つてない。

「え？ 男友達の部屋に入つたら、えつちな本の検索するは、よくある展開でしょ？ あ～そうか、雅樹はアニメとかも見ないもんね」エロ本を見つけて目読、みたいな展開はあるかもしないけど、遊びのジャンルとして確立してねーよ。……その辺、疎いからわかないけど。

珠奈はテレビから、部屋にある数少ない娯楽『手軽で、美味しい、弁当のおかず』というタイトルの料理本を読みはじめた。うん、友達の部屋でやることなくなつた人の末期症状だな。

僕は、珠奈からテレビの画面に視線を向けた。テレビの中では、ひつきりなしに魔女について、評論家たちが熱いディベートを意味もなく、繰り返していた。チャンネルを変えて、他の局もそんな感じの討論番組で、僕好みではなく、ちつとも面白くない。そりや昼だもんな。若者の感性にはちょっとばかり無理がある。

だから生放送で評論家がダブルブッキングしてないかなーと、見るくらい、超強引な楽しみ方で暇をつぶす。要するに、全く面白くない。

こういう評論家たちは偉そうに言つてはいるだけで、特に何にもしないで、ただ出演料もらつてんだよな。何のために討論やつてんだよ（ギャラのためだけね）。お茶の間の方々に共感を与えさせたつて、あんたらが言つてはいる通りになることなんて、有りもしないだろと在り来りに心の中で罵る。

そろそろ別な番組に変わつてはいるかなーと、再びチャンネルを変える。さつきまで見てはいた討論やらとは違い、魔女についてニユースキャスターが事細か丁寧に分かりやすく説明していた。まあこれもよくあるタイプの物だ。新型インフルが流行つた時にどう対処すれば良いのか、お茶の間の細菌とウイルスを同じ物と思つてはいる無知な方々に講義する為の物だろう。

その間、僕と珠奈は会話することなく、ただ暇つぶしに、僕はテレビを見て、珠奈は本を読んでいた。

ついに暇になり過ぎたのか、この場の気まずくもない、何ともいえない空気を変えたいのか、珠奈が本から顔を上げて僕に話しかける。

「魔女つてさ、あたしと同じくらいの年の女の子が突然なっちゃうんだよね？」

「世間一般的にはそう言われているね。なっちゃうというよりは勝手に改造される方が正しい気がする」

仮面ライダー サイボーグ009みたいに僕は例を挙げた。珠奈はピンとこなかったようで反応が薄い。なんだかショックだった。「それにも、魔女が人を襲つて食べるは、その魔女の意志でなって強調しそぎじやない？」

珠奈が疑問を呈する。僕はテレビの討論家よろしく答えた。

「どちらも被害者、つてことを暗示させたいんだよ。魔女に襲われた方の遺族が、魔女の方の親族ともめ事を起こさない為にもね。魔女の方も理性を失つて、人を襲つちゃうらしいから、食べたくて人を襲う訳ではないし」

「ふーん」

「そもそも、魔女になりたくてなるわけではなく、何者かに襲われてなるものらしいよ。それに人を襲う理由も、たまたま近くにいたのが、人だったから、という単純な理由だ。だから、そこは仕方がないというのか、なんというのか。魔女になった子を同情してやるべきだと僕は思うんだけどね」

珠奈が反論するように言う。

「でも、魔女になれば、人を殺しても仕方がないってことにしたらさ、魔女になつて、嫌いな奴を食い殺してやりたい、と思う子もいるんじやない？ ほら、それこそよくある二重人格になりすまして、殺人を行う、みたいな感じでさ。年頃の女の子なら、そう考える子もでてくるんじやないかな？」

「年頃の女の子って……、珠奈は含まないの？」

「いっつは何様のつもりだ？ まあ人のことは言えないので追求はしないでおく。」

「模倣犯が出てくるってことだよね？ そういう身勝手な奴がいるから、成りたくないのに魔女になってしまった子が理不尽に叩かれて、可哀想になつてくるんだよ」

「確かにそれは分かるけど」

話を遮るように珠奈の携帯が鳴った。今流行りのアップテンポな曲だ。珠奈がお母さんからだ、と言い携帯を取り出して画面を見た。「魔女がいるから家に籠もつてろ。って書いてあるんじゃない？」僕が本文を推測し尋ねる。珠奈は携帯を見ながら嫌そうな顔をした。

「うげつ、今日の夕飯の材料買つてきて。ついでに洗濯物溜まつてるから、洗濯して、つてメールが着やがつた」

この無頓着な親子はいつたい何なんだ？ 食われても文句言えないぞ？ とは一切、口にはしなつた。珠奈は、はあーとため息をついてベッドから立ち上がる。

「なんだ、もう帰るのか？」

僕はわざと名残惜しそうに言つた。早めに帰つてくれるなら、バレずにする。

「何つ？ 買い物、手伝つてくれるとなつ！？」

珠奈がきらきらと僕に期待の視線を送つてくる。早とちりしきしきだろ。

「いやいや、珠奈の寄り道は絶対長そつだから、バス」

「けつ、期待したあたしがバカでした」

珠奈はそう吐き捨て、立ち上がり帰る支度する。ていうか寄り道する気満々だつたんだ……。てつきりしないから手伝つて、とでも言つと思つていたので身構えていたのだが、無駄になつた。

珠奈は玄関の方へと行く。その後を見送りの体裁上、僕もその後を着いていく。珠奈が靴を履き、戸を開けた。

「じゃあな珠奈、また明日。って、明日も休みになるか」

魔女はまだ捕まっていない。捕まるまでは学校は休みになるだろう。勉学よりも命の方が大事なのは当然だ。学校側から見れば、もし生徒が襲われた時のクレームや訴訟対策なのだろうけど。

また冬休みが削られるのかと思うと、憂鬱な気分になるよね。そのがくせ、宿題の量はそのままだし。

珠奈が手を小さく振つて、閉めようとした。

「うん。バイバイ。あ、それとさ雅樹」

「ん？」

急に深刻そうな顔をして僕に忠告する。

「あんまり、魔女のことを哀れむつて人前で言つのは止めた方がいいと思うよ。ほら、なんというか、そういう魔女の方をもつ人つて、世間から避難されるし……」

「……分かっているよ」

魔女は殺人者と同じで哀れむ対象ではない。

憎むべき存在である。

そう言えるのは、食べる物は生きていた物なら何でもいいなら、人じやなくともいいじやないか。牛でも豚でも鳥でも魚でも虫でも人以外ならなんでもいい。人じやないと駄目、と言つわけでもない。それなのに人を食つるのは、どんな理由であれ、人喰いの狂つた思考を持つた奴らと同じだ。

だから、魔女は犯罪者であり許すべき存在ではない。

とも、密かに罵られている。

でも、だから、  
だからって、

その魔女を殺しても、構わないの？

珠奈を見送り（玄関までだが）、玄関が閉まつた後、僕は部屋に

戻り、隠していた家族の写真を取り出して見ていた。

これ撮ったの何年前だっけか。そんなことを思いながら「写真を元の場所に戻した。いつまで々々しく持っているんだかと自嘲した。次に浴室へと向かう。浴室に向かうのは浴槽を洗うためではないし、シャワーを浴びるためでもない。ましてや、洗濯する訳でもない。

もつと別な用事があるのだ。

僕は浴室の戸を開けた。

「もう行つたよ」

僕は、お湯も張つてない浴槽の中で座つて、ショートカットで、整つた綺麗な顔、日に当たつたら倒れそうなくらい体と細い手足に、血に染まつた白と赤の斑のワンピースを着た僕と同い年の女の子、甘音<sup>あまね</sup>ばにらさんに声をかけた。

「これから一緒に、ばにらさんの服や肌着を買いに行こうよ。その服をずっと着ているのは、気持ち悪いでしょ？」

「そうだけど、でも、これ以外の服なんて……」

「大丈夫。僕の服を貸すから。それに文物の服つて、どういうのがいいのか、僕にはさっぱりだからさ、着いてきて貰わないと、どれ買つてきていいのかわからないんだよね。それなら、ばにらさん自身が選べば手つとり早いでしょ？ それに、ほら、生活用品つていののか……、女の子に必要な物も買わなきゃいけないでしょ？ だから着いてくれる？」

僕としては服よりも、生理用品を買つてきてほしかつた。僕一人で、それを買える知識も、勇気ない。

「…………うん、分かった、行く」

もつかつてこるのは想ひナビ、

「……匿つてくれて、ありがと」  
彼女、ばにらさんはそう言った。

彼女は、人を襲つて食べたことのある、正真正銘の魔女だ。

僕はそんな彼女を匿つている。

僕が後で絶対に後悔をしないために。

あんぐりー！ H o n u k i - A n g l e 9 / 1 8 1 0 . 3 3 ( 前書き )

誤字脱字などあつまつたら指摘お願いします。

大型バイクに若い男女が乗り、四車線の国道を走っている。平日であるからなのか、それとも魔女がいるからなのか、それほど混んでいない。時折、運搬用のトラックを追い越ししながら、若い男女を乗せた大型バイクは目的地のホームセンターに向かって走っていく。その大型バイクの運転者の後部に座つて、振り落とされないように運転者の腹部に細い腕を回して抱きつき乗っている少女は国道に隣接する店をきょろきょろと眺めていた。

白いヘルメット被つてているため、顔は見えないが、淡い青色でストライプ柄のチュニックシャツ、黒のチノパンという格好の小柄な少女 鳥兜とりかぶとこならは甘つたるい声色で言つた。媚びているわけではなくこれが地声らしい。

「先輩、あと何分くらいで着きますか？」

先輩むのぼうすきといわれた運転者の黒いヘルメットを被つた若い男性

六乃鬼灯は答える。服装は灰色のジャケットに黒のところどころ縫つた跡があるカーボパンツを穿いている。こならは普通の低い男性の声で、聞き取り安い口調で喋つた。

「んー、もう少しだと思つ。俺の記憶が正しければの話だけな」

「……先輩。さつきの信号、やっぱり左折だつたんぢやないですか？」

「いいや、このまま直進で合つてるみたいだぞ。ほら「

左前方からホームセンターの看板が見えてきた。そこで先に現地入りしている百合子と待ち合わせ、兼、こならの武器調達の為、一旦、ここを日指して走つてきた。

左折して駐車上に入り、バイクを止める駐輪場を見つけ、そこにバイクを停めた。

先にこならがバイクから降り、白いヘルメットを外す。その下に隠れていた素顔を晒らされる。小柄で顔立ちは幼いが、これでもれ

つきとした十七歳である。髪は肩に掛からないくらいの長さ、癖つ毛で全体的にウェーブがかかっている。

隣でバイクの施錠を終え黒いヘルメットを外し、こならも隠れたいた素顔が見えた。精悍な顔立ちで、年は二十一歳、髪は耳にかかるくらいのばしていいるが、手入れとかは特に気にしていいらしく、少しボサボサだった。鬼灯はこならが被っていたヘルメットを受け取りしまう。

こならが言う。

「じゃあ買い物に行つてきますね。ついでに買つてきて欲しいものとかありますか？」

「コーヒーでも買つてくれ。あと百合子を見つけたらメールするから」

「あいあいわ～」

そう言つてこならは、パタパタとホームセンターの中に入つて行つた。残された鬼灯は、ホームセンターで待ち合わせをしている同僚の百合子がいないか、きょろきょろと辺りを見渡して探す。だが、そのような容姿の女性は見たらない。

「まだ着いていないのか」

約束の時間よりも早く着いたのか、それとも外で待つのは暇だからホームセンターの中に入つて、商品でも見て暇つぶしでもしているのか。鬼灯は携帯を取り出し時間を確認しようとした時、後ろから声をかけられた。

「私なら、もうとっくに着いているわよ？」

鬼灯は声が聞こえた方に振り返る。そこには売り出されているロングチャエアに座つている見慣れた女性が座つていた。

長いストレートの漆黒の髪、恐ろしく整つた美顔、灰色のワンピースに黒のレギンスを着こなし、膝の上に落ち着いた色の手提げのバッグ、そして、優雅に微笑んでいる有佐百合子（御年、二十四歳）<sup>あつさゆり</sup>が存在していた。

「なんだよ。いるなら早く声かけるよ」

鬼灯は不機嫌そうに言った。

「邪魔しちゃつたら悪いと思ってね。それよりあなた、いつの間にそんな大型バイクなんて買ったのよ？」

「ん？ つい最近だけど」

「あなた、免許取つてからそんなに経つたのかしら？ 確か、大型二輪つて免許取得三年以上じゃないと、高速で一人乗りできないはずよねえ？」

「そうだが、こならが乗せろ乗せろ、騒ぐから乗せてやつたんだよ。それと運転テクは大丈夫だ。大型の免許取つたのは一年前だが、前から乗り回してたからな」

「無免許でなと、さらつと言つ。

「……ほんと、この男は鈍感ね」

百合子は小さな声で呟いたが鬼灯には聞き取れなかつたようだ。

「なんか言つたか？ その前に、いつの間にそこにいた？」

「こならと話していた時はそのログニアに誰も座つてなかつたはず、と鬼灯は記憶を掘り返すが、絶対にいなかつたと思つ。いたら、こならだつて普通に気づくはずだ。

訊かれた百合子は笑つた。

「気づかないならそれでいいわ。それよりも、どうせなら買うなら車の方を買ひなさいよ。それなら私も乗れるじゃない？」

「嫌だね」

車は走つている気がしないから嫌いだと鬼灯と口を尖らせゐる。

「うふふ、まあいいわ。こならちゃんの為にもねえ？」

「こならの為つて？」

「別に。うふふ」

鬼灯は百合子を訝しげに睨んでいたが、理解できそうもないし時間も食うから、早々に分からぬ、知らんと結論づけ本題へと移る。「で、今回の魔女の情報はあるのか？ どうせ早めに着て情報収集してたんだろ？」

鬼灯の表情が変わる。百合子はめんどくさい、うつむいた機

械的に述べていいく。

「ええそうよ。今回、襲われて殺されたと思われる被害者は計五人。すべて一週間以内に起こったそうよ。一昨日、見つかった方もいるそうよ。検死の結果はまだ出てないから、この中で何人が、どんな魔女に襲われたのかは特定できないけど、一週間で五人は流石に多いし、今月にはいつて捕まつた魔女はまだ一人だから、最高、三から四人くらいはいると覚悟した方がいいわね。私的にはそんなにいふるとは考えられないけど、複数はいると思うわ」

「四人もいたら面倒だな。一週間で五人も襲われるって、模倣の魔女の仕業も考えられないか？ あの魔女なら、それくらい平氣でやりかねないとと思うんだが。ほら、光さんとやり合つた時の怪我を治すために襲つたとか」

「模倣の魔女と光がやり合つたのは三日前よ？ その前に襲われた人もいるし、模倣の魔女が三日前に光と戦つた場所から、ここまで歩きでくるのは、無理ではないけど、相当な時間がかかるわ。ここに来てから襲うのは時間的にも辻褄が合わない。それに、襲うくらいいなら近場で済ませない？」

「うーん、じゃあ、魔女草<sup>ストライガ</sup>だけ？ あいつらがやつたんじやないか？」

「その可能性は否めない。けど、あの魔女組織にいる魔女は、人を食べないって、あの魔女が断言しているから、これは普通の名無しの魔女がやつたと考へた方がいいわね。それに、魔女草<sup>ストライガ</sup>の魔女たちは、後から組織勧誘にくるのは毎回だし、もしかしたら、もう来てるかもしれないわ。さつさと終わらせないと長引くはいつも通りだけど」

「本当、たつた一人で、自衛隊を壊滅させたの戦歴は伊達ではないわねと百合子が自虐的に言つ。」

「で、そいつらの能力は？」

「全員不明よ。そもそも魔女の数も分かつてないのに、そんなことわかると思う？」

「それもそうだな。他の捕獲員は増援にくるのか？魔女が四人をこのメンツで捕獲するとか、魔女草ストライガの連中とやり合つのはキツいぞ？」

「今の時点では、まだ来ない事になつてゐるわ。榎君も、いちいちやんも、他のメンバーもこないわね。あのウザつたい光は入院中で、何があるうがこないのよー。私的に光が絶対に来ないのが心の底から嬉しくて、もう感極まつてゐる状態なのよー！　もう一曲歌つちやいそくなぐらい」

「……光さん、誰も見舞いに来ないつて怒つてたな……。その他は何かあるのか？」

「上からは特になし。さすがに魔女の数が多ければ、いつも通り増援が来るし、まだ捕まつてない、名のある魔女や、サバドがでてきたなら、機関、全員で狩りに行く。まあ、いつも通りやれつてことよ」

大体の話を聞いた鬼灯は、こなうに百合子に会つた、さつき分かれた場所にいふとメールする。

十数分後、こなうが片手にレジ袋を持ちながらホームセンターから出て、鬼灯と百合子の元へと向かつて來た。

「おまたせしました。えーと、あつた。はい、先輩。ブラックで良かつたですか？」

こなうはレジ袋から缶コーヒーを出して、鬼灯に渡す。鬼灯はありがとなといい、缶コーヒーを受け取つた。

その光景を見ていた百合子が感想を述べる。

「こなうちゃんは、いつ見ても、ほんわりしていて、愛くるしいわね。見ていてとっても癒されるわ～」

「ありがとう」レジでこなう。褒められると照れちゃいます……。えつと、百合子さんはお茶ですよね？」

こなうは再びレジ袋を漁り、ペットボトルのお茶を取り出して、百合子に渡した。

「ありがとう。いつこう気遣いが、どいかの無愛想な誰かさんとは、

本当に違うわよね？ そう思わない？ ねえ？」

百合子は鬼灯に嫌な視線を向け、同意を催促していたが、鬼灯はその視線に我関せず、缶コーヒーのプルトップを開けて飲んでいた。百合子がこならに今回の仕事の内容説明をし終えたところで、鬼灯が言った。

「どれ、気合い入れて仕事しますか

鬼灯、百合子、こなら。

この三人は、政府機関、心欠落傷害検査機関に属する心欠落傷害の少女を捕獲し、保護する捕獲員である。

誤字脱字などあつまいたら指摘お願いします。

ばにらさんには僕のパークーとハーフパンツを貸した。僕自身背  
がそんなに高くはないし（低いとは言わない）、細いので服のサイ  
ズも小さいので、多少大きくても、そこまで目立つことはないと思  
つたからだ。着替えた彼女は元の体のラインが良いからなのだろう  
か、男物とは思えないくらいうまく着こなしていたから、何か問いつめられない限り、怪しまれる心配はない。

少ししてから、僕らはばにらさんの衣類と食料の買い出しに出かけた。

行き先は近場のショッピングモールにした。そこなら大抵のものは全てそろっていると言つても過言ではないくらい、いろいろな店  
が入り交じり、女性物の服を扱っている店なら沢山あるからだ。一  
階にある食品売場で食料の買い出しもできる。食料の買い出しをするのは、一人増えて、家にある食料が底つきそう、というわけでは  
なく、家にある分では足りない食品があるからだ。それを買いに行  
くためでもある。なんと言つても彼女は魔女なのだから、僕と全く  
同じ物を食べるわけにはいかない。

一十分ぐらい住宅地を歩き、ショッピングモールに着いた。ショ  
ッピングモールの中に入ると、魔女がまだ彷徨いていると注意がテ  
レビ等で流れているせいなのか、いつもは平日でもそれなりに賑わ  
つていてるのだが、買い物客がほとんどおらず、閑散としていた。

「取りあえず、これくらいでどうにかして服とか肌着とか、必要な  
物を買ってきて。食べ物は僕が買つてくるから」

そういう、ばにらさんに三万円を渡す。ばにらさんはそこまでし  
なくていつて遠慮し、渡された三万円を僕に押し返してくる。僕は  
ばにらさんに触れないように注意しながら、取りあえず受け取つた。  
「……こんなにいらないよ。服はこれでいいし、肌着とかは……我  
慢するから。それにこんなに借りても返せないし……」

「いいから、いいから。はい」

一瞬で返された三万円を、ばにらさんが着ているパーカーのポケットに素早く突っ込んだ。

「全部使いきつてもかまわないよ。ばにらさんにあげるつもりで渡したんだから。じゃあ僕は食品売場に行つてくるから、買い物が終わつたらここで待ち合わせつて言つことで」

一方的にばにらさんに集合場所を伝えて、僕はばにらさんに追いつかれないようにそそくさと一階の食品売場に向かった。

ばにらさんに三万を渡すことにして、ためらいなんてモノは微塵もない。だから、心配すること何もない。別に彼女がそのまま三万を盗つて、どこかに消えたとしても、僕は騙されたと腹をたてたりはない。そのままいなくなつたら、なつたで、僕はそれでいいし、なんだ嘘だつたか、と笑い飛ばせる。たつた、それだけで済むと考えられるなら、僕は罪悪感を感じることなく、明日を迎えるのだ。三万で済むなら、僕にとって、安いものだ。

僕にとって、魔女である彼女を救えない罪悪感の方が、自分の命と同様にも重いのだから。

すぐに食品売場についた。そこには業務用の冷凍食品も置いてあり、何より値段が安いので、僕は自炊や、時たま、弁当のおかずを買いによく足を運ぶ所だ。

僕は魚介類のコーナーに向かい、安く、そして、量が多い生魚もしくはある程度保存の利く冷凍物を探す。牛とか豚、鳥でもいいのだが、沢山の量を買うと結構値が張るし、それに直接的過ぎて魔女を匿つてはいるのではないかと怪しまれてしまつ。だから、量も値段もリーズナブルな魚介類にした。

「何かお探しのようですね」

しばらくすると店員だらうか女性が話しかけてきた。僕は振り返つてその店員を見た。

話しかけてきた女性は若く、二十歳前半くらいだろうが、長いストレートの黒髪、灰色のワンピースに黒のレギンス着ていて、僕と同じくらいの身長でにっこりと微笑みながら僕を見つめている。僕は一瞬、動搖した。綺麗な人、どこかの令嬢みたいだ、とそんな好印象な第一印象が浮かぶ。

そのあとなぜか、この女性にずっと前に会ったような気がする。何時、何処で、何で、どうして会ったのかは思い出せない。それよりもおかしなことに気づいた。

ところでこの人は声をかけてきたんだ？

この服装からして、絶対にここのお店員ではない。そんな服装でも少なくともここのお店のロゴが入ったエプロンをしているはずだ。じゃあ何で話しかけてきたのだろうか？

「あのー、あなたは誰ですか？」

僕が恐る恐る尋ね、その女性は右手に手に持つていて落ち着いた色合いのバックから、黒い手帳らしきもの取り出して僕に見せた。

「私、こういう者なんですよ」

心欠落障害調査機関

捕獲員

有佐 百合子

機関の捕獲員つ！

僕は内心で動搖した。こんなに近くに捕獲員がいるとは思いもしていなかった。迂闊だった。体中から冷や汗が出てくるが動搖を表情に表さないように注意しながら、気を紛らわす用に僕は平然を装い、尋ねた。

「その、捕獲員が僕に何のご用ですか？」

「ちょっと気になつて声をかけたんですよ。まあ、一種の逆ナンだ

と思いください」

ナンパでこの捕獲員手帳を見せるのかよ。合図で自己紹介するときのネタだと勘違いしていませんよね？ 確かに食いつきはいいかもしないけど。

内心、この理解不能な状況に耐えきれず、泣きそうになった。

「……すごいブラックジョークですね」

僕は恐れず突っ込んでみた。

「ええ。うふふ」

百合子さんは笑った。良かつたと、何故か僕は安堵した。

「実は、魔女が餌につられてこう生物が並んでいる食品売場にやつてくることがあるので、餌につられてきた魔女をあわよくば捕まえよつと、ここで張り込んでいたのですが、やっぱり来ませんね」

百合子さんは、勝手に、何故、ここにいたかを親切に説明してくれた。

「はは、そうなんですか」

「あなたも気をつけてくださいね。まだ魔女が彷徨いでいるのです

から。…………それと、どこかであなたとお会いした事がありません

か？ 本当は、どこかでお会いしたことあるな～と思つて、声をかけたのですが…………」

急に百合子さんは僕にどこかで会つたかと訊いてきた。

当の本人、僕は、これは本当にナンパされているのだろうかと緊迫感のないことをちらつと思つていたりしていた。絶対に無いな。うん。

「へ？ さあ、僕にはさっぱり つ！？」

そうだ、思い出した。

この人は、あのときの新人捕獲員と言つていた人だ。

僕はあのことを思いだし、体中がふるえ出し、脂汗が止まらなくなる。呼吸も荒くなつていく。苦しい。くそつ、余計なことまでも思い出してしまった。

百合子さんは首を傾げて、何処で会つたのか思いだそうとしている

る。思い出せないのか僕に尋ねてきた。

「あの、失礼ですが、お名前は？」

僕はつっかえながらも答えた。

「遠藤 雅樹、です」

「Hondウ マサキ……、つ！？ あの時の……」

さすがに名前を聞いて思い出したようだ。やいや、一回聞くだけで、記憶に残るよな。あれは。

「ええ、そうです。あの時の馬鹿なガキですよ……」

僕は皮肉に、そして観念するように言った。

「あの…………」めんなさい。その、あの事を思つ出せてしまつて

「いいんですよ。気にしてない、とは言つて過ぎですけど、ある程度はなれましたから」

そう強がるように僕は言つた。

本当は全くなれてもいないし、最近になつてから悪化してきたのだが、百合子さんに心配はかけたくないないので、虚勢を張ることにした。

百合子さんは心配するように言つた。

「やつですか。ここであつたのも何かの縁ですし、何かあの事で心配な事とかありましたら、私に連絡してください。携帯電話は持っていますよね？」はい。これが私の携帯番号とメールアドレスです」

そうして僕はされるがまま、会話の流れで、携帯を出し、「百合子さんの携帯番号」とメアドを登録する。

「他的人に、自分が辛いと思つていてることを言葉にして吐き出すことで、気持ちが楽なるらしいですよ？」それは、人それぞれだと思いますが、私でよければ、いつでもお相手になつてあげます。それにあの事の話なら、少なくとも一般の人よりは、詳しく事情を分かっていますので、気軽に連絡してください」

そう百合子さんが心配してくれている中、僕の頭の中での光景がフラッシュバックして何も考えられなかつた。胃の中で何かが暴れ

て、口から逃げ出そうとしている。

一刻も早く、この場から立ち去りたい。

「ありがとうございます。僕、ちょっと急いでいるんで、それでは僕はそういうてこの場から立ち去りたとした。思い出話に花を咲かせるべき雰囲気なのだろうけど、その思い出が絶対に他愛もない話に発展しないし、ここで長々話すべきで内容ではない。そんなことを話していたら僕が発狂して、死んでしまつ。

唐突に百合子さんは僕を呼び止めた。

「あ、そうだ。もう一つ。お節介かもしけませんが」「はい?」

僕は振り返つて、百合子さんを見た。

「魔女に食べやせる餌は切り身より、内蔵系の方が喜ばれますよ?」

「…………」

僕は固まつた。

気持ち悪いも、さつきまで何考えていたのかも、すべて吹き飛んだ。ある意味、最高に効果的な治療方法だった。

動搖するな。もしかして、完全に疑われているのか、これは会つて全員にこうやって鎌を掛けているのか、もう分からぬ。だが、動搖だけはしてはいけない。そう自分に言い訳がせる。

だが、引っ込んでいた吐き気が再び強くなり、嗚咽する。

「大丈夫ですか?」

百合子さんが心配して近づいてくる。その表情は子供を諭すようなそんな微笑みで僕を見ていた。

寄つてくるなと言わんばかりに僕は、大丈夫です、と突き放す口調で言い、百合子さんから距離をおいた。

「それと、さつきのは凄いジョークですね。びっくりしましたよ

「ええ。うふふ」

百合子さんは笑っていた。性格悪いな、と感じた。

「では、お仕事がんばってください」

「はい。お体にお気をつけて。あと、気軽に電話やメールしてくださいね。なんでも相談に乗りますから」

僕は一皿さんトイレへ、逃げるよつに向かい、個室に入り、吐いた。

殆ど胃液しか出でこなかつた。

そこでうずくまり、恐怖が体から去つてくれるのをひたすり待つた。

三十分後、少し気分が楽になつた僕は何事もなかつたよつこ、トイレから出で、ばにらさんとの待ち合わせ場所へと向かう。たぶん、彼女は僕と違つて、ちゃんと買い物をしているだらう。

あんぐりー！ H o n u k i ー A n g l e 9 / 1 8 1 2 . 5 4 ( 前書き )

誤字脱字などあつまいたら指摘お願いします。

「そつちばどうだ？」

『全然駄目ね。牛肉とか魚とか沢山買おうとしている買い物客がいるか見張っていたのだけれど、今は一人もいないわ。やっぱり、手帳を見せて魔女の餌は内臓系がいって鎌かけているのが間違いなかしら』

「……」

『最初に話しかけた高校生くらいの年の男の子はね、手帳を見せたら顔色変わったから、この子は魔女を匿っているみたいだと思つて鎌かけたみたら、案の定、思いつきり動搖して、私の前から逃げるよう立ち去つたのよ。これはこの子で決定だな、でも一応、他の人にも試してみようつて、確認のために他の人にも手帳を見せたら、その男の子と同じような反応したのよ。繰り返している内に、誰が魔女が匿っているの！？ まさか全員！？ つて混乱しちゃつたのよ。鬼灯君、私、どうしたらいいと思つ？』

「……あんな、誰だつてなあ、世間一般で魔女と同じくらい忌避されている捕獲員に疑われていると感じたら、顔色ぐらいいえると思うぞ。あと最後の鎌かけが最悪だな。そんなことを自分を疑つてゐる素振りをしている捕獲員に言われたら、俺だつて、何かしてくる前に逃げる。そんなことよりも、よく店から追い出されなかつたな？ そんな営業妨害して」

『今さつき、店から追い出されたわよ。捕獲員じゃなかつたら警察呼ばれていたわね』

「……三年くらい一緒に仕事してきたけれど、あんたが賢いのか馬鹿なのか本格的に分からなくなつてきた……」

『それは、女の子の気持ちに鈍感な鬼灯君には絶対に分からぬことね』

「余計なお世話だ」

『ところで、こなちゃんの情報収集はうまくいってるの？』

「ああ、こならの情報収集によるとだな、最近学校に急に来なくなつた女子生徒が一人いるらしい。そいつが魔女かもしけないから、今から家に押し掛けるとこ、だな」

『ふうん、それは大変ね。じゃあ私は警察署でも行って、死体の身元と検視結果が出てないか確認してくるわね』

「最初からそこに行けよ。つーか、警察署はマスクミとか多いから入れるかどうかわからないじゃないじゃないか？ あー情報規制してるから集まらないか」

『そこはコネ使うから大丈夫。色々あるのよ。鬼灯君が知らないあんな事や、こんな事が「あつそ」

鬼灯は電話を切つた。こうやって切らないと百合子は永遠と喋り続けるからだ。

「百合子さんはうまくいってましたか？」

丁度よく、こならが若者向けの服屋から戻つて来た。

『こ周辺の学校は休校になつてている為なのか、暇を持て余した命知らずの若者たちがこいつショップに屯しているのだ』

鬼灯とこならは若者向けの（特に女子が好きそう、或いはその類のショップ）を周り、最近急に休んでいる子がいなか情報収集する。

身内が魔女を匿う場合、外に出て誰かを襲つてしまふのと、周囲に魔女だと悟られるのを防ぐためか、魔女を外に一切出さずに、学校には病氣であると長期欠席の連絡することが多い。

だから、その手の微妙な空気に敏感で、話題や刺激に飢えている中高校生の女子に聞いて回るのが手つとり早い。

前は（今もだが）情報収集は百合子がやつていたので、あんまり（下手すれば全然）あてにできなかつたが、こならが入つてきたからは鬼灯は任せつつきになつていて。その任せる理由が、俺が女子向けの店に入ると怪しまれるし、声かけるとナンパと勘違いされるからだ。と本人は言い張つていて。

「全然駄目だつたそつだ。本当にあいつは仕事しているのか？」

「今日は魔女が多いかもしれないから、一手に分かれましょうつて百合子さんから言い出したのですから、たぶん仕事しますよ……、たぶん」

「こなはは素直に言つた。

「おまえにまで言われるとは、あいつ……、本当に駄目だな。見た目は真面目で何でもできそうな雰囲気なのに。ところで、おまえが持つてるのは袋は何だ？　さつきホームセンターで買ったヤツじやなさそうだし、ここで気に入ったの服でも買つてきたか？」

鬼灯はこなはが持つていた服屋のロゴが入つた紙袋を見て訊いた。こなはは少し狼狽えたながらも答えた。

「えつ、これですか。えーと、これは、その不登校の女の子が通つている学校の制服ですよ。さつき情報提供してくれた人と同じ学校の人がいて、制服もつてたんで借りたんですよ。サイズもあつてましたし」

「ああ、なるほど。それ着て乗り込むつてわけか。乗り込む時、今 の格好よりは怪しまれないもんな」

「そうです。そうですよ！　それより先輩、わたしの制服姿、見たいですか？」

「こなはは楽しそうに訊いてきた。

「見たい。……つて素直に返せばいいのか？　なんかそれだと変態っぽくて、言われた相手も素直に喜べない氣がすると俺は思うんだが」

「こなははあからさまに不満な表情をする。

「……はあ。せめて見てみたいな、程度の反応だつたら、私も頑張りがいがあるし、嬉しかつたんですけどね。あと、そこまで気が回るんだつたら、わたしが見たいですかと訊いた時点で、こいつ、見せたいんだな、ぐらい考えてくださいよ」

「そもそも考えたが、昔そつ返して……、うん。ひどい目にあつたんだ……」

鬼灯は遠くの方を見て言った。

きつとその向こうに、とある女性がうつぶふ、と微笑んでいるのだろう。

悪魔のようだ。

「……そのお相手が、わたしの田代も浮かぶのは、どうしてなんでしょう？」

「本当に女って分からないな……」

「いや、あの人気が別格で凄すぎるだけだと思いますよ、たぶん」

そんな他愛もない会話を終わらせ、鬼灯はこならが借りてきたと言った制服をバイクの収納のところに入れさせた。

そして、先ほど百合子との電話の話題で出た、急に不登校になつた女子生徒の自宅付近で、こならが制服に着替えるための場所を携帯の地図機能で探す。

「それと、百合子さんは次はどこへ向かうって言つてましたか？」

「警察署だとさ。検視結果が出てないかと、死体の身元確認して、その遺族に年頃の娘がいなか確かめるんだと」

「こちらにもその情報を回して欲しいですね」

「回してくるに決まってる。百合子は一人では戦えないからな」

鬼灯は携帯しまい、こならにヘルメットを渡す。二人ともヘルメットを被つてバイクに跨る。目的地はと、鬼灯は脳内でさつき見た地図を思い浮かべて、その場所を田指してバイクを走らせた。

誤字脱字などあつまつたら指摘お願いします。

百合子さん前から逃げだし、トイレでこの嫌な気持ちが落ち着くまで吐いて、少しだけ気分を良くしたあと、僕はばにうりさんとの待ち合せ場所に向かつた。

待ち合せ場所に着くとばにうりさんの姿はなかつた。

まだばにうりさんは着ていないか。それもそうだ。分かれてから三十分ぐらいしか経つていない。女の子の買い物はえらい時間がかかるものと世間一般で言われているけど、そんなの人それぞれだと僕は思うし、ばにうりさんも追われている身だから早く買い物を済ませるだらうなと勝手に思つた。

食品売場には捕獲員の百合子さんがいるため、ばにうりさんに食べさせる食料が買えない。帰りにどこかスーパーにでも寄つて買つしかない。だが、百合子さんがこここの食品売場で見張つているのだから他の所でも、別の捕獲員が見張つているのかもしれない。ならばコンビニで売つているビーフジャーキーならどうだらうか。加工されていなければ、干し肉でも食べられるはずだ。でもあれつて量が少ない割には高い、さらに塩胡椒振つてあるから食べれなかつた場合を考えるととても痛い出費となる。洗つて塩胡椒を落とせば食べれるかな？ いやでも量が…………。

なんて色々と策を考えている内に、ばにうりさんが服屋の紙袋とビニール袋を持つて戻つてきた。

「三万で足りた？」

「うん。十分だつた。服も一着買えたし。もちろん肌着とかも」

「足りなかつたらなら遠慮しない言つてね？ 何度も来るのは流石に立つから」

「うん。大丈夫」

「そつか、じゃあ早く帰ろうか。近くに捕獲員もいることだし」  
僕はうつかり言つてしまつた。ばにうりさんの表情が急に険しくな

りに頻りに当たりを見渡しはじめた。僕が捕獲員が近くにいると言つたから、このフロアにいると思つたのだろう。

「大丈夫。その捕獲員は一階の奥の食品売場付近にて、そこで魔女が来ないか見張つているんだ。だからその捕獲員はここには来ないよ」

ばにらさんに着いて来てと言い、ショッピングモールから出でようとする。もう一人くらい捕獲員がいるかもしないと辺りを見渡し、そのような人がいかに確認して見るが、捕獲員の殺気に似たような雰囲気を嗅わしている人がいるとは感じられなかつた。百合子さんみたいなそんな気配すら持たない人がいたが、そもそも自分自身にそんな気配を感じる能力を持つていない、言い換えれば、鈍感なだけなのか、よく分からぬが、どう考へても後者だろうと拳動不審にならずに自然な素振りで外に出た。問題なくでられたところからして、ショッピングモールの出口付近にはいなかつたらしい。「誰にも気づかれなくて良かつたね」

「うん」

ばにらさんはさうちなく笑つた。僕はここで初めてばにらさんが笑うところを見た。その笑顔を見れて何故かとても嬉しくなる。

「ここではばにらさんの夕食を買えなかつたから、途中どこか、スーパーにでも寄つて買って帰らないと」

僕がそう呟くと笑つていたばにらさんが暗い表情になつて、立ち止まつてしまつ。同時に僕も立ち止まる。どうしたの、と声をかけようとした瞬間、ばにらさんは俯き、小さな声で言つた。

「わたしは……まだ大丈夫。……その、食べたばかりだから……」

「…………」

食べたばかり。

僕は察せるはずだつた。

ばにらさんが着ていた白いワンピースが血に染まつてゐたことがら察して、その捕食行為を行つたことくらい簡単に想像することはできたはずだ。

だが、あの記憶が邪魔をした。

あの一番大切で、一番忘れない記憶が。

また思い出してしまった。今度は違うシーンだ。僕は震えそうなる体を必死に抑制し、ばにらさんの強がって、冷静を保つような素振りをした。きっとばれなんだろうな。

僕はばにらさん以外誰にも訊かれないような小さな声で訊いた。「訊いちゃいけないことだつて、分かっているけど　　どのぐら

い食べたの？」

ばにらさんは泣きそうな声で答えてくれる。

「……分かんない。でも、少なくとも、三、くらい」

「そりなんだ」

それを最後に僕は口を閉じてしまった。なんて声をかけてあげればいいのか、僕の頭では思いつきもしなかつた。ばにさんもそれつきり何も言わずに黙ってしまう。

お互い何も発しないまま、黙々と僕の部屋があるマンションまで歩く。大通りも車の通りはいつも通りなのだが歩いている人は全くいない。狭い道に入ると人っ子一人居らず、今日は時折、警察官が見回りの為にいつもよりも多く居たが、それ以外は特になくショッピングモールに行くときと同じように閑散としていた。

しばらくして、マンション前まで着いた。僕の部屋は七階にあるため階段で上つていくとなると結構疲れるが良い運動になるため、僕は普段はそちらを使う。今回ばにらさんも連れているから一刻も早く部屋に戻りたかったのでエレベーターを使った。

僕たちはエレベーターに乗り込んだ。

沈黙。

僕は何か、何かと頭の中をフル回転させ、気の利いた言葉を探す。このまま、部屋にはいつてまでも沈黙のままいるのは辛い物がある。速めに処理しておきたい問題だった。だが、ボキヤ貪の僕にとつてそれも辛い物だった。

でも、言わなくちゃいけない。

そう想い僕はばにらさんに向かって声をかけた。

「あの、ばにらさん」

流石に監視カメラがあつても、録音はしていないだろ。だから声に出して伝えるのは躊躇う必要はない。

「な、何？」

「僕はどんなに、ばにらさんが……、あの、その、食べたつて、絶対に僕は、恐れたり、見捨てたりはしないから、そこは安心して」  
僕は格好つけるように言うつもりではなかつたのだが、思ったよりキザつぽく言つてしまい、なんだか僕は恥ずかしくなつた。

そう言われたばにらさんはすつと俯いていた顔を上げて僕を見て言つた。

「……ありがと」

僕は少しだけ嬉しくなつた。

「どういたしまして」

邪魔するかのようにチンツ、と音がして、前のドアが開く。すぐに七階に着いたようだ。日頃から階段で上つてゐるからか、ものすごく早く着くんだと驚いてしまつた。

僕とばにらさんはエレベーターからである。僕の部屋に向かおう歩きだしたが、僕の部屋の前で立つてゐる人がいた。何か僕によくもあるのか、それとも、魔女がここで匿われていると気づかれ、捕獲員が部屋の待ち伏せしているのか。僕の頭の中では色々と憶測が飛び交つたが、僕の部屋の目の前に立つてゐる人の顔を見て捕獲員ではないと分かつた。

だが、捕獲員の次に今、出会いたくないやつがそこにいた。

「ようつ！ 忘れ物したから取りに来たん、だけ、ど……」

珠奈は僕の姿を見て忘れ物を取りに来たと言おうとしたが、僕の後ろから続いて来るばにらさんを見つけ、凝視してゐた。

「その子は、何で、雅樹の服、着ているの？」

彼女にとつての不安要素なのだろうか？ その疑問を僕にぶつけてくる。僕の服を着てゐるということは、…………。それなり

のことがあつたと想像するだらう。その誤解を解くために話さなければいけない。しかし、今ここで立ち話をして、他の誰か、第三者に訊かれ、魔女を匿つているとバラされたら一巻の終わりだ。

「それは……、ここだと誰かに聞かれるかもしないから、部屋にはつてから説明する」

珠奈に部屋に入るよひに指示した。珠奈は素直にしたがつてくれた。

その姿を見た僕は、珠奈なきつと分かつてくれだらうし、理解もしてくれるはずだと、なんの根拠もなく、そう勘違いしていた。僕は、ずっと後になつて、空っぽの信頼を彼女に押しつけていたのだと気付くのだった。

誤字脱字などあつまいたら指摘お願いします。

あなたは他の誰かを憎んだことはありますか？

例えば、

あいつがいなれば一番だったのに、とか。

あいつだけのうのうと生きてんだ、とか。

あいつの才能が妬ましい、とか。

あいつだけが評価されているんだ、とか。

あいつはどうして成功すんだ、とか。

あいつだけモテるんだ、とか。

あいつだけあの人に好かれているんだ、とか。

そういう風に思うことなんて、今までの短い人生のなかでも沢山ありすぎて、最近じゃあ、自分の中の話題にすら上がっていないですね。

まあ私、そんじょそこらの単なる平々凡々な女子高生が何語つても意味もないですし、寧ろ、無駄しかないですし、そんな戯れ言を聞くだけ人生の無駄ですし。

時間がもつたないので簡潔に伝えますね。ここは、これだけ読めば大丈夫です。あとは読みとばしてください。

私、珠奈は雅樹の隣にいる女を憎みました。

買い物ついでにショッピングモールに寄ろうとしたら、偶然、片思いの彼がショッピングモールから出て来たんですよ。

あれ、さっき手伝わないとか言ってたくせに、なんでこんな所にいやがんだー、と弄つてやろうと思つたんですよ。

そしたら、

次に出てきたのは、その彼が前に着ていた服と、全く同じ服を着た女でした。

一瞬で頭の中に妄想といつねの怪物が心をぐりやぐりやに踏みつぶしました。

しかも、微笑みながら、その彼の隣に着いていきます。

ナニ、アイツ、モシカシテ、ワタシヲサシオイテ、カレノマエテ、マタヒライテ、オトシタッテイウノ？

その彼も笑っています。私には見せたことのない表情です。

アア、モシカシテ、サキコサレタノカ。

ナニ、アイテカラキテクレルダロウトオモツテイタカラ、コウナツタノカ。

コンナニコウカイスルナラ、ハヤクコクツテ、イッショニネテ、キセイジジツヲツクレバヨカツタノニ。

ニクイ。

「ロシタイ。

私はこの鬱憤と憎悪をため込んだまま、逃げるようにその場を去りました。走ったので心臓がバクバクっていました。ある程度離れたところで、彼の隣いたゴミが何かをしたと思い出した途端、吐きました。

靴が自分がはいた吐しゃ物で、でろでろに汚れました。口の中が苦酸つぱくて、気持ち悪くて、悔しくて、泣いてました。

すぐに寝取つてしまいたいと考えました。でも、彼を悦ばす程の自信もありません。あのゴミを殺してやろうかと思いました。でも、殺したら彼も悲しむだらつと想つとできません。

彼が振り向いてくれるとは考えられません。

だから、私は努力しました。勇気を振り絞りました。

彼の家まで先回りして、合い鍵（彼が隠している場所はとっくに確認済み）で部屋に入り、わざと荷物を置いておき、鍵を閉めて、鍵を元の場所に戻して、部屋の前で待っていることこしました。

数分後、彼とゴミがきました。

まず、事情を聞かなければ、ちゃんと怒ることもできませんからね。

誤字脱字などあつまいたら指摘お願いします。

雅樹とばにらが去った後、ショッピングモールの駐車場に一台の黒いクラウンが入ってきた。その車はバックで駐車せずに、頭から入れて止めた。

運転席から一人出てきた。

「はあー、疲れた」

背伸びをしている長身のショートカットの二十代後半くらいの女性が言った。

その女性の服装は白い開襟のワイシャツに紺のジーパン、首からはかぎかつこのような形が一ついてあるネックレスを下げている。顔は綺麗と形容しても良さそうなのだが、つり上がった目と口元から見える八重歯せいで野生的な印象をあたえていた。

「ご苦労様、でもまだ仕事が残っているよ？」

助手席から中学生くらいの緑色のパークーに紺のハーフパンツの少年が出て来て、運転していた女性の隣に行く。

ぱつと見では性別の区別がつかないくらい中立の顔立ちで、背はたぶんその年にしては低いと思われるくらい小柄だった。隣にいる女性の背がかなり高いため比率でさらに低く見える。

「そんなあこつた知ってるわ。俺様はここまで来るのが疲れたっていつてんだぞ？ クソッ、上の奴らが手配してきた車がマニュアルとか、俺様に対する当てつけだろ？」

けつと口悪く、愚痴を吐いた。

「ふきつて、男っぽい性格の割には、そういう機械操作とか苦手だよね？ 高速入る前にエンストした時は、流石にびびったよ。僕もまだ生きていきたいから、帰りは安全運転でよろしく

「うるせえ。文句あんなら、俺様にMT寄越した上に言え」

「ふき、僕がそんな権限があると思う？」

「何いつてんだ？」

葛？

かずら

ついに俺様より先に呆けたか？ 寝言は

对外にしろ。お前は俺様を生かすほどだ、かなりあるはずだろ？」

ふきは大人げなく、葛に暴言を吐いた。

「それはそれ。これはこれだよ」

「何がだ。まあいいさ。さっさと仕事を終わらせちまおうぜ。で、

今回は誰を殺すんだ？ つて、毎度ながら、訊いても意味ねーか

「いや、今回は珍しくターゲットがいるんだよ」

葛がクラウンの後部座席に置いてあつたバッグを取り出し、その中からここ周辺の地図などが挟まつているクリアファイルを取り出す。

「ふーん。写真でもあるのか？」

「うん。ほら、この人だよ」

クリアファイルから挟まつていた一枚の写真を取り出して見せた。

「……、フツーの顔の奴だな。名前は？」

「遠藤 雅樹。17歳で出身高校は……」

あんぐりー！ M a s a k i A n g o - e × × × × × (前書き)

誤字脱字などあつまいたら指摘お願いします。

昔、僕は姉が好きだった。  
愛していた。

「ねえねえ、お姉ちゃん」

「なあ～に、マサちゃん？」

「お姉ちゃん、大好きだよ」

「ありがと。お姉ちゃん、とっても嬉しい」

僕がそう言うと姉は必ず笑顔になつて、そつと抱きしめてくれた。  
輝いていた笑顔が、柔らかく暖かい抱擁が、鼻孔をくすぐる甘い  
香り、姉のすべてが好きだつた。

僕は何度もその快樂を味わいたくて、自慰行為を覚えた猿のよう  
に暇さえあれば姉に「大好き」と言い続けては、姉に抱きしめられ  
て快樂に溺れていた。

その頃の僕は愚かだった。どうしようもない、愚かな子供だった。  
あまつ、僕が「大好き」と言えれば、どんなに姉は落ち込んでいて  
も、すぐに笑顔になつて元気になつてくれるんだけど、途方もない勘  
違いはじめた。自分のげひな行為を正当化してまで思い込んだ。  
僕は姉にとつての大切な人 僕が姉を救つて上げられる唯一の  
人間なんだと馬鹿な妄想に完璧に酔つていた。

友達からはべつたりと姉にくつづいている僕をシスコンと言つて  
避難され、両親からは、異常なまでに姉離れできていない僕を変な  
目で睨んでいた。僕はそんな視線になんて気にも止めていないし、  
ただ一線さえ越えなければいい。それくらい子供にだつて分かると  
思い上がって、快樂に浸つっていた。

だが、一瞬で理想は崩れ、海岸で作った砂の城が波によつて削ら  
れて、バランスを保つことが出来ずに削られた方に倒れていくよつ  
に、形を留めず、最後には波に全て均されて何も無かつたように、

綺麗やつぱりと無くなってしまった。

醒めない夢から醒めてしまった。

あの黒い、得体の知れない、サバドと呼ばれるヤツに言われてからだ。

「君、ちつとも面白くない人生を送つていいのね？ それって生きている意味あるのかしら？」

「？」

「分かりやすく説明すると、君の人生はありふれているのよ

「……」

「そう、誰にでも考えられて、そして誰でも終わりが見える、そんな安い人生。それってつまらないと思わない？」

「……別に、それでいい」

「やつと口を開いてくれたわね。確かにそのままでも、今の君にとっては良いかもしない。でもね、安っぽいと何年か経つたら意外と飽きるわよ？ それもありふれている台詞をいつの。なんで飽きたんだろう？ ってね」

「そんなことはない」

「決めつけない方が良いわよ？ もし、その通りになつたときに逃げ場を失うから

「……」

「たとえ、君が飽きなくても、お姉さんの方から飽きりやつたら、君がどんなに頑張つても無理、無駄になつてちやうのよ？ それに人間は神では絶対ない、そこら辺の生物と基本は同じなのだから、必ず飽きるようついて出来ていいのよ。そうすれば多く、からに強い子孫を産み、繁栄してくれるしね。それに近親の場合だつたら、もつと早く飽きる可能性があるわね。ほとんど同じ遺伝子じやあ、体が相手を拒絶するし

「……どうして？」

「当たり前でしょ？ 生物学的」とは、どうでもいいから我慢するしかないとして

「それでも、そういう物語だってあるじゃん……」

「それはあくまで売り物のフィクションで、決まって事件やそれ違った、必ずって言つて良いほど、ハッピーエンドで締めるでしょ？ その方が売れるからそつなつてているの。それに比べて、現実は救いようもないハッピーエンドが沢山ある。君だって、そんな気分が暗くなる物語なんて、つまらなくて飽きるし、わざわざ、なげなしのお小遣いを出して買うこともしないでしょ？」

「……」

「それにハッピーエンドになる原因は、自分たちのせいではない方が多いの。社会とか、倫理とか、金とか、ホント、くだらないもので縛られて転ばされて、拳句自分たちの所為にされちゃうのよ」

「……」

「泣かない、泣かない。君はずっとお姉さんと一緒にいたいものね？ 出来れば永遠に好かれていたいものね？ でも実はね、それは簡単のことなのよ。しがらみや倫理や社会を踏み越えて、永遠にお姉さんと一緒にいたい、その関係を続けたい、そうなりたいと願うなら、どうしても良い、と他の奴らに思わせられる程の特別なことをすればいいのよ。ああ君たちはそうするしかないんだ、みたいにね」

「……特別？」

「そう、君とお姉さんとの特別な力、生物の性を越える物を手に入れれば、ね？ だから」

僕はその時、姉を笑顔が頭の中で、浮かんだ。

そして、その笑顔が、体が、心が、全部、姉の全てが僕の為、僕以外には絶対に向けられず、独占できると、信じてしまった。

だから、僕は、



言われた通り、姉を呼び出し、サバドに売り渡して、特別を手に入れた。

そして、姉と僕は特別によつて、永遠の関係になつた代わりに、

姉は心臓を失い、魔女になつて、両親を殺して、食べた。

まじないっ！ K a z u r a A n g o - e ( 前書き )

誤字脱字などあつまいたら指摘お願いします。

## まじないっ！ Kazura Angle

『呪』って漢字は本当に面白いよね？

だって、呪いも、呪いも一緒に漢字を当てられるんだよ？

藁人形に五寸釘突き刺して憎い相手を念力か何かで殺そうとする呪いと、恋い焦がれる女の子が好きな男の子と両想いになりたい願う呪いも、同じ漢字を使うんだ。

それってさあ、どちらも同じ効果があるから同じ漢字を使つているってことだよね？ 確かに根本的には“願いを叶える”だから、あながち間違っちゃいない。

もつと調べれば、詳しいことは分かるけど、ここは敢えて調べないよ。そうしないと次に言いたい事が言えなくなるからね。

何が言いたいのかつて言つと、『人を呪わば、穴一いつ』って、お呪いでも同じことが言えるんじやない？

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

「先輩、どうですか？ これ似合いますか？」

赤いリボン、紺のブレザーの下に白地のブラウス、チェックのプリーツスカート。鬼灯は着替えたこならを見て言った。

「お前の制服姿つてみたことないから新鮮だな。似合つているぞ」

「えへへ。嬉しいです」

借りてきた制服に着替えたこならは、鬼灯に似合つと言われて嬉しそうに笑った。

鬼灯とこならは、最近不登校になつた女子生徒の自宅へと向う途中、こならがその不登校になつた女子生徒が通つている学校の制服に着替えるために、公園の公衆トイレに寄つて着替えた。

こならは、何んでこんなところで着替えさせるのかと不満を鬼灯にぶつけ、鬼灯はコンビニとか服屋とかだと怪しまれるだろと言い返した。さらにこならはそれなら車とかホテルとかあるでしょと突っ込んだ。鬼灯は一瞬、不埒な所を考えてしまい、顔には出さずに自己嫌悪していたり、色々あつて今に至る。

こならは嬉しそうに自分が着ている制服を見ている。捕獲員の中にも高校に通いながら仕事をしている人も少なくないが、こならは色々な事情があつて高校に通つてはおらず、捕獲員の仕事をしているので、高校の制服を着るのは初めてだつたらしい。

「スカートの丈はもつと上げた方がいいですか？ どのぐらいの丈が丁度いいのか、借りたときに訊けば良かつたですね」

鬼灯はこならが穿いているスカート方に目線を下げる。十分短いでは？ と鬼灯は思う。

「学級委員長風で乗り込むんだから、逆にもつと下げる方がいいじゃないか？」

偏見だけだと付け足した。

「これ以上は下がられませんよ？」

「なら無理に上げ下げしないで普通に着こなせば大丈夫だから。寧ろ、お前の口の巧さと演技によって成功するかに掛かっているんだから」

「そういう鬼灯は携帯を取り出して操作し、ここ周辺の地図を出す。不登校の子の家の住所、教えてくれ」

「えーと、確か、4丁目6番地の12ですね。先輩、一回言ったのに忘れたんですか？」

「いや、確認のために訊いただけ」

こならに確認のために訊いた住所を打ち込み、この公園から不登校の女の子の家までのルートを決める。土地勘もないから大きい道路に沿つて行くか。こればかりは目立つても仕方がないなと鬼灯は思った。

「服はバイクの収納の所でもに入れておけ」

「はいはーい」

こならはバイクの収納スペースにさっきまで着ていた服を入れた紙袋をしまった。その間に鬼灯は、百合子にそろそろ戻つてこいとメールを打つ。鬼灯とこなら、一人だけで魔女一人を捕まえるのは苦労はしないのだが、後始末に時間が掛かるので、厄介な後始末を今回あまり役に立つてない百合子に押しつけようと企んでいた。「ある程度近くまではバイクで行つて、あとは徒歩で向かうからな」「了解です。バイクはどこに止めるんですか？」

「止めないで、押していくんだよ」

「それなら最後まで乗つた方がいいのでは？」

「どこの高校生の学級委員長が、無免許で大型バイクに跨り、不登校の子の家に訪問するんだよ？思いつきり怪しまれるぞ？」

「確かにそうかもしません。ですが、そこは敢えてそこはやりましょう！熱血学園モノっぽくて、一般的に受けが良いと思います

つ！」

「ドラマ的にだろ、それ？バカなこと言つてないで、さつさと行くぞ」

「はーー」

鬼灯はヘルメットを被つてバイクに跨り、エンジンをかける。こならもヘルメットを被つてバイクに乗ろうとするが、鬼灯に止められた。

「なあ、そのまま乗ると、走っているときに、たぶん、見えるぞ?」

「へ? ああ、そうですね。じゃあ、これは日頃お世話になつている先輩へのサービスと言つことで。ガン見しても構いませんよ?」

そう言われた鬼灯は盛大にため息をついた。

「そのお気持ちは男として嬉しいが、運転しているときどうやって後ろ振り返れと?」

見る前に絶対事故るぞと言つた。

「男の人つて、例え死んだとしても、そういうの見たいんじゃないですか?」

こならは一矢一矢と見つめながら挑発するように言つた。

「少なくとも俺は、残りの人生をかけてまでは見ないな。潔く、コンビニでその手の本を買つ。さつさと何か穿け。さつさまで穿いてたのがあるだろ?」

「それはさつきしまつちゃいました。まあ別にスペツ穿いているんで問題ないんですけどね」

「…………最初からそういうえよな」

氣を使って損したと言わんばかりにうなだれた鬼灯であった。

「あ、それと」

「なんだ、今度はどんな色仕掛けしてくるんだ?」

「……先輩、なんかひねくれてますよ? 怒つているなら謝ります。ごめんなさい」

棒読みで謝るこならだつた。

「謝る気がさらさらないな。もつなんでもいいから、あの合法魔女みたいにならないでくれよ? 一人いるだけで俺は、もう精一杯なんだから」

「先輩の中では百合子さんは魔女なんですか?」

こなはは哀れみの視線で鬼灯を見ていた。

ふと、鬼灯は疑問に思った。

「まで、ここの周辺の学校つて、魔女がいるから今日は休校になつてるんだよな？」

こなはの顔がひきつった。あ、ばれた。とくつきりと顔に出ていた。

「え、ええ。ソウデスヨ？」

声が上擦り、たらたらと冷や汗が顔から出でてきている。

「それなのに制服を着て乗り込むのは、おかしくないか？ その前にどうやって借りれたんだ？」

最後のセリフには、お前の体系で他の人に借りれるものがあるのか？ という意味合いもあつたのだが、これを言うと立場が逆にならかねないのであえて言わず、鬼灯はこなはを追求する。

「…………エエ、ソウデスネ？」

こなははすたすたとその場から逃亡しよつとした。

「までや

即捕まつた。捕獲員の名は伊達ではない。

「逆に立つぞ？ その格好は」

「…………すみませんでした。その、あのお店で進められて、こういうの一度着てみたいなーって思つて、勢いで買つちゃつて、早く着てみたいなーって思つて……」

「それで、今に至ると？」

「はい……」

こなははしゅんとして申し訳なむけつにする。

そんな姿を見て、怒るにも怒れなくなつた鬼灯はため息をついて言つた。

「まあ、お前の制服姿を見れたから、いいんだけどな。やつれど元の服に着替えてこいな」

そういうわれたこなは少しだけうれしそうに返事をした。

「はい」

元の服に着替え終わったこならは鬼灯に向かっていった。

「今回の魔女対策の仕掛けは、先輩のバイクを使います。どこか紐をくくりつけられる頑丈な取っ手みたいなのはありますか?」

「後ろの荷物乗つけるところに括りつけられると思うが、俺が手に持つんじゃ駄目なのか? その方が楽でいいと思うが」

「先輩の手、特に指が危ないからそれはダメです。あと片手運転も危ないので止めてください」

「知ってるか? バイクの方向指示のランプが付かなくなつたら場合、片腕を使って方向指示しなければいけないことを。それとバイクに何か紐を括りつける時点で相当危ないからな?」

ため息い一つついてから続ける。

「あとお前がやりたいことが大体分かつた。確かにその方が簡単に処理できるからいいかもしねないな」

「さすが先輩、血生臭いことだけは察しがいいですね」「それは誉め言葉として受け取つておこう」

こならは鬼灯が乗つていてるバイクに乗り、鬼灯の腹部に手を回し、体を鬼灯の背中にくつつけて言った。

「そんな先輩のポジティブなところがわたしは好きですよ?」

「じゃあ、その台詞を俺は前向きに考えるぞ?」

鬼灯が後ろにいるこならに向かって一泡吹かせようと言つて、反応を見るため振り返つた。

「望むところですよ」

こならはニヤリと不適な笑みを浮かべる。

「……本当に百合子に似てきたな」

鬼灯とこなら同時に笑つた。

バイクを発進させ、不登校になつた女の子の家の方へと走る。

「先輩が百合子さんのこと気にしてるから、わざと似せている

んですよ

こならが小さな声でぶつぶつ発し、聞き取りにくくなってしまった。  
エンジン音と風を切る音でかき消されてしまつ。

「なんか言つたか?」

「何も。さつと空耳ですよ」

こならは笑つて、優しい嘘ついた。

さつと伝わつてくれる日が来る。  
そう、願いながら。

イチャついている一人は気にしないでください。ただ、書きたかっただけです。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

「ふーん。それで魔女 ばにらさんを匿つて いるんだ」

僕は珠奈にばにらさんのことと今までの経緯を説明した。珠奈は僕が説明し終えるまで口を挟まず、ただ受け手に徹していた。そしてこの発端の張本人であり、なお現在この国で一番のお尋ね者と言われているばにらさんは、ペたりとフローリングの床に座つて説明している間、居心地が悪そうにオロオロしていた。話に入つても良いのか、どのタイミングで入ればいいのか、色々と躊躇っているうちに話が終わってしまい、役に立てなかつたことに落ち込んでいるようだつた。

珠奈は視線をそらはずに僕をじつと見てた。

「だけど、雅樹が魔女を匿つて いる理由が分からぬ」

珠奈はきつぱりそういうた。先ほど珠奈に話した説明には一言も言つてはいない。話した内容はここまで経緯だけで、どうして、ばにらさんを助け、こうやって危険を冒してまで匿つて いるかの理由を一切話さなかつた。

ばにらさんを匿つた理由がないとか、ただ匿う代わりにいかがわしい行為を求めてたから言えないとか、そういうわけではなく、その理由を思い返すだけで、僕はトラウマに発狂したくなるから話なんかつただけだ。ばにらさんを見つけたときも、僕はあの血にまみれた光景がフラッショバックし、もう死にそなぐくらい恐怖に足が震え、倒れそうになつたくらいだ。さらに見て見ぬ振りをして、その場から立ち去る、なんてことをしていたら、その後、罪悪感に压され、僕は飛び降り自殺していたかもしれないし、少しでもその罪悪感を減らすべく、自らこの身を魔女に捧げたかもしれない。「ごめん、そのことは、なんて言うのか、話したくないんだ……」「どうしてなの？ あたしに聞かれて欲しくないことなの？ それは雅樹がここで一人で暮らしていることと関係しているの？」

珠奈が追求してきた。それはそうだ。珠奈には僕が言うことは不倫した男の言い訳を言つてゐるみたいに胡散臭く、そして遠回りして核心には近づけさせないようになに聞こえるだろ？

「……珠奈に知つて欲しくないし、ばにらさんにも知つて欲しくないことなんだ」

それでも言えなかつた。

そもそも、言えるわけがない。

例え、珠奈に僕を今まで苦しめている過去を、赤裸々に話したとしても、仮にばにらさんにも言つたとしても、僕の中からその忌々しい過去は消える訳でもないし、一人に知られ、さらに消せるはずもない物と化してしまう。それなら言わない方が僕の中だけで処理できる問題で在り続ける。その方がいいに決まつてゐる。慰めてもらいたいわけでもない。というより、僕の過去を聞いた時点で、二人は僕を慰めてはくれやしないだろ？ 話せば楽になるかもしれない、と僕の過去を知つてゐる 現にその場にいた百合子さんは言つていた。樂になれるならそれでいいかもしない。ぶっちゃけ、死んだ方が簡単に樂になると思つ。

だが僕の場合、事前に知つていても、その場にいたとしても、その気持ちを共有出来るものではない。

それは、無理なことで、人として、外れたものだから。

珠奈は黙つたまま僕を睨んでいた。僕も黙つたままだつた。これでは永遠に話が進まないと察し、諦めたように珠奈は話題を変えた。

「……これからどうするの？」

「とりあえず、ほとぼりが冷めるまで、ばにらさんを匿つ

「それはできっこないよ。だつてここ周辺には魔女が必ずいるつてみんな知つてゐるんだよ？ しかも捕獲員までいるし、当たり前に警察もいる。ここ一ヶ月、魔女が人を食べていなかつて、ここにはいません。どこか別の所に移動したんでしょう。だからここから引き上げましようなんて事には絶対にならないよ

「……それはどうして？」

やつとばにらさんが口を挟む。珠奈が続ける。

「確かに警察だつて、捕獲員だつて、ここから離れた可能性は考  
るけど、同時にここにずっと匿われている可能性も考えるのよ？  
全部の可能性を虱潰し潰して、見つけるのよ。あなたをね  
ばにらさんは珠奈から目をそらし俯いて黙つてしまつ。

僕は反論しようとしたが、珠奈に止められてしまつた。

「ちょっと雅樹ついてきて、ばにらさんはここにいて」

珠奈は僕の手をつかんで連れていぐ。玄関から外に連れ出され、  
流石に僕は何するんだ、と言あつとした。

僕は頬を叩かれた。

パンチ、と音が鳴つた。

どうして叩かれたんだろう？

分からぬ。

「何、する……」

「何つて、雅樹、自分がどういつ状況か分かつてているの？」

「だからつて叩くことは」

僕が珠奈の顔を見ると、珠奈は泣いていた。

僕は滅多に見ない泣き顔の珠奈に口惑つてしまつ。

「下手すると、雅樹まで警察に捕まるんだよ？ それでもいいの？」

珠奈は、最低限の言葉で、僕にしか聞こえない小さな声で、僕を  
説得しようとしていた。ここで魔女に関する単語を言わなかつたの  
は、彼女なりの配慮だ。でも僕はその優しさすら、怖くて、逃げた  
くて、知られたくないで、踏みにじつてしまつのだ。

「捕まるのは嫌だけれど……、仕方がないんだ。それに彼女を見捨  
てるなんてできない」

「それは、ばにらさんが可愛いから？ 自分好みの子だから好かれ  
たいと思つてやつてているの？ あたしにはそうにしか見えないよ……

……？」

「違う。それは」

「違う。ばにらさん、あのことを彼女に言つべきなのか、あのことを言つた

ところで自分は、慰めて欲しいのだろうか。言わなければ、珠奈に誤解され続けるのだ。それは、それで、嫌だ。

……それは？」

珠奈がは次の言葉を待つてゐる。僕が話したくない理由を。

話さなきや、そう思つだけで発狂したくなるし、ここから飛び降りて死にたいと、体の中を暴れ回る。体中から脂汗が出てきた。

怖い。本当に怖い。同じことを繰り返したくない、それだけなのに。

なのは詰め正しく察してくれやしない

息苦しい、呼吸できぬ、ここに本当に酸素があるのか？ここはどこか酸素がない場所じゃないか？深海とかそんな寒く深い、僕みたいな弱い生き物では生きていけない世界ではないのか？そんなことになるつてわかっている癖に、それでも口を閉ざしたまま、駄々こねている僕は、あの時の誰かが何とかしてくれると、思っている僕と変わらないじゃないか。

# 馬鹿な僕に。

誰かが僕をそつと包み込んだ。

焦げ臭い、<sup>におい</sup>臭いを、思い出した。

『これが、罰なんだね』

頭の奥から、叫び声の様に、そつと聞こえた。

誰かを突っぱねて、もつぢうしていいかわからず、発狂し、そこから階段を転げ降りながら、逃げ出した。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

「やつとつきましたね」「や

腰まで伸びた黒い髪を揺らしながら、上にクリーム色のポンチョ、黒のキュロットパンツを着ている女の子は言った。高校生くらいの年なんか顔立ちは幼く、身長は低くも高くもなくその年相応の身長、長い前髪を後ろに流し、髪留めで止めていため、額が惜しげなく見えている。

「くそっ、なんでもうちが勧誘しにこなきやいけねーんだよ。鈴がりーだーなんだから、あいつがくりやあいい話しだろ?」

その隣でいる白地の長袖のTシャツにブーツカットジーンズの女性が愚痴を吐いた。二十代前半くらいでショートカットで白髪、背は隣の女の子より少し大きいくらいだ。

「花木さんは別件で来れないと言つてたじゃないですか。それから天下の真つ逆さま（笑）がそんなはしたないことを言わない、言わない。あくまで自称可憐な乙女（爆）なんですから」

「おい」「ハ、テ」「口。毎回毎回、止めろって忠告してんのこ、じてーねーに各個、各個閉じままで言つとはい一度胸だ。しばき倒すぞ」「テコと言われた女の子

羽背くらははふやかるのを止めずに

片言でなく返す。

「きやあー、恐いですわー」

「……道化の魔女のつむぎよりも、ふざけてる魔女が存在するつてどうこつことだ?」

真っ逆さまと言われた白髪の女性は頭を抱えた。

「わたくしなんて毎回、花木さんに着いて行つてるんですよ？ それに比べ、真っ逆さま（痛）なんて数回しかしていないじゃないですか？ それなのにたかが数回で愚痴るとは。これだから、超現代っ子はダメダメ言われるんですよ。まあ、わたくしの方が年下ですけど」

「あとでお前が鈴の」と、クソビッチつて罵つてた、つて報告しておくからな

「きやあー恐いですわー、…………名のある魔女なのに、その年でその痛々しい名前を名乗つているのが」

「張り倒す」

くららは懲りずにいけしゃあしゃあと言つ。

「まあまあ、こんなところで遊んでないで、迷える魔女を救いに行きませんと。ねえ、真つ逆さま（痴）？」

「お前が遊んでいるんだろつ！ ところで『チ』つてなんだよつ！ ？」

「発音だけじゃあ、漢字わからねえぞつ！？ まさか痴女の『痴』かつ！？」

「えーと、ここには、魔女がいーち、にー、さーん、よー人はいますね」

一人だけ盛り上がりつている真つ逆さまを無視してくららは魔女を捜す。

「完璧にスルーしやがつたな。それについての尋問は後でやるとして、四人つて多くないか？」

「どうしてなんでしょ？ わたくしたちみたいに組織でも組んでいるのでしょうか？ あー。一人目は、近くに捕獲員らしき能力者が一人いるので、追いつめられているみたいですね。今からでは遠すぎて、助けにいけない距離ですから、残念ですけど、この子は諦めましょう。それからもう一人は、えーと、この感じは…………近くに嫌々な感じの能力者を連れているので、これは政府の魔女ですね」

「うげつ、あいつらもいるのか？」

真つ逆さまは心底嫌な顔をする。

「いますね。残念ながら」

くららもはあとため息をついた。

「あいつらに会うと面倒つてレベルじゃないから、絶対に会わないようにしないと」

「わたくしも同感です。えーと、他は、もう一人の方はマンション

の中にいるみたいで。移動しているわけでもなく、能力を使って逃げているでもなく、何かを食べている様子もないのに、きっと匿われているのでしょうか。「こちらは少なくとも、わたくしたちが向かうまで安心ですね。最後の一人は、この感じは……、うーん、どうかで会つたような……」

「どこかであつた、つーことは、そいつは名のある魔女つてことか」「わたくしが知つていると言つことは、大体はそういう事なりますね……、あつ！ 思い出しましたっ！」

「誰なんだ？ そいつは？」

「強奪の魔女。名のある魔女の中で、唯一、顔と身元が不明。わかつていることはその能力だけ、といわれている魔女です。能力は、確か首切り飛蝗<sup>バッタ</sup>と同じ系統、切り裂き系の能力だったと思います。ここにやつて来るのは意外ですね」

「ふーん。そいつも勧誘するのか？」

「止めておきましょう。どう考えてもここまで一人で、やつてきたということは、模倣の魔女と同じ、一匹狼でやつていきたいタイプのようになりますし」

くららが模倣の魔女と言つた瞬間、真つ逆さまはどこか寂しそうな顔した。

「……そうだな。わざわざ魔女草<sup>ストライガ</sup>や、ほかの連中とつるまないで、一人で動いているやつは、ほとんどそんな奴だ」

ほとんどが、首切り飛蝗<sup>バッタ</sup>に首切られてブタ箱にいったけどな。と言つ。

「あとサバドも一匹いますね。場所は特定できませんが」

「それは魔女が生まれた近くには必ずつて言つていいほどいるだろ。サバドは出会つたら殺すだけ。魔女草<sup>ストライガ</sup>の第一の目的は名も無き魔女を、捕獲員に捕まる前にうちらの組織に入れる。それだけさ」

「そうですね。じゃあ心優しい人にマンションで匿われている魔女を救いに行きましょうか。真つ逆さま（愚）？」

「さすがに今のは分かつたぞ、デコ？ いつぺん付き落とすぞ？」

「きやあ、痛い中一風な名前にかけた、だだ滑りのギャクで脅さないでください」

「……ブラジルまで落ちろ」

一人の魔女は電波塔の上で、きやあきやあ騒いでいたが、その真下の道を歩いていた人々は、誰も電波塔に上に魔女がいることに気づけなかつた。

「痛いっ！ ここから落とさないで！ ああっ駄目っ！ 能力使って、本当にブラジルまで落とすのは禁止っ！」

人騒ぎしたところで、真っ逆さまはチンピラよろしく言つた。

「よし、これぐらいで許してやらあ。とにかく、その魔女が匿われているマンションつてどこだ？」

「あれですよ。ほら茶色の」

くらは指でそのマンションを指し示す。

「……米粒みたいな、あれ……か？」

「はいそうです。いやあ、真っ逆さま（老眼）でも見えるんですね？」

真っ逆さまは微笑み、そして下した。

「うん。宇宙の果てまで落ちる」

魔女草。  
ストライカ

組織の全員が名前がある魔女であり、名も無き魔女を助け、保護する、魔女に対して慈愛に満ちた集団である。

それと同時に、この国の一の防衛組織の自衛隊を壊滅一歩手前まで追いやつた魔女、花木鈴を筆頭に、この国の中でも一番厄介な戦力 持つた最強の魔女集団である。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

彼を後ろからそつと抱きしめたら、急にヒスつて私を突き飛ばし、どこかへ行つてしましました。私、間違つたことしたのかなあ。

いやあ、あんな風に泣きながら、過去のトラウマに向き合つているような姿を見せられたら、抱きしめて、大丈夫だよとか言うのが一般的にだと私は思います。

一般的では無かつたんですけどね。

すぐに彼を追おうと思いましたが、もう脱兎の勢いで行つてしまつたようで、ここから下を眺めても、彼らしき人はいませんでした。残念。

彼の逃げ出す姿から、彼が話したくないと言つたトラウマは絶対に引かれる類の物だと簡単に推測できます。確かにその手の類は絶対に聞かれたくないですよね。私だつて、ほら、……彼との、えーと、その、×××を妄想して、××××しているだなんて、口が裂けてもいえません。彼に知られたら、真っ先にここから飛び降りますね。そう思うと彼を問いつめてしまつたことに少しだけ罪悪感を感じました。

ここにずっと立つていても仕方がないので、彼の部屋にいる、ゴミ、もといい、人喰いの相手をしなければいけませんね。こんな人喰いでも、彼が好むのなら勝手に捨てたり、なぶつたり、切つたり、ミンチにしたり、ミキサーにかけたり、煮たり、あげたり、チンしたり、流したり、腐らせたり、肥料にしたりしてはいけないです。彼の部屋の中に入り、座つているゴミを見ます。一応話しかけないとこの場の空気がやばいというのか、生ゴミみたいに腐つてくるというのか この表現は的を射過ぎてているというのか、本当にどうでもいいですが、この場を取り繕つて話すとかないと、後で彼にこのゴミはなんて陰口するかわかりませんからね。

他愛もない話しから始めることにしました。なんであなたは魔女

になつちやつたの、てな感じで、みんなが魔女に訊きたがるベストテンの中で上位にランクインしてゐるものを訊いてみました。私もそれには興味があつたからなんですけど。

で、その喋る「ゴミ」は、

「わからんない…………、気がついたらなつてた」と可憐らしくほやきました。うわっ、これ絶対、オタク共に好かれるような口調だよ。何で今まで媚び売つてんの。キモツ。こんなことを内心密かに思つてゐる私は、とても嫌われそうな奴になつてますけど、誰にも聞かれる訳ではないので、気にしない、気にしない。

ここで会話が止まるとさうした匂が「ゴミ」のせいで腐つて異臭を放つてくるので、受け手に徹しながら話を聞きいていきます。

「鼓動の音がしなくなつて、さわつて確かめても、鼓動しなくて、それでわたしは恐くなつて、お父さんとお母さんに相談したら、急にバットで殴られて、何か注射されて意識がなくなつて、気づいたらが覚めたら森の中にいたの」

なんてお約束な展開でしょうか。

今時こんな話つまらねーよ。携帯小説かつての。

敢えておもしろいところをあげるなら、「ゴミ」の親が「ゴミ」を機関に引き渡さなかつたのは、自分たちがラリつてゐるのを隠すためで、「ゴミ」に薬打つて意識を混濁させてどこか遠くの森に捨てたところですとかね。

ん？ その前に魔女に薬つて効くんでしたつけ？ 確か心臓がとまつてゐるから、薬がうまく体に回らないから効かなかつたはず……。まあ、別に効こうが効くまいが、私には一切関係ないので追求はしないでおきます。

それは大変だったねと適当に終わらせ、本題に移ります。

彼のことびつ思つてゐるの、と。

唐突に訊かれて「ゴミは、生意気に狼狽えて、吐きました。

「優しい人だなって思つ」

それが耳に入った瞬間、ゴミを殺したくなりました。

何ほざいてんだ? このゴミは? 私を見ぐびるのもいい加減にしろよ。ゴミ分際で。彼は誰にでも優しいんだぞ? お前みたいな、社会の汚物、汚点を拾い上げてくれる時点で、彼を神様だと感じないゴミがいるか? そんな奴はいねえよ。

こんなゴミと話したくない。生理的頭が受け付けません。直感で思いました。ゴミが彼を優しいと感じたようにな。

私は彼がどこか行つてしまつたから探しに行くと、ゴミに言い、部屋から出でていきました。ゴミをそのまま彼の部屋に放置しておくれるのは気が引けますが、彼がそうしたいと言つていたので、施錠しておいて忠告し、私は彼の元へと走りました。

階段を下り、マンションの外に出て、彼がどこに向かつたのか探します。携帯に電話しても通じません。メールで、探しているから戻つてきてと打ち込み、送信。たぶん返信してくれないでしょう。

取りあえず、辺りを走り回つて彼を探します。でもなかなか見つかりません。街の方へといつてしまつたのかと思い、そちらにも足を運んで見たのですが見つからず、途中で捕獲員の魔の捕獲劇があつたらしく、野次馬やマスゴミ関係が集まつてきたりして街から離れるのが大変でした。

あつと言つ間にもう少しで四時になる頃になり、流石にもう部屋に戻つているよなと、彼の部屋があるマンションへ戻ろうと、住宅地を歩いている時、何故か涙が出てきました。さつきも泣いたような気がしますが、あれは演技に近いものだと言つことで、カウントしないことにしました。

なんで、彼は魔女の彼女を選んだのか。

ずっと前から近くにいた私ではなく、魔女でビックチの「ゴミ」を選んだのか、それが悔しくて悔しくてたまらなくなり、最終的にその場にうずくまり、声を出しながら泣いていました。

もういやだ。と泣き叫んでいました。それでも当たり前のよう何も変わりません。

どうしようもないこの怒りを憎しみを「ゴミ」ぶつけ、呪い殺そうとしました。そんな程度で変わってくれる、お安い世界に生まれたかつたと都合良く嘆きました。

考えれば考えるほど、私は魔女になりたいと思い願いました。

だつて彼は五年間も、一緒にいた私よりも、一瞬ちらつと見た「ゴミ」を選んだんですよ？ 彼の琴線は魔女って火を見るよりも明らかじゃないですか。なぜ彼が、魔女にここまで執着するのか、検討もつかないのですが、昔、魔女となにかしら合つたことは間違いありません。知られたくない過去が。

魔女になれば、彼は、私にも優しくしてくれる。  
誰よりも、あの「ゴミ」よりも。

でもどうすれば魔女に成れるのか、全く分かりません。  
私は魔女になりたい、とさつきの彼のように狂ったように連呼しました。

魔女になつて、彼に愛されたいと。

「あなた、なんだか可愛そうな子らしくわね？」

すると、どこからか女の人の声がしました。

座り込んでいた私は顔を上げると、田の前には、若い黒いコートを着た美しい女性が立っていました。

私は目の前に立つていて女性に、あなたは誰ですかと訊きました。するとその女性は微笑んで、

「私はサバド、って呼ばれる、この世界で迷える女の子たちを、魔女にしてあげられる、唯一の存在よ」

え？

訂正。

世界はどうしてだか、都合良べ、出来ているみたいで

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

「こなは、最近不登校になつた女の子の家のインターネットのボタンを押した。ピンポーンと当たり前に電子音が鳴る。その近くにレンズは見あたらず、別アングルで見られている可能性もあるなと考えたが、流石に鬼灯までは映らないか、と思いこむことにした。しばらくして、インターネットから女性の声がした。きっと不登校になつた女の子の母親だらう。」

「はい、どちら様でしようか？」

「私、楓さんと同じクラスで近くに住んでいるの三谷と申します。楓さんの具合を伺いに来たのと、学校で配布されたプリント類を渡しに来たのですが、楓さんはいらっしゃいますか？」

「こなは差し障りのないような口調で話す。」

「わざわざこんな時に来るなんて、先生に早く渡すように頼まれたの？」

人喰いの魔女がまだ彷徨いてるのに、一人で来るのはおかしいと思つてゐるだらう。こならとしては、昨日もプリントを渡しに寄つてくれた子がいるんだけど、いつもプリントを持ってくれる子と違うなどの矛盾が生じないか緊張してゐたのだが、それはなかつたのでほつと胸をなで下ろしながら話し続ける。

「ええ。家も近いので、プリントや宿題等をほどぼりが冷めてから渡してこと担任の先生に言われたんですが、先ほど親に見つかって、大事な進路関係のプリントもあるでしじうから早めに渡してきなさいと、どやされまして」

「こなは世間話風に答えていく。相手は話しやすいと思つたのだろうが、最初は疑つていたようだつたが、柔らかい口調になつていく。」

「それはご苦労様ねえ。楓は熱がなかなか下がらなくてね。今、自分の部屋で寝てこるので」

「ううん、不登校の我が子に会わせない為の自然な口実だろ？  
染つてしまふから、を理由にして直接会わせないために。」

それは、その我が子が人ならば、の話だが。

「へえ、自分の部屋で寝ている、と」

こなはは不敵に笑みを浮かべた。掛けたと心の中で思つ。

「え？ なに？ え？ どうしたの？」

インターフォンの向こう側では、自分が何か変なことを言つたの  
だろうか、急に雰囲気が変わつた娘の同級生に慌てふためいている  
声が聞こえる。

「つまり、楓さんは家の中にいるんですね？」

こなははとどめと言わんばかりに確認を取つた。

「つ！」

さすがに相手もこの時点で気づいたようだ。

「あ、念のためニュースでよく流れているんで、知つていると思い  
ますが、最大の特長三つは、超能力が使える、人を食べる、そして、  
心臓がないです。その他にも色々あります、代表的なのは、『

「体温がないことなんですよ？」

今、自分が話している相手が、娘の同級生ではないことを。  
そして、自分が匿つてゐる娘を狩りに来た、正義と烙印された、  
悪魔だということを。

「せんぱーい、中にもう一人、人はいますか？」

インターフォンに拾えるくらい、大きな声でこなはは鬼灯に訊いた。

陰からサーモグラフィらしき「ゴーグルつけた鬼灯」が出てきた。その家全体を見回す。

「立っている人間が一人。一人は間違いなく女性、もう一人は体のがたいからして男性だな。あと」

「等身大の人型で、動いている人形が一つ、家の中にあるな」

「逃げてっ！ 楓っ！」

インターフォンと家の中から女性の叫ぶ声がして、家の裏から誰かが走って逃げる音がする。魔女が家の裏側の勝手口から逃げていったのだろう。

「これで確定ですね」

こならがいい、後ろから鬼灯がゴーグルを外しながら、こならの隣に近付いてくる。

「これ、まだ喋れるとと思つ？」

「いけるんじゃないでしょうか？」

こならに代わり鬼灯が魔女の両親に、

「それじゃあ、あーあー、聞こえてますか？　聞こえてなくともいいです。私たちは心欠落障害調査機関の捕獲員です。あなたの娘さんは残念ながら心欠落障害になっています。匿まっている場合、速やかに娘さんの身柄をこちらに渡さないと法律で罰せられるかもしないので、ご注意ください。あと、私たちの行動を妨害したら、こつちは確実に公務執行妨害になるので気をつけてください」

そう建前を言つたところで、こならが口を挟む。

「それにしてもこんな事しなくても、普通に乗り込めばよかつたじやないですか？　わたしの能力もあてにしてくださいよ」

「一応確認しなければ駄目だろ？」

こならの能力は、近距離にいる生物の心臓の鼓動を感知できると

いう物だ。こなら曰く、壁があろうが、防音壁があろうが、何があろうが鼓動だけが音として聞こえ、心臓がない魔女の場合は一定なり続けるノイズのような音がするらしい。そのノイズが聞こえた時点では、魔女が近くにいることとわかるのだが、正確な位置までは特定出来ないため、隣家から聞こえていたとか、家の間に隠れてたなどケースだと、関係のない家に押し掛け、赤の他人まで巻き込んでしまう可能性がある。その間違いを防ぐために鬼灯は、このような鎌かけをして、魔女を炙り出し、確実に引きずり出す方法をとっている。

「それにしても、このサーモグラフィで家の中、透視できる思つてんだな。家が日光に熱せられて、壁自体の温度が上昇したら見えなくなると思うんだが。その辺の原理はさっぱりだから、どうだか知らないけど」

鬼灯はゴーグルを指にひっかけてぐるぐる回している。ちなみにこのゴーグルは、サーモグラフィなんて仰々しい機能などは一切ない。只のハッタリ用にいつも持ち歩いているものだ。

国から機関へと毎年それなりの金額の予算が下りるのだが、それらは捕獲員の部署ではなく、魔女を元の人間に戻すかの研究の為の費用、魔女収容所の維持、増築費用、魔女に襲われた被害者の遺族と魔女になった子の親族への補助金の三つに根こそぎ持つていかるため、結果、捕獲員の装備は安いものになっているのだ。歳のわりには少し高めの給料を渡すから、武器は自分たちでどうにかしろ、ということらしい。

「先輩、早く追わないと逃げられますよ？」

「筋力強化とか幻術たぐいの厄介な能力はではなさそうだから、すぐについづくさ。それにこつちには、バイクもある。あと、この人たちから、何人襲つたか聞かないとな」

そう親指で家を指した鬼灯は、こならと一緒に、魔女が匿わっていた家にいる二人から事情を聞くことにした。

それから、魔女を追つても十分間に合つだろ。



皆様のおかげでPV1,000を超えるました。本当にありがとうございました。座ります。なんか頑張れる気がしてきました（何を？）。これからもどうか温かい目で読んでやってください。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

誰もいのオーブンカフエで、魔女草の一人が会いたくないと嫌悪していた二人組、政府の魔女のふきと能力者の葛が、休日の昼下がりのよう下りて、一服していった。

「なあ、何で俺様はオーブンカフエで一服してんんだ？」

「よくよく考えてみると、今回件を片づけちゃうと後先、つまらなくなるんだよね。だからゆっくりと行こう、ってなわけ」

それよりも個人的な別件の方が気になるんだけど、そつちは首を突つ込むなつて、お父さんに言われてしとつぶやいた。

ふきは不機嫌そうにただの水を一気に飲み干す。ふきはこれでも一応魔女なので生肉と水くらいしか飲み食いでできるものが少ない。

だからケーキやコーヒー等しかない、おしゃれなカフエで時間をつぶすのは苦手なのだ。外のテラスでも禁煙らしいので、唯一の気分転換の煙草すら吸えない。その一方で、葛はアイスコーヒーを飲みながら優雅に文庫を読んでいる。これもふきを不機嫌にさせる原因因子でもあった。

「この続きが気になつて気になつて、仕方がなかつたんだよ。あ、集中して読みたいから話しかけないでね」

視線をふきに向けず、文庫を読みながら葛は言つ。ふきはあくびをして眠そうに言つた。

「そんなんに気になるんなら、移動中、車ん中で読めばよかつたじやねえか？」

「僕、乗り物に弱いんだよ。一行読むだけで気持ち悪くなつて吐きそうになるんだよね。三半規管が弱いからかな？」

「そんなんの子供だからじゃね？ ところで、あと何分くらい暇つぶすんだ？ 俺様はこの店じやあ、飲み喰うするもんがねえから、暇で暇でしようがない」

「んー、魔女が一人、捕獲員に捕まるのと、魔女草の魔女たちが勧

ストライガ

誘にここに着いてからかなあ。僕たちはその頃に、間入した方が楽しくなりそうだね。その時まで一休み、つてところかな」

「あつそ。その方が面白くなるつて、お前が言つなら俺様はなんだつていいた。じゃあ、俺様は移動する時まで寝るから、そん時になつたら起こしてくれ」

「おつけー」

ふきはポケットから iPodを取り出し、イヤフォンを両耳につっこんでふんぞり返り、瞼を閉じて寝る体制になる。

「おやすみ。ふき」

文庫から視線を離さないで葛が言った。

一人以外だれも客がいないオープンカフェにはクラシックのBG Mが流れる音と葛が文庫のページをめくる音が聞こえるだけだった。しばらくすると葛はふと、文庫から目を離し空を見上げる。昨日は雨が降っていたが今日は灰色の雲はなく、晴れ晴れとしたいい天気だつた。

「雨が降らないといいんだけどね」

葛は青い空を見上げながら、ニヤリと笑みを浮かべて、視線を文庫へと向け、読書に没頭していく。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

一方、魔女草の二人組はとこうと、

「いやー、流石ですよ。真っ逆さま（神）がこんな方法でヒッチハイクするなんて、わたくし考えもしませんでしたよ。もう感服です」「はっ、今頃うちの能力の凄さを思い知ったか」

血らの足で、魔女が置われているマンションへ向かうのは、遠すぎるため、早々にあきらめ、ヒッチハイク（？）紛いをし、どこかのマスコミのワゴンに勝手に乗り込んだのだった。この周辺でその町に向かおう車は、報道やマスコミ、警察の車くらいで、カメラや何に使うか見当もつかない機材が後ろの席に積んである。

ワゴンの運転手とその助手席に座っている魔女二人に一切気づいていなかった。

くららはまだ真っ逆さまを誉め称えていた。

「真っ逆さま（凄）は、もつとこう、すごいえげつないこともするのかと思つていましたよ。いつも走っている救急車を止めて、破水して今にも赤ちゃんを出産しそうな妊婦を引きずり下ろして

グロにはそれなりの耐久性があつた真っ逆さまでも、くららの横道に逸れたカオスワールドには引いていた。

「……本当はな、もっとカッコいい車でも奪つて行こうと思つただがな、あとで足が着くと、鈴や他のやつにも迷惑が掛かるからマスコミのワゴンにしたんだ」

真っ逆さまは胸を張りながら威張つた。本当の理由は車を運転できなかからなんだが、そこは言わないらしい。

「わたくしはてっきり、下着姿でこんな淫乱な私をここまで送つてくれたら、今晚、私を食べて呑くしてもいいよ、ハートマーク。と書かれたプラカード持ちながら、ヒッチハイクするんだと思いましよ。もちろん、真っ逆さま（処女）がつ！…

「よし、お前だけ魔法を解いて、この車の運転手やらに見えるよう

にしてあげよう

「うわ～ん。それだけは止めてくださいよ～。わたくしが代わりに、  
その役やりますから～」

「勝手にやつてろよ。つーか自分がやりたいのかよつ～」

「下着姿なら、自信がありますつ～！ 少なくとも真つ逆様（貧）よ  
りは！」

「首だけ見せないつて、手もあるな

「そっちの方がホラーなんでやーめーでーくーだーさーーーー  
くらりに肩を掴まれ、真つ逆さまはがくがくと体を揺らされてい  
る。

「……もう、やめれ……」

酔つたようだ。

「実はこの下着姿で、ヒッヂハイク作戦、必ず車が止まつてくれる  
ようになつてているんですよ？」

「世の中、それだけ腐つているつてことなんだよ」

だから男はいやなんだよ、と人類の半分を罵り始める。

「ええ、そうですよね。本当に腐つてますよ。白と黒と赤の車に乗  
つた男たちが必ずつて言つていい程、乗せてくれるんですけど、目的  
地に連れていかずに強制的におもちかえりし、個室で言葉で精神的  
に陵辱して、あまつさえ、金までせしめるんですよ？」

「ごめん。世の中意外と腐つてないわ。お前が腐つているんだわ。  
そんなことよりも、デメリットの方が大きいじゃねえか下着姿でヒ  
ッヂハイク作戦つ！」

「見事な三段突つ込みですね～。天丼にします？」

「しなくていいつ～！ 突つ込むの面倒だからつ～！」

「いや、そこは、警察署だからカツ丼だろつ～！ つて突つ込まなき  
や真つ逆さま（ウザツ）じやないですよ？」

「ついに漢字じゃなくなつたのな……」

流石の真つ逆さまは、突つ込みに疲れたのか、まじめな話題を振

る。

「今後、魔女草はどうなつていくんだろうな」

今度はぼけることなくくらりは答える。

「そんなの決まつてゐるぢやないですか。機関の捕獲員達から逃げて、魔女の一般的な人権を取り戻すために活動していくんですよ。それに花木さんや真つ逆さま、毬藻さんみたいな強力な魔女だつていますし」

「それもそつなんだが、もし、鈴がいなくなつたら、どうするんだよ？ 今の魔女草は鈴がいるから、成立してゐるわけであつて、その代わりに、うちや毬藻がやつていくことは不可能だ」

鈴がやられたら真つ先に魔女草は簡単に潰されるなど苦笑しながら言つ。

「…………」

真つ逆さまが嫌々そうに話す。

「あと、もつと不安なのは、政府の魔女みたいな政府直々の魔女が出てくることだな。今は政府と協定結んでいるに近いから安心だが、もし、独自、独断にやられたら、こちらは太刀打ちできない。うちらの組織つて何といふか、同じ猪の穴だから入る時に、お互い過去とか詐索しないだろ？ それが逆に墓穴を掘つて、自滅に繋がるんだよ。こちらが一方的に相手を信じきつてゐるからな。だから魔女のスパイとか送り込またら、うちらに勝ち目がない」

「それは花木さんに伝えたのですか？」

「そんなの、うちが入つてからすぐに伝えたさ。そしたら鈴はなんて返したかわかるか？」

にやりと笑いながらくらりに訊いた。くららは首を竦めた。

「わかりませんよ。そのよつて訊く時点でわかりつこないですものつまんねーの。鈴は、魔女に悪い人はいませんよつて返したんだくららは呆気に取られる。

「……花木さんつて、時々、頭悪そうな発言しますよね」

「いや、その後が怖かつたんだ」

「？ なんて言つたんですか？」

流石にくらりも興味を持つたらしい。真つ逆さまは勿体ぶるよう

に言つた。

「わたしが生きている間はずつと、ね？ つて「

「……え？」

「つまり、鈴が生きている間中、うちら含め、生きている人間は、絶対に逆らえない鈴の手駒だつて」とさ

くららは一拍置いて話した。

「……なんだか嫌な空気になつたような気がします」

「ああ、じめんな。こんな話して」

「つまり、今さつきまでのわたくしの思考、妄想、狂言は、花木さんに植え付けられた人格がそうさせていりことだといふことであつて、本当のわたくしではないと」

「絶対に違う。お前の性格はそれで間違ひなく合つてゐる」

真つ逆さまは、真顔で突つ込むのであつた。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

淡い水色のスウェット姿の魔女 楓は捕獲されるといつ恐怖に怯えながら、裸足で住宅地から街の方へと逃げ、狭い路地を走つて逃げていた。

先ほど家に機関の捕獲員が楓を捕まえに訪れ、裏口から出ることで間一髪逃げることに成功した。街の方に行けば、こんな時でもある程度は人目がつき捕獲員も捕まえ難いだろうと考えて、向かつてどこか隠れる場所はないか探し回つていた。

「はっ、はっ、はっ」

走つても走つても、呼吸は一定のままで、不思議と息が切れない。その事実が自分が魔女であること如実に表していた。

「何で、わたしがこんな目に遭わなくちゃいけないのよっ！」

楓は涙目になり、自棄になつたのか大声で不満を叫んでしまつた。すぐに慌て走りながら、周りに捕獲員がいないか確認する。遠くから捕獲員がバイクに乗つて追いかけてきているのか、エンジンを吹かす音が徐々に近付いて聞こえる。その悪魔から逃げるために楓はさらに走るペースをあげた。

「もう、いやだ」

楓はついに泣き出して、嗚咽しながら、休むことなく、逃げていく。

どうしてこうなつたんだろう？

放課後、遅くまで友達と寄り道していたからかな？

知らない間に、こんな心臓も体温もない体にされて、リウまで食べちゃうなんて……。

楓は路地から大きな通りへと出た。放課後、よく友達といつしょに寄り道する店がならんでいる見慣れた通りだつた。今日はテレビに映つた所に来たような、ここが現実にあるのと疑問に思つ程、遠い世界に来た様な気がした。

思っていたより人通りは少なく、いつもなら平日でも交通量が多いのだが、今日は自分のせいで閑散としていた。

「」まま走って逃げても、相手はバイクだ。すぐに追いつかれてしまう。残念なことに楓の魔女の能力は筋力強化でないので、超人のように早く走ることはできない。寧ろ、楓自身、足は一般人より遅い方で、息が切れずに走れるからと書いてそんなに早くはない。

振り切る方法は一つだけあつた。

それは魔女だからできる方法だつた。

楓の頭の中に一つだけ、その方法が浮かぶ。もう躊躇つている時間もない。

楓は覚悟を決めた。

丁度、大通りを走っている車の前に、

飛び出て、引かれた。

「」、と車に当たり、腰が先に当たつたのか、まずそこが砕ける。その次にボンネットからフロントガラスの上を滑るように体が動いていき、勢いがついて、空中に投げ出される。後はアスファルトに右肩から落下し、ゴギッ、と骨がまた砕けた音がする。楓は立ち上がりうとしたが、止まり切れなかつた後続車にまた跳ねられた。今度は真上ではなく、前に飛ばされた。骨が何本何力所、折れたかもうわからなくなつっていた。アスファルトをごろごろと体内の骨を削るように転がり、その体の中では折れた骨が凶器と化し、内部から肉を突き刺す。先に引いた車が止まつっていたので、そこに勢いよくぶつかって、止まつた。

楓の体は四肢はあり得ない方向に曲がり、体中の骨折によつてできた内出血と打撲の痕が斑状にでき、折れた骨が凶器と化して、内側から肉を貫いて出血している箇所を多くあつた。

運転手達が倒れている楓の元へと駆け寄つた。その悲惨な姿に運転手達は絶句し、訳も分からずパニック状態のまま、懐から携帯を

取り出して、救急車を呼ぼうとする。

「……………救急車はいりません」

楓は、はつきりと述べた。

二人の運転手は目の前で起こった光景に啞然とした。一台の車にはねられ、体中の骨が折れて、腕も足も首も体もおかしな方向に曲がっていた少女は、生まれ落ちた子牛のように、今、平然と立ち上がるうとしている。

楓の魔女としての能力は、吸収。

傷口に触れた相手の皮膚を溶かして、そこから結合し、結合部分から自分の細胞が相手の皮膚を喰い破つて体内に進入、体内から中身を喰い散らかして自分の体へと吸収させる。

怪我をしていないと楓は一切、相手に攻撃できないのだ。

この状態で相手に抱きつけば、そこだけりが付く。

「わたしは、魔女なんです。今、とってもお腹が空いているんです」楓は前髪を手でかき分け一人の自分を引いた運転手を睨む。片目は内出血で真っ赤に染まり、ぶつかった衝撃で鼓膜が両方破れたのか、神経が切断したのか、ちゃんと発音はできていた。睨まれた二人は腹を空かせた猛獸を前にして怯えるように、後ずさりして逃げようとしていた。この場から一刻も早く逃げなければと本能的そうさせているのか定かではないが、一步一步、楓から距離を置こうとしている。

「どちらでいいので、わたしを、車に乗せて遠くに」

そう楓が言つた瞬間、頭に細い鉄線で作られた輪が、輪投げのようにくぐつた。

「駄目ですよ。人を食べちゃ」

いつのまにか隣には自分と同じくらいの年の女の子が立っていた。

声は聞こえないため、何を言っているのか分からぬ。

「あなたは」

「そういえば、私を追つていた捕獲員のバイクの音は？」

「残念でした」

その女の子は楓の顔面に向かつてスプレーを浴びせる。

スプレーが眼に入り、焼けるような激痛に顔を押さえてしまつた。本当にやらなければいけなかつたことをすることなく。

「せんぱ～い。準備はいいですか？」

「OKだ。かつ飛ばせばいいんだろ？」

「はい、気にせずにガンガン走り抜けてください！」

楓はけたたましいエンジンをふかす振動を体で感じた。

「大丈夫ですよ？」

「へ？」

楓は聞こえていないのに何故か聞き返してしまつた。

今から自分の首を狩り取る捕獲員に。

「首が切れる瞬間、気絶するらしいんで全く痛みはないみたいですよ？」まあ、あなたは魔女なんですから、首と胴体をくつつければ生き返るんで、痛いとか死ぬとかは心配はしなくていいんですけどね」

急に細い鉄線の輪が強い力で引っ張られ、楓の首の肉に食い込んだ。肉が耐えきれなくなつた。肉を裂き、切り落とした。ここで楓の意識が、一端、なくなつた。

やつとバトルシーン！…………ええ、バトルシーン書くのが苦手ですかよ。だからいつなりました。期待していた方、本当にすみません。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

「ふう、いつちょ上がりですね」  
こならが道路の真ん中に転がっている魔女の首と持ち上げる。死んでいる状態なら能力もへつだくれもないのに、氣にも止めなかつた。頭を失つた体の方は、このまま道路のど真ん中に寝そべつてもらひのは色々と酷なので、丁度よく近くにいた魔女を引いた運転手一人に手伝つてもらい、邪魔にならないよう歩道に運んでもらつた。その間に鬼灯はバイクに括りつけていた鉄線を取つて回収し、Uターンして戻ってきた。

「意外とうまくいくもんだな」

「今度からこうしましようよ。楽にさらに怪我せずにできますから」「ああ、確かにいいかもしれない。だが」「え、なんですか？ やっぱりバランス取るの難しかつたですか？」  
「いや、…………人目に付きすぎだな」  
こならは当たりを見渡した。

野次馬の方々がこならと鬼灯を中心に囲むように集まり、携帯電話を片手に、この国では珍しいパパラッチ行為をしている。先ほど手伝つてもらつた一人はいつの間にか、車ごとどこかに行つてしまつていた。（あの車の状態で逃げたらひき逃げと間違われるのではないか？）それに、こならは片手に首を持ったまま撮られていた。かなり危ない人になつていてるに違ひない。心霊写真よりも怖そうだ。

「……これ、また報道関係から叩かれますよね？」

「これで何回目だっけか……」

一人ともこういうのには慣れているが、辛いものはやっぱり辛いらしい。帰つたら報告書、始末書等を十数枚も書かなければいけなくなるのかと、遠くを見て疲れた表情をしている鬼灯だった。

そんな憂鬱気分の真ん中にさまよう鬼灯にこならは訊いた。

「それよりも、百合子さんはまだなんですか？ 早くここから撤収

したいですが」

「大丈夫だ。今回はあいつに任せないで、もう俺が回収班に連絡しておいたから、この付近で待機してくれているはずだ」

「さすがです。先輩。それにも」

「なんだ、晒し者みたいでイヤか？」

「いいえ。百合子さんの存在意義が薄れてきたような気が……」

「……本人には絶対に言つなよ？」

本人に言つたら一人は命と同じくらい大切なものをいつぶんに失うのだろう。

数分後、人混みをかき分けるように回収班の黒いワゴンが来た。鬼灯が指示して、魔女を回収し、野次馬は、野次馬自身が呼んだ警察に散らしてもらつて、情報規制や交通整理をしてもらつた。警察の方々からもつと穩便にできないのかと、どやされた捕獲員一人だが、愛想笑いですいませんと謝つていた。

「あと、何人魔女がいるんだね」

鬼灯とこならは回収班の波多浦<sup>はたうら</sup>に訊かれた。数が多いと運ぶための車も多く手配しなければならないからだ。

鬼灯が答える。

「あと最高で五人はいると百合子が言つてましたけど、そんなにはいないと思います。それから、この魔女の母親が言うには、人は食べていないと言つてました。身内の証言なので信憑性に欠けますが」

鬼灯とこならは、今捕獲した魔女が匿わっていた自宅から逃げたあと、魔女の両親に、あなたたちの娘は、いつ魔女になったのか、人を食べたのか、食べたなら何人、どこで食べたのかを業務的に訊きだした。

魔女の両親は、この子は人ではなく、この家で飼っていたゴールデンレトリーバーのリウを殺して食べたんだと、涙を流しながら二人のこれから自分たちの娘を捕まえに行く捕獲員二人に訴えかけていた。玄関に飾られていた、リウを後ろから抱きしめている幸せそうな女の子の写真が、もの悲しく見えたのを思い返す。

タイミング良く鬼灯の携帯がなつた。誰かから電話のよつて、鬼灯は携帯を取り出して画面を確認し、百合子からかと呴き、電話に出た。

『もしもし、そつちはもう終わつた?』

「ああ、終わつたよ。新しい情報でも入つたのか?」

『そうよ。いいのか悪いのかよくわからない情報が、ね』

「勿体ぶらないでさつさと教えろよ」

『そう焦らないの。さつき警察から、被害者たちの検死の結果を教えてもらつたわ。詳しくは教えてもらえなかつたけれど、被害者全員、同じ犯人による犯行のものと断定できるそうよ。それから、さつき別の場所で被害者が三人見つかつたらしいわ。警察はそれも同じ犯人によるものと視野にいれて捜査しているつて』

「……おい、それつて」

『ここには、過去類を見ないほど、短時間に人を食べた魔女が彷徨いているつてことになるわね。あの快樂人喰いの模倣の魔女よりも、危険な魔女らしいわね。機関からは、その魔女の名前が決まつたつて、今さつき連絡が入つたわ。人食べるペースも早いし、この子も快樂殺人も入つていいんじやないのかしら?』

「その魔女の名前はなんだ?」

しびれを切らした鬼灯がその魔女の名前を訊いた。

『殺戮の魔女。全く、十代の乙女につける名前とは思えない程、皮肉で、最悪な名前ね』

はじないつ！ M a s a k i A n g o - e × × × × × (前書き)

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

僕と姉が特別になつた日。

魔女になつた姉は、最初に母、次に父を襲つて、二人とも食べた。僕は運良く襲われなかつた。姉は一人を食べ尽くして、もうお腹いっぱいだつたらしい。一人を余す事なく食べ尽くした後、満腹で理性が戻つた姉は、母と父の滌を見つけ、泣いていた。わんわんと泣いて、その自分がやつた死を悲しんでいた。

その時、僕は弱りきつた獲物を見つけた肉食獸のように、今がチャンスだと思つて行動したのだろう。

特別になれるんだと。

そして、ゆっくりと姉に手を差し伸べた。

血に染まつた弱りきつた手をとつて、僕から抱きしめた。体温もなくなつて冷たく、返り血で服は血に染まつて生臭く、姉の元の香りとはほど遠かつたけど、すごく気分が良かつたことを後悔するほど覚えている。

「……お姉ちゃんは魔女になつて、お母さんとお父さんを殺して食べちゃつたんだよ？ マサは私が怖くないの？」

かされるような声で僕に訊いて来たのを覚えている。

「お姉ちゃんはどんな姿になつても、どんなことをしても、僕の大好きなお姉ちゃんだよ。だから、泣かないでよ。」

すると姉は僕をいつものように抱きしめて、ありがとうと顔を涙と鼻水と返り血で汚しながら、吐露し始めたの覚えている。

僕は覚えてる。

その時、自分がもう歯止めが利かない程、狂つていたことを。姉の好意を独占しきつて、満足していたことを。

それ以上を求めてしまったことも。

それからすぐに姉もおかしくなっていた。

当時の僕でも分かるくらいに、僕と話す時の口調が変わっていたからだ。それは姉弟愛というものではないものだと、直感で気づいた。

きっとそれは吊り橋効果みたいなもので、好意も愛もすべて違うもので、ただその違うものを正しい、汚れていないものだと言いたかったのだ。そう思いたかった。そう思わなければ、辛くて耐えられなかつた。

その想う姉の心を。唯一残つた姉の心を、

僕は僕の快樂の為に、永遠に味が無くならない、チューインガムのように、何度も咀嚼し食べ尽くそうとした。

その夜、僕と姉は、両親が死んだって言つのに、馬鹿みたいに、それこそ猿みた的に、溺れた。

その時の僕と姉なら、それを『愛』とでも呼ぶのかな？

どう考へても、偽りも無く、近親相姦といつも倫理に悖る行為で、ただ快樂に溺れたかっただけじゃんか。

と今の僕は、スパッと素つ氣なく言い放ち、それこそどつかの条例を定めた人たちよろしく、頭ごなしに嫌悪するけどね。

うたかたつ！ Kazur a An go - e (前書き)

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

## うたかたつ！ Kazura Angle

うたかたつ！

所詮、人生なんて泡みたいに弾けて消えるものなのさ。  
そう思えれば楽になれる気がするんだけど、案外うまくいかない  
ものなんだよね。当たり前のように息詰まって、苦しんで、絶望す

る。僕はそれでいいと思うよ。そうしないと人は前に進もうとしな  
いからね。

まあ、そんなんじゃない、もつと人生とは薔薇色で、美しいもの  
なんだと思っていてもかまわないよ。

どうせ、美しく、素敵な物に例えたって、必ず最後は、泡のよう  
に弾けて消えて無くなるんだから、精一杯、限りある自分の人生を  
自由に愛撫すればいいさ。  
それが間違いだとしてもね。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

田の前に立つている女性は確かにそうになりました。

私を魔女にしてくれると。

マジでっー？ こんなに簡単に成れるものなのー…？

「のとさ私はテンパつていました。無理もありませんね。

いやいやいやいやいやいやいやいや。

そんな悪徳商法に引っかかるほど私は馬鹿じゃない……のかな？  
自信がありません。はい。

「」をどう考えてこの人が魔女にしてくれる分けないじやなですか。物は試しだ、やってみてだなんで死んでも言えませんよ。ていうか、心臓えぐり出す時点で試しも何も一回しかできないっての。そもそも何を根拠に信じればいいんですか？ というとあれですか。いやつ、できるつ！ みたいな極めた眼力をもたないといけないのですか？ それくらい出来れば、魔女になろうだなんて思いませんつて。

というわけで、一重にお断りしようとしたんですが、その女性はわざわざいました。

「あなた、私を疑っているわね？」

そりや当たり前です。誰だつてこんな怪しそうな人にあつたら疑うにきまっています。免疫ある人でも疑いますつて。

あと学校でも、どこの女子生徒が魔女にしてあげるから着いて

「い、とフツーのおっさんに言われ、ほいほい着いていって卑猥なこと（具体的に言つと奪處女）された事件があつたから、帰りは女子は一人で帰るなよつて、先生に言われたもんねつ。まさか、こんなきれいな女人に卑猥な、いや、百合百合なことされるとは……。訂正、私は馬鹿です。

「証拠を見せることは出来ないんだけど、信じてくれないかしら？」

だから無理だつて言つてゐるじゃないですか。証拠見せたつて、もし、嘘だつた場合、私は心臓を抉り取られて絶命するんですよ？ 違う方法で、たとえばそこら辺の犬とかで魔女になれる証拠を見られたとしてもすぐ成りたつて思わないですし、そんな理不尽に近い取引を迫られたら、アニメ、マンガなどのヒロイン（ここは絶対に譲らない）だつて、三話くらい消費して成らうか成るまいが、その葛藤を描くじゃないですか？ 最近はワンクール、十一～三話くらいしかないから、一話、一十四分で成っちゃう子がいるみたいですけど、ここはあくまで現実なんですよ？ あなたみたいな現実と非現実が区別できない人がいるから、どんどんとマンガやアニメは規制されていくんですよ？ それに（「）

「やつぱり、直接、証拠を見せた方が信じてくれるわよね？」

えつ？

その女性は私にいつの間に近づき、私の胸に手を突っ込んでいました。

上に着ていた服、肌着、ブラと全て貫き、

（あまりの早さに妄想。どうでもいいので省略）

さら胸の肉を貫き、あばら骨を掴み、

(あまりの痛さに絶叫。つるそこので省略)

あばら骨は進入してきただ手によつて簡単に切断されて、切り取られた皮膚や骨はポイ捨てられて、

(あまりの痛さに失禁。汚いので省略)

たどり着いた先の心臓を親指、人差し指、中指、薬指、小指、すべてを使って撫で回し、

(あまりの激痛に失神。無言なので省略)

すべての動脈、静脈を指で丁寧に切り取り、体の中からズルッと引きずり出しました。

あ、あああ。あ？

気づいたときには、その女性の手に握られた握り拳くらいの私の心臓があり、まだ元気に動いて心臓内に残されている血液をピュツ、ピュツ、と吹き出しています。

「これあなたは立派な魔女よ」

そういうと女性は私の顔に向かつて微笑みかけて、私の心臓を持つて、くるりと向きを百八十度変えて進み、曲がり角を右に曲がつて、とうとう見えなくなりました。

え？ 私、もう、魔女になつたの？

心臓が取り出された胸の穴からは、溢れんばかりの血がぐくぐくと出て　　いません。それに痛みは、さつきよりは痛くなく引いているような気がしますが、やっぱり痛いです。

でも、死んでません。

というより、死にません。

心臓を取つても、数分は頭の中に酸素があるから意識があるつてきいたような気がしますけど、これは数分どころではありません。貧血も起こす気配もなく、意識はしつかりとしています。全く死ぬ気配がないことが逆におそろしくらいです。

おそるおそる、飛び跳ねてみました。死にません。

おそるおそる、そこら辺を走つてみました。死にません。

おそるおそる、抉りだした所を触つてみました。神経はあるみたいで激痛に悶え苦しみましたが、死にません。

死にません。

これは、魔女になつたつてこと？

私はあの「ゴミ」が言つていた通り、呆気なく、素つ気なく、突然に魔女になりました。

ふふふふふふふふふふ……。

不思議と笑みがこぼれます。

ずっと体中を舐め回していた恐怖の次にやつてきたのは、歡喜、喜びでした。

これであの「ゴミ」と同じ立場に立てる。寧ろ、私の方がつき合はは長いから有利だ。

いやいや、私も魔女になつたんだから、もつと確實に、

アノゴミ、ブツコロシテ、ハラワタヒキズリダシテ、タベチャエ  
バイイジヤンツ

私は不気味にニヤニヤと笑みを浮かべ、愛しの彼の捜索を再開するにしました。

彼にあつたらこう告白するのです。

こんな体になるまで氣づかなかつたなんて、雅樹のばか。でもね。

責任とつてくれたら許してあげる。

決めゼリフはこれ決まりですね。きっと彼も私に落ちてくれます。メロメロです。

まず私は、着替えるために、一端、家に帰りました。着ている服がぽつかりと穴が開き、血液が付着していきますからね。それに……あまりの痛さに、ごにょごにょしてしまいましたし……。それが終わつてから、彼を捜索を始めるとしましょう。

なんせ私は魔女なんですから。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

「ここから辺か

「ここから辺ですね」

鬼灯とこならは、この周辺で魔女を匿つている人がいる、という匿名のたれ込みあつたと警察の方々にいわれ、その付近の住宅地にたつた今ついたところだつた。

「いやついているバカップルを見た人が、腹いせで通報したつてオチじゃないですね？」

「あー、あり得るかも」

なんせ、匿名で警察に通報した方は、魔女を匿つている家の住所を教えず、ここら辺にいますとアバウトにしかいわなかつたらしい。信憑性に欠け、どう考へても迷惑な嫌がらせだらうと鬼灯と思つたが、殺戮の魔女がどこに潜伏しているのかの手がかりは、今の所一つもないため、藁をもすがる、というよりは風漬しに警察に寄せられた魔女の目撃情報、たれ込みを片つ端からつぶしていく方針になつたのだった。

寄せられた情報を全部確認するのは、警察の人たちでも大変時間のかかる作業であり、殺戮の魔女捕獲にかかる手間と、甚大な被害が被る可能性が出てきたため、百合子が応援として、榊さかきといぢりなどの捕獲員を呼んだと言つた。明日にはこちらの着くらしい。

鬼灯はバイクを止め、どこから探していくかと警察の方から借りた地図を取り出そうとした時、何故か、こならがバイクから降りた。鬼灯は、どうしたと言つた。

「ここは一手に分かれましょう。マンションとかはわたし一人で回つた方が手つとり早いですし」

「だが、俺一人だと家の中に居る魔女を発見できないんだぞ？ だから一人で回つてゐるのに」

具体的な魔女の手がかりがないため、こならの家の中にいる魔女

や人、生きているものなら、なんでも区別できる能力が、ぱつと見では分からぬ魔女の搜索には必要となる。ここで二手に分かれてしまふと搜索の能力を一切もたない鬼灯は魔女を見つけることが困難になる。

「だから機関にサーモグラフィのゴーグル買つてもらえればよかつたじゃないですか」

「あのなあ、あれ、結構高いんだぞ？ それになかなか捕獲員の方に予算が下りないつて東城さんが愚痴つてたじゃないか」

それならバイクなんて買わずにそつち買えればよかつたんじやないですかと、こならは思つたが、バイクを購入すると、鬼灯は高速乗ればいいやと125ccを少し上回るくらいのバイクを買おうとしていたのをついて来たこならが、わたしはこの大型バイク乗つてみたいです！ それにしてください！（自分で乗る気はさらさらない）と、大型バイクを催促して、意外とそういう押しに弱い鬼灯は、現在に至る結果となつたの思い出した。これは自分にも非があるので言わないので置く。

「それに今回の魔女は沢山、人を食べているんですよ？ そんなことを匿わねながら、できるわけがないじゃないですか？」

匿わっている魔女の大体は身内によつて、外に一歩も出られないようされ、これ以上人を襲わないように匿われている事が多い。そのためなのか、長い間気づかれてても被害者の数は全く出なくななる。だが今回は短期間に八人も襲つている。おそらく、この殺戮の魔女は匿わておらず、一人でさまよつているために短期間で多くの人を襲つた可能性が高い。つまり、隠れずに歩いているのではないだろうかとこならは思つたのだ。

「そうだな 別の可能性もあるがそつちはできれば考えたくないな

こならもこれには頷いた。別の可能性とは、匿つている人が魔女を餌を食べるときだけ、外に放しているという可能性だ。狂つているとしか思えないが、この世の中、そういうことをする輩も少なか

らずいる。

「時間がないので、二手に分かれた方がいいと思いますよ?」

「こならが提案すると鬼灯は渋々、了承する。

「そうするか……。だが、危険なことはするなよ。魔女を見つけたら一人で捕まえようとは思わずすぐに俺に連絡しろ。なんせ今回の魔女は分かつてているだけで八人食った奴なんだから」

こならはヘルメットを外し、鬼灯に渡しながら言つ。

「先輩のバイクがなければ、わたし一人の力で、魔女の首を切り落とすことなんてできるわけないじゃないですか?」

「どこをどう見たってわたし一人で魔女を捕獲する程の力なんてないですよと自虐的に言つた。

「それもそうか。でも見つけたり、出会つたりしたら、すぐに逃げて、俺に連絡しろよ」

「はい。わたしはバイクじゃあ、絶対に通れない、あっちのマンションの方を探してきますから、先輩は一軒家が密集している方をお願いしますね」

「了解」

そういい鬼灯はバイクを走らせ住宅地に向かつていった。一人ぼつんねんとこならがその場に取り残される。

「そういう、わたしに怪我させない為に、一人で魔女を狩ろうとする先輩の優しいところが、大好きですよ」

こならは一端背伸びして、気持ちを入れ替え、マンションの方へとスキップしながら向かう。

「まあ、わたしも同じような事を考えていたりするんですけどね」

「ある程度歩いた所でこならは、ふと思つた。

「イチャついていたバカッフルつて……、わたしと先輩の事なんじや……、きやつ」

こならは一人、幸せな妄想に耽りながら、魔女を探しに行つた。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

ばには一人、助けてもらつた恩人の雅樹の一室でぺたりとフローリングの床に直に座り込んで、雅樹の帰りを待つていた。

雅樹さんの恋人（？）なのだろうか、珠奈さんが雅樹さんをつれて、外に出たと思いきや珠奈さんだけ戻ってきて、不機嫌な顔をしてわたしの経緯を色々と訊いて、わたしの受け答えの何かが気に喰わなかつたのか、急に雅樹さんを探してくるつと言つてどつか行つちゃつたし。

ばには珠奈に言われたとおり、玄関の鍵を閉めて、元の部屋に戻つたあと、いつまでも借りた服でいるのは気が引けるので、買つてきた服、灰色のパークーとジーンズに着替えた。あとはする事もないでぼーと座り込んでいたのだった。

「…………この後、わたしどうなるんだろう」

ばには呟いた。

いつまでここで隠れて入れるだらうか。そのタイムリミットは明日かもしれないし、明後日かもしれない。もしかしたら永遠に来ないかもしれない。そんな淡くすぐにでも消えてしまうドライアイスの煙みたいな夢、泡沢の願いは、ばにらの心の周りをもやもやと紫煙のようになんでいる。

そもそも何で捕まるのが嫌なのか、ばにら自身も分からない。マンガやアニメ、色々なサブカルチャーの影響、それから得た似非知識で、捕まつたら非道な人体実験され、薬漬けにされたり、体を生きたまま解剖されたり、はたまでは裸にされて辱めを受けさせられるかもと妄想して怯えているのだろうか。実際は魔女がほかの人々を襲わないように、個室で管理され、魔女を一般人に戻すために日夜研究が行われているはずで、そんなマツドな実験は行われていないと言われている。そもそもそこまでしたら、世間にバレたときのバッシングが国際問題にまで発展するため、そこまで危険を犯して

までやる研究者はまずいなし、いたとしても一人では到底無理だ。それに捕まつても受刑者みたいに、厳しい規則に縛られた生活を余儀なくされるわけでもない。動物園のライオンやトラなどの肉食獣が檻に入れられても、ストレスの少ない快適な生活ができるように、魔女が人を襲わないよう管理される以外は、捕まつた魔女たちは、多くことは自由に行動してもいいということになつてゐる、と政府が国民から集めた税金を使って作ったパンフレットに書いてあつた気がする。関係ないし、かさばるから一回流し読みしてから、即資源回収に出しちやつたから詳しいことは分からぬ。まさか、自分がなるとは思つてなかつたし。

捕まつても悪いことはされない。むしろ、人を襲わないよう管理してくれるならそちらの方がいいんぢやないかと時折、思つてしまつたりもする。

でも、どうしてだか捕まりたくないのだ。

確かに捕まれば両親、友達、恋人、その他諸々に会えなくなる。という訳ではないが、面会は全てモニター越しで行われ、時間制限すらあり、もちろん触れることすら許されない。それは面会しているとき魔女がお腹を空かせて理性を失い暴れても、面会人の安全を確保するためで、仕方がない事なのかもしれないが、これじやあ刑事ドラマとかでよくある犯罪者と面会するみたいで、何か嫌だなつて思つたりする。

それに魔女か人間に戻す研究が行われてゐるからといって、元に戻るとは限らない。魔女の寿命はまだ分からぬが、下手したら死ぬまで一生、もしかしたら魔女は寿命では死なず、永遠に人間に戻れない可能性だつて否めない。その場合、政府に捕まつた魔女は魔女収容所で一生を終えるに等しいことになる。魔女収容所の中である程度、自由が認められていても、やつぱり大切な人と直にふれあうことができないのは辛い。それなら魔女に治る方法が見つかるまで自由に人と同じように生きていきたいと考えたくもなるだろう。まあ、わたしはどっちでも構わないのだが。だつて親に捨てられちゃ

つたし。

なんで魔女になっちゃったのかなあ。

ばにらは自分の胸に手を当てた。何回やつてもどくどくと当たり前になるはずの鼓動を感じられないし。体温もなく死んでいりよう冷たい。

「はあ、やつぱり、わたしは魔女なんだよね」

じつ匿われているとなぜだか分からないが、また魔女になる前に田々、人に戻つたような気がする。

なんて大げさなんだろうと思うが、心臓がないこと、体温がないこと、人を食べてしまつたことが、今まで平々凡々だつた現実を、自分にとつてのフィクションのように曖昧で現実味のない物に変化し、遠く手を伸ばしても届かないような何万光年離れた場所にある、綺麗だなーと感嘆を漏らしていたフィクションが今、現実となつている。

わたしは、現実ではなく非現実<sup>フィクション</sup><sub>リアル</sub>に、憧れているのだろうか。

ピンポーン。

「はいっ！？」

ばにらは急になつた玄関のチャイムに驚き、声を挙げてしまつた。玄関から宅配の男性がこれまた大きな声で話しかけてた。

「遠藤さん～。宅配便でーす」

ばにらはしまつたと狼狽えた。何で返事しちやつたんだろう。居留守使えばよかつたのに。とさらに慌てふためく。

ばにらは取りあえず荷物を受け取る事にしよう。もう返事しちやつたから居留守なんてできないし、印鑑はどこにあるか分からぬけど、確かサインだけでもよかつたはずだと軽い気持ちで、玄関へと向かい、鍵を開けて戸を開いた。

「はい……」

だが、外には誰も立つていなかつた。

「いやー、じゅうも簡単に開けられちゃうとやつがいないですね」突然、毛配の男性の声ではなく、高校生くらい女の子の声がした。

「……え？」

次の瞬間、戸のわずかな隙間から、部屋の中に缶の何からルンと書かれた赤い缶が三つ投げ込まれた。

「つー？」

ばにらは危険を感じ、とつさに戸を締め、鍵までして、姿形も見知らない敵の進入を防いだ。

「あーあ。そんな密閉した部屋の中には田にいたら、バサンの煙で喉とか田とかやられちゃいますよ？」

「えつ」

バルサを部屋の中に投げ込んだ女の子が忠告した。投げ込まれた三つのルサンから、勢いよく吐き出される殺虫成分の煙が、徐々に部屋の中に充満していく。ばにらは煙を吸い込まないよう息を止めて、殺虫剤が含まれた煙は田にしみるので目眩ぶつた。魔女は呼吸をしなくても生きていられる。ここはやり過ごせるのではないかとばにらは思った。

「いやー、すごいですね。人間がバサンの煙の中でじつとして入れるなんて。魔女ならずつと息を止めても大丈夫ですけどね」

このままこの煙の中に居続けたら魔女と思われてしまうつ！！

ばにらは田を開いて、戸の鍵を開き、四つん這いになりながら外に飛び出た。部屋の方を見ると、扉の間から火事みたいに白い煙が出てきていた。

「じゅうのつて簡単に引つかかるものなんですね。トイレやお風呂場の密閉した空間に逃げれば、別に部屋の中にずっと入れてもおかしいわけではないんですけど。やつぱり、焦つていいからどうか？」

ばにらが顔を上げると、そこには自分と同じくらい年の女の子が鉄線で作った輪を持つている。その輪にはこれまた鉄線が一本、首

輪にリードをつけるように結んである。

「えい！」

訳も分からずばにらの首に鉄線の輪がぐぐされた。

「えつ？ 何？ これ？」

「この階までブロックを持つてくるの大変だったんですよ？」

独り言のように女の子は呟き、マンションから、この町が一望できるほど開けた部屋の前の通りの落下防止の手すりの上に置いてある、なんの筈もないコンクリで出来た穴があいたお馴染みのブロックの所まで移動した。そのブロックには鉄線が結ばれてあり、その鉄線をたどると、途中、円上に束ねたあと、ばにらの首の輪につながっていた。

「えつ！？」

このあと自分が何されるのか理解できた。

「このくらいなら切れますよね？ 失敗しても首の骨が折れて意識が飛ぶこと間違いないですし、どちらにせよ任務完了です」

その女の子はつらつら話し、落とす場所に人がいないかを確認して、

「下には誰もいりません？」

「止め」

躊躇わず、押して、ブロックを落とした。

「さよなら。殺戮の魔女さん」  
女の子は笑顔で見送った。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

「戻らなきや」

さつきまで僕は、ばにらさんを部屋に残したまま、珠奈に外につけられて、自分の部屋の前でばにらさんを匿うか言い合つていたような気がするのだが、自分がいつの間にか逃げ出して、住宅地の中を見えないものから逃げるために、そこら中を走り回つていたらしい。珠奈と言い合つている内にトラウマの起爆スイッチに触れたのだろう。

僕はあたりを見渡して、自分の現在地の位置を確認する。自分の経やがるマンションから遠くの、ここ数年で新しく出来た住宅地を僕は走り回つていたらしい。見える範囲では主に一軒家の家と空き地がちらほらあるくらいで、閑静な住宅街と表現されて売られてそうだと感じるくらいの静かな場所だった。ここら辺は偶に散歩するときに通るくらいで、あまり来ることがないため、大雑把にしか道が分からぬ。

取りあえず、歩こう。そうすれば、いつか分かる大きな通りにでるさ。そう思つて僕は歩きだした。

そういうばにらさんを匿うといって、珠奈があんなに怒る

僕が魔女　　ばにらさんを匿うといって、珠奈があんなに怒るとは思いもしなかった。見ず知らずの女の子を部屋の中に入れて、しかも自分の服を貸すなんて、どう考へても下心があると珠奈に勘違いされてもおかしくない。それに理由も語らないで察してくれだなんて、僕が珠奈の立場だったとしても、首を縊に振らないだろう。ちゃんと匿う理由を話せば納得してくれたに違ひないが、僕は話せなかつた。

「全部、僕が優柔不斷なだけか……」

深淵よりも深く溜息を吐きたい気分だつた。すべて自分が弱いせい。一字一句間違ひがなく、そこも嘘も見栄もない。自分のトラウ

マ、過去、その全てを知られるのが怖いからだ。

そりやファイクションの物語の主人公が、両親が死んだの隠すような、いくらでも美談にできるものだつたら、誰かに知られても絶対に嫌われることもなく、寧ろ、優しく触れないでくれる。デメリットに働かないの方が多いじゃないか。

だが僕の場合は違う。そう格好つけて言うけれど、これと言つても特別なケースではない。僕と同じ立場の人には絶対に言えない立場の人なら、居ないよう、案外沢山いる。その人たちが同じ様に誰かに話したとしても、同情の欠片すらもらえない。避難され、罵倒され、陵辱され、晒されて、一生、べつたりとレッテルを張られたまま、生きることになる。だから話すのが怖い。失いたくない。

話したところで何になるって言うんだ？ 話し相手になつてくれると言つた百合子さんは、僕が犯したことの少なくとも三割くらいは、知つてはいるはずだ。けれど、こちらとしてはたかが三割程度で、僕が犯した業を知つた気になつては困る。得意げに年上の優しいお姉さんぶられても、僕が腹割つて話したところで、この話題に相手が合わせられるわけがないのだ。理解できるなら、その人も、僕と同じ腐つた人間になることを暗示しているようなものだ。

……まあ、やってみないと分からぬから、頭ごなしに否定できないけど。

でもやつぱり嫌だ。考えているだけで羞恥心で死にそうになつてトラウマがまたぶり返し発狂したくなる。

やつぱり無理だつて、

大好きな姉とセックスがしたくて、ザバトに姉を襲つてと頼んで、姉を魔女にし、姉が両親を無意識に殺して食べてしまい、心身共に弱つてゐるときに、優しく励まして、その晩に姉が体を許した時に、近親相姦しましたなんて、口が裂けてもいえるわけがない。もちろん、珠奈やばにらさんにも。

ほら、引いたでしょ？

全然、憂う気持ちもないでしょ？

何であんな事したんだろうかと思って、悔やんで、反省し、改心したとしても、もう一度としないと、心の底から謝罪し続けたとしても、許されるわけがないのだ。

体の片隅にきつちりと刻み込まれて、無かつた事にはされずに背負つて生きなければならぬ。苦しみながら生きることが罰になるのだ。

そういう類の話を人に話し、あなたは辛い人生を送ってきたんだね、なんて親身に言つてくれるのは弁護士と同類くらいしかいないだろ？

だから話せない。話せ話せとしつこく言われ、渋々、信頼して話したところで、事情をすべて聴いた後に、ポイッと手のひらを返され、避難する側に行くのだ。

それならまだ知らずに、お節介焼いてくれる方が何百倍もいい。自分の中の良心が許すならの話なのだが、これもこれで騙しているという罪悪感に潰されてしまいそうになる。

嫌になってきた。

お願ひだから嫌わないでください。僕がばにらさんを救うのは、僕が犯した、償うことができない罪を、できなくても償うものであつて、くだらない下心は一切ない。そんな下心があるなら……、こんなことは考えたくないが、一番近くに居てくれた珠奈としたいと思う。それにばにらさんに好かれたいなんてこれっぽっちも思つてない。だって、すでに僕は十分に好かれている。

……焦れつたくするのは止めよう。淡泊に言えぱいい。

僕は珠奈が好きだ。

姉より。もむりと、ばにうさん、田舎者さんよりも。

誰よりも。

だけど珠奈が僕が姉と近親相姦したって知つたら、当たり前のようには僕を嫌うだろう。

部屋に呼べるくらい仲良くなつたのに、それに珠奈だって僕のことが……。

それを崩してしまつのが怖かった。告白してフラれるよりも、ずっとずっと怖かった。少なくとも、告白してフラれたとしても、ぎこちなくではあるが、明るい性格の彼女なら、会話くらいはしてくれるだろうし、何より僕は彼女を見ているだけで、僕は元気になれる。それに彼女が僕を嫌つているなら、仕方がないと割り切れる。

だが、もし僕の過去を知られてしまつたら、汚らしい汚物を見る目で見られて、話すらしてもらえないだろう。そんな事が起こつてしまつたら、僕は簡単に自殺するだろうな。ボタン一つで簡単に出来る、みたいに。

でも、もし、例えば、僕が過去を話しても、文句もいわずに嫌悪もせずに珠奈が受け入れてくれるなら。

辛かつたよね。でももう耐えなくてもいいんだよ。あたしがそばにいてあげるからなんて言つてくれたら。

僕は絶対に珠奈の優しさ、愛情、いや全てに溺れてしまうだろう。姉の時よりも酷く、何も考えられなくなつて、溺れているのに、もがくことすら忘れて、どんどんと。

「つて、僕は何考えているんだろう」「うう

珠奈と恋人になりたい、珠奈にすべてを慰めてもらいたいという、甘えは何百回も夢想したことじやないか。本当にそういう性的欲求は尽きないから困るなと自己嫌悪した。

僕が彼女に求めているのはそんなんじやない。ただ明く、楽しく、笑つていていい。それだけでいい。普通に愛し愛されたいだけなのだ。僕はどこまで歩いたのか、確かめてようとあたりを見渡した。だが、周りの景色、家の柄、名字の札すら変わつてない。つまり……。

「一步進んで、思慮に耽つた……つてことか……はあ

誰か僕を馬鹿じやねえのと罵つてくれたら、少しくらいは改心すると思うんだが。さつきから自己嫌悪しまくりだな。

後ろからバイクが僕の方へ向かつてくる音が聞こえた。僕は道路のど真ん中に突つ立つていて、流石に機動性優れたバイクでも通行の邪魔になるので、右の路肩へと小走りで避けた。

ところが近づいて来たバイクは僕の左隣に止まつた。

「そこの人。ちょっと道、聞いてもいいか？」

バイクの運転手の男性は僕に道を訊いた。少し低い声とエンジン音が同時に聞こえた。僕はうなだれかけた体を声が聞こえた方に向かせる。運転手は二十代くらいの男性だつた。敬語で答える。

「はい、いいですよ。なんですか？」

「「の先は大通りに出るのか？」

「の人は、どうやら道に迷っているらしい。

「たぶん出ると思いますよ。今、僕も道に迷っていて、とりあえず大通りを目指そうとしていたところなんで」

「まあ、俺は大通りに出るわけではないから、出ても出なくともどちらでもいいんだ。ただ行き止まりだけは、面倒だから訊いたんだよ

」

「あ…………」

だつたら訊くなよと言いたくなる。バイクなんだから、行き止まりでもリターンしてくればいいだろ?に。燃料代が無駄になるのかと自分の中で結論づけた。

「そうやっぱ、もう一つ訊くの忘れてた」

…………あれ?

前にこうこう風に鎌掛けられた記憶があるぞ? しかも今日の記憶だ。何このデジヤビュ?

というかあの政府機関は、魔女を匿っていると思われる奴を見つけ時は、そいつに鎌かけろと教育しているのか? この調子なら二度目もありそうだ。気が滅入つてくる。

僕は勇気を振り絞つて、ではなく、投げやりに訊いた。

「もしかして、あなたも捕獲員ですか?」

一瞬、空気が凍つたような気がした。これは地雷踏んじやつたかなと思つて内心ビクビクしていた。

ある程度経ち、バイクの運転手は僕におそるおそる訊いた。

「…………もしかして、百合子にあつたのか?」

「ええ。同じ様に話しかけてきましたよ」

ビンゴですね。

あと、バイクに乗つていてる捕獲員の男性が、まさか、知らずに百合子と同じ手を使つてしまふなんて…………、と呴きながら、がっくりとうなだれ、自己嫌悪しているんですけど、慰めた方がいいのかな…………?

僕は狼狽えながらも捕獲員の男性に、鎌かけが一番効果的な方法ですってと、根も葉もないフォローをし、慰めてあげた。本当は僕が慰められたいのになーと溜息でそうになつた。

誤字脱字などあつまつたら指摘お願いします。

「俺の名前は六乃鬼灯、今年で二十一歳だ」

「僕は遠藤雅樹です。十七歳で一般的な高校生です」

自己嫌悪していた鬼灯さんが復活したので、気を取り直してお互い簡潔な自己紹介をした。

「そうか年下か。なら気兼ねなくきけるな」

いや、聞けないことなんて沢山ありますよ？ 例えば「ごめんなさい」。言いたくありません。察してください。

鬼灯さんは路肩にバイクを通行の邪魔にならないように止め、完全に話し込む気でいる。僕としてはこの捕獲員から一刻も早く逃げたいのにと泣きそうになっていた。だつてこの人、僕のことを疑つてているに決まっているじゃないか。

「この辺に魔女がいるって、たれ込みがあつたんだけど、そのような奴、知つてたり、見かけたりしてないか？」

「うーん、そんな女の人は、知りも見もしなかつたです」「声が裏返ることなく、自然に発することができたので、ひとまず、セーフ。

「急に知らないかと訊かれても困るよな。まず一目で魔女だつてわかりっこねえし」

「じゃあ訊かないでください」

堪え切れずに、突つ込んじゃつたよ。

「一応だよ。一応。形式上つてもんがあるんだよ」

本当にあるの？ それ？

僕がどこか胡散臭そุดなど、訝しげに鬼灯さんを睨んでいたら、鬼灯さんは訊いてきた。

「なあ、お前は魔女についてどう思つ？」

「それはどういうことですか？」

「ああ、そうだな、特に深くは考えなくていいぞ。どう答えてもい

い、殺したい程憎んでるって言つたとしても、愛したいくらい助けたいと言つとしても、俺はお前が魔女を匿つてているんじゃないとか、そんな無粋な推測つていうか、妄想と言つた方がいいか？まあ、ただ魔女について、どんな風に他の連中はどう思つているのか、個人的に訊きたいだけだ。ほら、学校の授業改善アンケートみたいなもんと思つてくれ。成績には関係ありませんから、好き勝手感じたこと書いてくださいってヤツみたいに」

「あれつて、成績に関係ないアンケートつて、謳つている癖に名前を記入しなければいけなくて、先生の目を気にして好き勝手書けずに、無難なことしか書けなくなる縛りがあるから、アンケートとして成り立つてないと思いますよ。無記名でも筆跡でばれるし」

「そういう事じゃなくてな、俺が質問しているのは、答えたくないなら答えないでいいという、選択肢もあるんだつてことを言いたかつたんだが、例え間違えたか。俺としては無難に嘘を返されても、こちらの為にならんし。そもそも、答えたくない、も十分な答えだからな」

「……」

「うわ何キザつぽいこと言つちやつてんの、とは思わなかつたことにして、僕はゆっくりと答えた。

「魔女について、ですか。僕は魔女は可哀想な存在だと思います」

「ほう」

「魔女はなりたくてなつた訳じやないのに、知らぬ間に魔女になつてしまつて、両親とか兄弟姉妹とか、身近な大切な人を知らない間に、殺して食べちゃつて、自分の意志で悪いことしてなんて一切してないのに、犯罪者のように捕獲員に追われてたりするし、世間からも冷たい目で見られる。そう考えるだけでも、十分、可哀想だと僕は思つ」

「確かにそうかもしれないな。それからもう一つ訊いていいか？もし、目の前に魔女がいたら、匿うか？ それとも、捕獲員や政府、国に突き出すか？」

鬼灯さんがいきなり直接的な事を訊いてきて、僕は少し悩みながらはつきりと答えた。

「僕は……たぶん匿つと思ひます。理由は……言えませんが」

「そうか。てつきりエロいことしたいからとか言つと思つたんだが」「てめえ、人が眞面目に答えてるのにボケるとは、流石にはつ倒すぞ、とか微塵にも思わなかつたことにした。表情は流石にひきつたが。

鬼灯さんは、楽しそうに笑みを浮かべ、ヘルメット被りバイクに跨つた。どうやら、僕との会話を打ち切つて魔女を捜しに行くらしい。

「答えてくれてありがとうな。ちなみに俺は、魔女は職業がてら居なくなつて欲しくない。最後のは、魔女になつたヤツが大切な人だつたら匿う。だな」

「うわー。なんて自己中心的な回答」

魔女云々の問題じやないじやん。しかも一個目は答えられているのか怪しいし。

「だろ?」

そういう自信満々に言いのけた鬼灯さんは、バイクはエンジンをかける。

「あと、今度ここで魔女が居るつてなつたら、真つ先にお前疑うから、住所教えて」

「嫌です。どいつか、捕獲員なら、それくらい政府の権力でいくらでもどうにかできますよね?」

「それは面倒くさいんだよ。書類を書かなきやいけないしな。じゃあな」

鬼灯さんは別れの挨拶をし、バイクを走らせ、すぐにヒターンし、元来た道に向かつて行つてしまつた。この先が行き止まりかどうかを確認せずに元来た道を行つてしまつた。…………僕に道を訊いた意味ないじやん。なんか、少しだけ悲しくなつた。

どんどんと小さくなつていいく姿を見送りながらふと思つた。

「なんで僕は話しかけられたんだろ？」ていうか、今回は見逃されたのか

一人残された僕はなんだかなーと、目的である大通りを目指しながら何で鬼灯さんは、僕に話しかけたのか考えていた。

「ああそうか」

僕はわかつた。

「魔女を置いて家から出ることつてまずしないよな」

鎌かけはたぶん形式上のものだったとして、家に一人魔女を置いて出るなんて、人を食べないよう飼い慣らされたライオンの檻に鍵をかけないでいるのと同じじゃないか。飼い慣らされているといえ、勝手に出ていつて、他の人を襲つちゃつたらそれこそ一大事だ。

……つて僕もかなり不味いんじゃないか？ そういえば珠奈も一緒にいる……のかな……？

僕はばにらさんと珠奈（たぶん）が待つマイホームへ目指すべく、全速力で第一のチェックポイント、大通りへを探しに走つていった。

誤字脱字などあつまつたら指摘お願いします。

相変わらずの魔女草の一人組は、勝手にヒツチハイクして乗り込んだマスコミのワゴンから目的地の周辺で、勝手に止めて降りたのだった。

「真っ逆さま（滅）やつとつきましたね」

「おい、くらら。お前はうちにどんな恨みがあるんだよ？」  
ジト目で睨む真っ逆様にくららは、

「ノリで恨んでますっ！」

きらきらとしたり顔で言い放つ。

「したり顔で言われてもな～」

飽きれ顔でくららを横目に見ながら、真っ逆さまは辺りを見渡した。閑静な住宅街で、建っている家がどれもこれも新しいので、新しく出来た団地などだと感じた。魔女がこの辺りを彷徨っていると言われているせいで全く人通りがない。

「ここに魔女が匿われているマンションがあるのか？」

「いえ、あっちの方ですよ」

くららがその方角へ指を指す。真っ逆さまはその方向を見たが家で阻まれマンションの形すら見えなかつた。

「あとどれくらいの距離だ？」

「んー、直線上だと、五キロあるないかだと思いますよ。うげっ、その周りに捕獲員がいるじゃないですかっ！ ていうか、今逃げる真っ最中だしつ！ あと政府の魔女とかも居ますね……、踏んだり蹴つたりになりそうな予感がします……」

くららが憂鬱そうに言い、真っ逆さまが舌打ちをする。

「チッ。じゃあ早くしないとな。車盗つてもあとが面倒だから、走つて行くぞ」

「はー……ん？」

くららの表情が急に険しくなる。何かに気づいたようだ。

相方の異変に気づいた真つ逆さまは訊く。

「どうした？ 何かあつたか？」

くららは暗い表情のまま言つた。

「残念なお知らせがあるんですが、いいですか？」

「まさか、匿わっていた方の魔女が捕獲員に捕まつたか？」

「いいえ。そちらはまだ大丈夫です」

「じゃあ、なんだよ？」

さつさと言えと急かす。

くららは口を開いた。

「たつた今、サバドが魔女を生んだんですよ」

魔女がもう一人増えた。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

やつと僕の目の前には、愛しのマンションがまるで僕を迎えるようにそびえ立っている。ようやく僕はここまで戻つて来ることができた。

そういうえば携帯電話という、かなり便利な機械があるので、それを使えばよかつたじゃないかと、彷徨つている内に大通りにたどり着いてから気づいたのだった。さっそく携帯を出し、電源を入れようとしたが、残念なことに電池が切れていた。日頃から携帯なんて使わないのが今ここで仇となつた。どうせ大通りに出れたから必要なかつたんだけどね。

そうして、ここまで着いたのだった。

早く自分の部屋の中の現状を確認しなければと、僕は車が何台か停めてある駐車場を抜け、正面の玄関へと向かう。ここからは七階の自分の部屋が見えるのだが、その手前には流石に珠奈はいなかつた。部屋の中で待つてているのだろう。

そう言えば、僕は珠奈の前から逃げたんだ……。トラウマだから仕方がないんだ、なんて言えるわけない。珠奈になんていつたら良いのかわからなかつた。もういい。悩んでも仕方がない。この際、僕の過去を言つてしまおう。そして、告白もしよう。それでも嫌といわれるならしかたがない。ただ、誤解だけを解くことができればなんて考えていた矢先に。

ガサツ。

マンションの周りに植えられている木の茂みの陰から何か物音がした。きっと犬か猫だろうと、いつもなら思つただろう。

その茂みから、一人分の足が見えた。合計四本。片方は靴を履いていて、もう片方は靴を履いていない。裸足だ。

ここまでだつたら、本当にここまでだつたら、僕は、何も、それ以上見ずに、そそくさと何もなかつたように目を反らして、立ち去つただろう。人の振り見て我が振り直せ。というか、これ見る随分前に反省どころか、罪悪感によつて自殺しかけたけど。

僕は気になつた部分があつた。だつて、そこは僕の部屋の真下じやないか。何かしら僕に関係しているじやないかと不安になる。イチヤついているくらいだつたらまだマシだ。

うわ、淫猥な音がする。やっぱり、イチャついているだけ。

だけど、僕は気になつた。嫌な予感しかしなかつた。

僕は、意を決して、気の茂みに隠れその行為を行つてゐる二人組を見た。

「ねえ、ばにらさん。何しているの？」

۱۷۷

僕はさっきまで何かを咀嚼し、呑み込んだ、口元を真つ赤に染めた彼女 魔女に声をかけた。なぜか首には針金で作られた首輪をしている。

「ン?」

背を向けていた彼女は僕の方に振り返つてとぼけるように、僕をおいしそうに見つめてた。その視線は冷たく、恐怖を植え付けるんじゃないかと感じるくらい、おぞましかつた。

「……」

彼女はもう一度、今まで食べていた物を見た。そして、嘆息。「また、やつちやつた……」

食べていた物、まだ中学生か高校生くらい年で、くせつ毛の幼い顔立ち女の子だった。表情は瞼をぎゅっとつぶつて痛みに耐えて絶命したせいが苦しそうなまま固まり、目の回りは涙の跡が残つて、口はあーんと開いていた。きっと叫ばなれないように口に手を突つ込まれていたのだろう。その女の子は上半身は服を破られて、その服の下に隠されている女性特有のふくよかな胸がある一帯の皮膚は、全て纏包を剥がすように剥がされ、次に存在する、肺や心臓を守る肋骨は、食べやすいようにへし折られ、そこら辺に無造作に転がっていた。そこに詰まっているはずの肺、気管、心臓、食道、胃、あとは黒ずんでいて分からないが、普通の人間にとつて大事な部分はなくなつて空っぽになり、その器を注いだように血のダムが出来ている。その下の腸など器官は、これから食べようとしていたため、手を着けておらず、そのダムに濃いトマトスープ浮かぶの具のようになくなつた部分は、

「…………けふつ」

彼女が全部、美味しく、頂いちゃいました。

僕は田舎のまごとを部屋に連れ戻さず、その場からまじめに  
ひきと共に逃げる」とした。

やつれりに逃げる場所なんて在りしないの。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

背の高い目つきのキツい女性、政府の魔女こと、ふきと中学生くらいの幼い顔立ちの男の子、能力者の葛が話している。

そんな二人は、葛とふきは一人の少女の死体前でだべっていた。遠藤雅樹という今回のターゲットがここマジックショーンに住んでるから、接触ぐらいはする予定で来たのだったのだが、マジックショーンの入り口を探していた時、この捕獲員の少女が喰い殺されて放置されているのを葛が発見したのだった。

葛が少女の死体を指で突つついて、楽しそうに観察している姿を見て、ふきは嫌そうに目をそらし、胸ポケットに入れていた煙草を取り出して口にくわえて、ずっとだべっていた。

「やつと楽しくなってきたね？」

「どこがだ。死人が出ている時点で俺様は萎えるな」「何言つてんのさ。こいつの一人一人、死んだ方が面白いに決まっているのに」

「その考えはあぶねーと思うぞ？」

「いいや、正しいよ。全くの正論さ。誰も死なない推理小説なんてつまらないよね？ ノックスの方だっけ？ それともヴァン・ダインの方かな？ 確かそんな感じの規則があつたよ。それと同じさ」

「それはあくまでフィクションの話であつてだな」

「そこなんだよ。そこが面白くない。わざわざフィクションと現実つて壁を作っちゃっているから、現実は面白くないんだよ。いや、箱に例えた方がいいかな？ 現実の箱には、つまらない物が詰まつていて、合理的で人畜無害な物ばかりだからね。対局するフィクションの箱には、現実の箱に入れられない面白い物が捨てられるんだ。面白い物は有害であり、被害が及ぶものもあるから求めないし、取り入れるとしても副作用の少ないものしか取り入れない。あとは無理だと決めつけてる固定概念もあるね」

ふきの頭の上にクエスチョンマークが浮かぶ。葛がうーんと考えて言つ。

「うーん、簡単言えば、宇宙について研究するつて壮大でロマンがあるけど、ぶっちゃけお金も時間かかるんだよねー。スペースシャトル打ち上げるのもお金掛かるし、打ち上げ失敗したら乗つてた優秀な人材も死んじゃうかもしれない。ぶっちゃけ見合つた分返つてくるわけでもないから、この分のお金と時間と人材を別なもつと確実で利益になる仕事に回した方が効率的にいい。よし、止めてしまおう。つてこと。これは心底つまらないでしょ？」

代わりに莫大な利益がある人工衛星打ち上げるつてのもあるねと付け足す。

「確かに……つまらないな」

「でしょ？だから僕は強制的に面白くするんだ」

胡散臭そうな話になつてきたと、ふきはいつものように聞き流す体制になる。

「どうやって？」

「誰かのHゴトを使うんだよ。合理的に損得の判断をしないで私利私欲的に物事を進めてくれる。それも僕好みの面白い方向にね。それを僕は操る。というよりは、みんな同じ方向に並べて、誰か一人を最後に押し倒すんだ。あとは皆勝手にドミノ倒しみたいに倒れいく。それを傍観するのが楽しいんだ」

「へえー。わつけわからね。で、これからどうすんだよ？」

話題飽きストライカ、次に何するのか不機嫌そうにふきが訊く。

「んー。魔女草ストライカの魔女たちもやつとこつちに来たみたいだし、これから下準備も終わつた。仕事の方はターゲットは殺せなかつた、ということ終わらせて、あとはこの顛末でも傍観してますか」

「……何のためにここまできたんだよ……。俺様は……」

ふきは疲れ果てたようになだれる。そんなふきを気遣いなどしない葛は言つ。

「一旦ここから立ち去るよ。機関の回収班がこの子を回収しに来る

からね。はいわせたら面倒だ

「分かったよ

葛は立ち上がり、すたすたとその場から立ち去つてこぐ。その後ろをふきが着いていった。

「ところで、傍観つて、そんなに面白こか？ 俺様は、見てるよりは、やる方が面白いと思つぞ？」

「傍観だつて面白こみ？ それにふきが言つてこるのは全く違つことだよ」

「どうこつ意味だ？ それ？」

「どちらも全く別物あつて、ふきが訊いたのは、極端に例えると蟻と鯨を比べてどちらが空高く羽ばたいて飛べるか訊いているのと同じだよ。つまり、どちらも面白こんだけど、全く別の楽しみ方なの

や

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

急に百合子からメールで呼び出され、魔女を捜して走って回っていた鬼灯は、進路換え、百合子のメールに添付してあった地図の場所に向かった。

そこにはマンションがあった。確かこならが回るといっていたマンションだ。

そこに着いて、愕然とした。

「…………なんだよ、これ

そこには、こならが仰向け、片目を抉り取られ、無惨にもぱっくりと開かれて中を喰い荒らされて、放置されていた。

もちろん、息などしているわけがない。

「私は、こならちゃんが生きている間、と言っても最後のとどめの時に丁度、ここに着いたんだけどね。その時に近くにいたから、私の能力で、脳死になつていないわ。でもこれでは死んでいるに等しいわね」

百合子はたんたんと述べていった。

百合子の能力は、ひとことで言えば維持。百合子の近くにいれば生きた細胞は機能を失うことなくそのままの状態で保存され、固定される。つまり、栄養や酸素を失つてもそのままの状態で保たれる能力だ。生きている細胞なら、その形のまま、劣化することも、成長することも、活動することも、老いることも、朽ちることもなく、そのままの状態で保たれる。

捕獲員として百合子はこの能力を使い、魔女に切り落とされた捕獲員や警察、一般市民の腕や足の細胞を保存、固定することで、切り落とされた部位は常温だらうが何だらうが、腐ることなく、いつでも手術で繋げる状態で保け、損傷の被害を押さえることに使われ、捕獲員の治療係としている。

だが、今こならの状態では、固定もなにもなかつた。

「……お前は助けなかつたのか？」

鬼灯は百合子に力なく訊いた。

「……」にについた時に、丁度どめを刺されたつて言つたでしょ？

助けようにも、曲りなりにも、私より強いこならちゃんを殺した魔女に、一人で立ち向かうなんて無駄死にもいいところよ。その前に、鬼灯君こそなんでここに来なかつたの？ そもそも、あなたたちまで「一手に分かれているのよ？」

「それはこならが分かれて探そつて、提案してきたんだ。それに連絡もなしに、ここまでに駆けつけられないだろ……」

百合子はおかしいわねと言つ。

「連絡もなし？ 私にはちゃんと魔女を見つけましたので、回収班を呼んでくださいって、メールが来たわよ？ 一人じゃないわよね？ つて返信したら、隣に先輩がいるんで大丈夫ですよって、返つてきたわよ」

「……」

百合子はため息をついて、横たわつて「こならに近づき、しゃがんで、こならの頭を撫でた。

「本当にこの子は馬鹿ね。鬼灯君に怪我させたくないからつて、一人で魔女に向かつて行つて、返り討ちにされちゃうなんて」

「……」

ずっと鬼灯は黙つたままだつた。

「私はこの不祥事を機関に報告してくるわ。鬼灯君はこならちゃんを襲つた魔女を連れていつた男の子がいるから、その子と魔女を追つかけて行つて。名前は遠藤雅樹君。今日、わたしが電話で言つてた子よ。写真があればいいんだけど」

「…………そいつなら知つている」

さつき会つたと簡潔に説明する。

「そう。ならあとは任せたわよ」

そういう百合子はこの不祥事を報告するのと、鬼灯の為に自分の能力が届くぎりぎりの範囲まで離れようとしたが、思い出したよう

に言った。

「一つだけ、鬼灯君に謝らないといけないことがあるの」百合子が立ち止まって鬼灯の方に向かい合った。

「私、前に、こならちゃんと鬼灯君に告白したいんですけど、どうすればいいか訊かれたことがあったの。その時、私は面白い事になりそだつた茶化してその場は終わつたんだけど、こんな事があるなら素直に手伝つてあげればよかつたなーって」

「お前、俺に謝つてないぞ」

「気づかない鈍感なフリをしていた鬼灯君も悪い。それにこれは、お相手よ」

「……責めないのか？」

「何を？ 責めるることなんて一つもないわよ？ 少なくとも私からはね」

そういう百合子は報告しに行つた。

「…………全てお見通し、か」

鬼灯はこならの横にゆつくつと腰を下ろした。

「お前、本当に馬鹿だよな。ちゃんと連絡しろって言つてやつたのに」

着ていたジャケットを脱ぎ、こならのぱつくりと開いた胸を隠すよつにかけてやる。

「もうお前が後ろに乗らないのか…………」

鬼灯はこならの顔にふれる。もう冷たくなつていたが、まだ皮膚は柔らかい。

「ごめんな。俺は

何分かその場にしゃがんでいた鬼灯は、ゆつくつと立ち上がつた。

「じゃあ、お前の敵討ち行つてくる」

そういう、鬼灯は止めていたバイクの方へと歩き出す。

けたたましくエンジンをふかし、バイクは飛び出していった。

鬼灯の後ろの席は、空いたままだつた。

誤字脱字などあつましたら指摘お願いします。

ばにらさんに僕のあとに着いてくるよ」につけた。ばにらさんは、うん、と頷き、人を食べた後にもかかわらず、平然と何もなかつたかのように僕に着いてくる。

ここから早く逃げなくては。この言葉が僕の頭の中に浮かぶ。

この場所に居続けたら捕獲員がばにらさんを捕まえに来るという焦燥感が、僕の体を逃げ場ない逃走へと走らせる。

捕まつたらといって殺される訳ではないし、まだ分からない事が多い魔女の体の生理的機能を調べるため、生きたまま解剖という非倫理的なことを他の機関、国民が許すわけがない。だから、捕まつても安心。といううたい文句がある。

でも、魔女たちは、出頭しない。

魔女が自ら政府の機関に出頭するのは極僅からしいとニュースやゴシップ紙で書いてある。その理由として、ニュースでは、まだ元の人に戻る方法がないのにその魔女から人へと戻る方法が研究、確立するまで隔離されるのが嫌で、出頭したくないではと、一方のゴシップ紙では、国は人体実験をしていないと覆い隠し、実際は、魔女を使って人体実験がされているのではないかと、高校生の間で噂になつてているからとだといい、例をあげるときりがない程、様々な理由が上がっている。

出頭しない理由なんて、魔女それぞれ、それこそ十人十色な考えがあり、一概にコレと指さすように決めつける事は出来ないだろう。だが、僕の後ろに着いてきてる、ばにらさんは捕まつてはならないと僕は思う。

それは、ばにらさんが特別なのではなく、ばにらさんが捕まつたら、僕が僕自身にかけた、魔術的でも、科学的でも、何でもないただの呪いが僕を殺すからだ。ほらまたなぶつて見捨てた、とせせら笑いながら僕を殺してくる。それから逃げたいから、怯えながら必

死に走つて逃げているのだ。

それだけでは僕のエゴのためにやつてゐる偽善じやないかと言われば、返す言葉もないが、ばにらさんが捕まることによつて魔女たちにとつても悪いことが一つある。

僕が思つにばにらさんは、ここ一帯の事件の犯人である可能性が高く、襲つた人の数は、少なくとも六人以上。これが意味するのは、魔女は無意識に人を襲つていたから、魔女自身に罪はないという、人を殺して食べてしまつたことのある魔女を刑罰から救つていた命綱を切られる可能性があるのだ。

魔女は選んで人を食べたのではないか、人を食べること快樂を得ていたのではないか、だから、刑罰を与えるべきだと被害者の遺族たちが団結して交渉する反論の事例として使われてしまう。

だから、捕まつてはいけない。僕のエゴの為にも。他の魔女たちの為にも。

「ばにらさん、なんで、あの子を食べたの？」

走り息を切らしながら僕は後ろについているばにらさんに訊く。

「宅配屋さんだと思つて、扉を開けたら、男の人の声がしたのにあの子が立つていて、部屋に置いておくタイプの殺虫剤を部屋の中に投げ込まれて、ここまま部屋の中にいたら魔女だつてばれちゃうと思つて、部屋の外に出たら、あの子が鉄線でわたしの首を切ろうとしたから……………食べたんだと思う

ばにらさんはしどろもどろになりながらも話してくれた。

ばにらさんの能力は筋力強化系と推測した。七階の僕の部屋から捕獲員の女の子を手すりの上まで持ち上げ、地面まで一緒落ち、手の力だけで解体したのだから、筋力強化系の能力じやないと、そんな離れ技ができるわけがない。

あともう一つ、ばにらさんが危険にさらされると、空腹時と同じように無意識で、自分を狙う危険因子を襲う自動的な能力もあると

思われる。つまりばにらさんはお腹が空いていなくても、人だけを襲うことになる。

自分を襲う者、天敵が少ない魔女の首を刈り取る捕獲員のことだ。僕は返事を返すことなく走ることに専念した。なんて返せばいいのかそれこそわからなかつた。

ばにらさんが呟く。

「やつぱり、わたしは生きてちゃいけないのかな……」

そんなことはない。

と、言つことなく僕は何も返すことが出来なかつた。僕も同じ様な物だつたから言える立場ではなかつた。

生きなきやいけないとか、死んだ方がいいとか、そんなの、

どつちだつて、同じくそつであつて、どつちも、同じくそつではないんだよ。

しばらく住宅地の中を走つていると前方から誰かが歩いてくる。僕は焦つた。ばにらさんの血に染まつた格好を見られたら、間違いなく魔女だと通報されてしまう。

僕はばにらさんを電柱の陰に隠れさせて、目を凝らしてその人を行動を観察する。どこかの角で曲がってくれと。

その人が近づくにつれて、僕はその姿、服装に見覚えがあつた。

「…………珠奈?」

前からふらふらと歩いてきたのは珠奈だつた。何故かさつきまで着ていた服ではなく、着替えていたようだ、

見知つている人だとほつとし、ばにらさんが電柱の陰から出でくる。

だが、珠奈の様子がおかしかつた。

薄気味悪い笑みを浮かべながら珠奈は、僕だけをなめ回すように見つめていた。

「あはっ、雅樹だ～」

妙に媚びたような声色で、僕に話しかけてきた。

「どうしたんだよ……急に」

僕は戸惑いながらも、一刻も早くここから、遠くに逃げ出さなければ行けないと伝えようとした。

「珠奈、今」

僕が内容を話す前に、珠奈は急に僕に抱きついていた。なぜか僕の胸に顔を押しつけて、必死に匂い嗅いでいる。

「つー？」

「えへへへへへ、いい匂い」

「急に何してんだよつ！」

僕は抱きついていた珠奈を引き離し、今どれだけ危険な状態かを説明しようとした時には、もう遅かったことに気づいた。

遠くからこちらに近づいてくる、あの捕獲員が乗っているバイクの音が聞こえた。

「つー？ ばにらさ

僕の口は真知の手によつて閉じじられてしまつた。

「だあ～め。あんな」「！」と話を聞しちゃあ

僕は目だけで、ばにらさんを探した。ばにらさんはこの奇々怪々な状況に、自分は一体、何をすればいいのか、分からずただその場でおろおろしている。

ばにらさんだけでも逃がさなければ。僕は一人で逃げて、と言おうとしたが、珠奈に邪魔されてしまう。

バイクの音が大きくなつてくる。近づいてくる。

ばにらさんが言つた。

「あのつ、

ぐぢやつ。

潰れた音がした。

「「へ？」

急に聞こえた何かに刺さった様な音に、僕と珠奈は何があつたのか、どうしてそんな音がしたのか、分からず 分かつて いたけれど、信じられなくて、疑問の声を漏らした。

「……………痛イナア？」

目の前では、にたあと楽しそうに笑い、背中に手を回し、投げつけられて、釘抜きの方から刺さり、体に埋まつた金槌を引き抜き、道路に捨てたばにらさんは、

「お前か……………」

今まで乗つっていたバイクを止めて、もう一つ金槌を取り出しながら、怒氣と憎悪を込めた深海よりも暗い視線で相手を睨む鬼灯さんは、

「ネエ、アナタ？」

「お前さあ」

「食べテイイカシラ？」「殺していいか？」

と二人同時に言った。

そう尋ねあつた瞬間、

二人は殺し合いを始めた。

鬼灯さんの金槌がばにらさんの体めがけて振り下ろすが、ばにらさんは右横に飛んで攻撃をかわし、鬼灯さんの体、めがけ手刀を突き刺そうとする。

鬼灯さんは左手でばにらさんの手刀をつかんで止めた。ばにらさ

んはこのままだとまた金槌を振り下ろされると困ったのだろう、後ろに飛び距離を取った。

一人は笑っていた。楽しそうに、嬉しそうに。

僕は狂っていると素直に思つた。

一番の異端者はこの僕なのに、そう直感した。  
キチガイ

「雅樹、ここにいると危ないから、別なところで話そ

僕は腕を珠奈に捕まれ、引っ張られるまま、この戦場から逃げる

ことが出来た。

ひとくじ！ Tamana Ango-e (前書き)

誤字脱字などあつまいたら指摘お願いします。

私は彼の隣を守りたかった、それだけだったのかもしれません。確かに好きという感情はありましたし、ずっと一緒にいたらどんなに幸せなんだろうなーと考えに耽つたこともあります。

でも、それは本当は彼の隣にいればなんとなく安心する、勉強とかややこしいこととか、面倒くさいものから離れることができる、そんな漠然とした都合の良い想いなのでしょう。

奇跡も運命もロマンチックも何もない、ただ偶然出会っただけ。それだけなのです。

その中で私はそれ以上を求めてしまっていたのです。

それが私の間違いであり、一つの悔いでもあります。

一から六の六面のサイコロではどんなに頑張っても十の目はでないよう、無いものを、あると理想を押しつけ、それが出てくれる、奇跡が起こると思っていたのです。

それを私は、決して信じてはいませんでした。

信じるも何も、はじめから絶対に起こると仮定していたのです。蛇口を捻れば水が出るよしに、それが当たり前だに思っていたのです。

蛇口から水が出てきてほじこと信じるのは馬鹿げてること言わんばかりに。

そんなことを信じている人も近くにいるとは知らずに。

その勘違いに気づければ、こんな終わり方にはならなかつたでしょう。

彼が泣くことは無かつたでしょう。

苦しむことも無かつたでしょう。

それでも、こうやって終わるしかなかつたのです。

奇跡は起ららないのです。

すべては偶然なのです。

偶然、そうなつた、だけなのです。

運が悪かった、それだけなのです。

それを奇跡とは、私は呼びたくないのです。

誤字脱字などあつまいたら指摘お願いします。

「ちっ、一足遅かったか」

真っ逆様は苦虫をつぶしたようなしかめつ面で、目的地にしていたマンションを見上げる。くららが言うには、この場所にはもう、魔女、捕獲員の気配はすでになく、立ち去っていったらしい。

「まだ近くにいるみたいです。早く行きましょう」

くららは真っ逆様に早口で言つた。真っ逆様も、ああと返事し、追いかける捕獲員から逃げるべく、この場所から離れた魔女を追う。

「おっ、魔女草の連中が来たぞ？ 葛？」

「うーん。ちょっと待つて、今いとこだから」

そのもつとも会いたくないと言つていた奴の声がした方に、真っ逆様とくららはゆっくり振り返つた。

「……………政府の魔女」

真っ逆様が唸りながらふきを睨んだ。くららは真っ逆様の後ろに隠れて顔だけ出して、その最悪とも言われている一人組を凝視していた。

くららが訊いた。

「わたくしの能力ではあなたの方の気配は遠くにあるよに感じるのですが……どういうことですか？」

ふきの隣にいた葛が答える。

「それは僕の能力だよ。詳しく述べは教えないけどね。それにしても君は魔女なのに僕と同じ探索系の能力つてのは珍しいよね。君が捕獲員に捕まらないで、魔女草ストライガに入つたのは僕としては嬉しいがぎりなんだよ。これから物語には欠かせないものになつてくるに違いない」

そういうわれくららは葛を睨む。

「……それはどういった意味ですか？」

くららが聞き返し、葛が言った。

「ああ、とくに意味はないよ。でも、理由はある。それはね、娯楽の為にやっているのさ。そういうと誰かが、なんて無益なことの為に人を玩具みたい言いやがつてとか文句を言つけど、それはお門違いだと僕は思うけどね。君はどう思う？」

真つ逆様の後ろから出て、くららは淡々と言つ。

「わたくしに訊かれても困ります。貴方を論破するために食つてかかるために訊いたわけでもないので、なんと答えたところでわたくしにとつては別にどうでもいいことなんですよ。」

「ふーん、てつきり、僕らが魔女草ストライガを潰しくるだらうから、その相手の戦力の情報でも引きだそうとするんじゃないかな」と考えたんだけど、見当違ひだつたみたいだね」

「そんなの、潰れるときは何やつても潰れるんですから、訊こうが訊くまいが、どうつてこともないです。それに貴方が言つことなんて信用しないと決めていましたから」

「それは名案だ。そうした方がいいよ」

「そもそもわたくしたちが貴方たち勝てる勝算なんて一つもないんですから」

「確かに　ん？」

一瞬葛が嫌な顔をした。

「ちよつと待つて。ふき、こいつら殺して」

葛がふきにレストランでお水をもらつて様な気軽な感じで、頼んだ。

「いきなりだな。いいけどよ」

ふきは躊躇いなく実行する。

ふきは右手を真つ逆様とくららに向けて振つた。

すると一人はあつけなく首を切られた。

重力に従つて首と胴体が地面に落ちていぐ。

ふきが訝しげにたつた今、自らの魔女としての能力で作り上げた死体たちを不思議そうに睨みつけ、どう観察しても頭にピンと来なかつたのか葛に訊いた。

「おい、こいつらあの魔女の幻影だったのか？ それとも仲間割れでもして、同族殺したのか？」

葛は感心するようになつた。

「途中から道化の魔女が能力使つていたみたいだね。僕らと討論して足止めさせようとしたみたいだ。僕が騙されるくらいだから、相当すごいと思うよ」

「お前を一瞬でも騙せるってすげーな。で、その能力使つているヤツが近くに居なくとも、能力として機能できるのか？」

「今の十分機能している所を見ただろ？ だから機能したってことだよ。昔の道化の魔女の能力は一人だけに幻覚を見せるものだつたからね。まさか、二人同時に同じ幻覚を見せてくるとは思いもしなかつたよ」

「同時同じもの見せるって簡単にできねえのか？ ほら片方だけにあたかも一人同時に見せてますよみたいに幻覚を見せるってな感じで」

「できないつていうか、そのやり方もできるんだけど、敢えて実用には難しい方を使ってきたんだよ。この場合、一人だけを騙すのは騙せないと同じことだよ」

ふきは理解できないのか不満そうにする。

「答えになつてねえぞ」

「道化の魔女の今的力量では、相手一人しか完全な幻覚を見せられないんだよ。五感のすべてのコントロールをするのは、一人だけでも十分難しいからね。それに僕らは一人組だから、ふきが言つたとおりに一人があたかも二人とも、幻覚にかかっているように見せられても、もう一人は相方が、幻覚で使い物にならなくなつていて気づくでしょ？ その時点で、道化の魔女の勝ち目なんてないよ。だから一人、同時に完全な幻覚を見せるよりは、それよりも簡単な

二人同時に同じ物を見せ聞かせる、聴覚と視覚だけを操ったわけ。これだと気づかれるから、僕はやつてこないと腹くくっていたんだよ。実際はまんまと裏をかかれて、引っかかった

「うーん、そうなのか」

「それと僕がふきに、こいつらを殺してと言つたのは、これが幻覚かどうか確かめるためなんだ。実際よく分かつたらなかつたし、触ろうとしても離れようとするようにしてあるだろうね。こいつら、ふきの能力を椿と同じと考えているから、ふきが能力を使えば、なんでも首が切れて死んでしまう、なんてボロが出てくるんだよ」「誰があんな首切り飛蝗と同じ能力かつての」

「そんなこと言わないでよ。仮にふきが駄目だつたら椿にこの仕事を頼もうかつて考えていたんだから。それよりも、最初から逃がしてあげる算段だつたのに、なんで逃げたのかなあ？」

「それだけお前と俺様が嫌われているってことだろ？」

ああそうかもと葛は言つてニヤリと笑みを浮かべた。

葛がべらべらと説明している間、このマンションの住民らしき男性が葛の目の前を通過した。そして、突つ立て話している葛を見て、いと装いながら通過していった。

「頭、大丈夫か？ この子？」

ちなみに真っ逆さまの能力は、相手の五感すべてを別な情報に置き換えるものだが、真っ逆さま自身が近く居なければこの状況みたいな複雑な事は出来ない。いや、近くにいても出来やしない。その複雑な状況の例としては、二人同時に同じものを同じ空間に居るようを見せたりすることだ。

その様な二人の意識をシンクさせには、一人の脳が右足を動かそうとした場合、その脳から出た指示、信号を真っ逆さまが感知し、もう一人の視覚にそう動かしたように見えた情報を置き換えるければならない。そうする場合、その二人の脳の信号を感知するため、必然的に近くに居なければならないのだ。そうしなければタイムラグが発生し、うまく機能しなくなる。コンピュータの様に一回打ち込めば、後は自動でやってくれるものではないし、打ち込んだ膨大な数の指示をそつくりそのまま覚え、そのままやつてもらつても後々困る。こんな、逃げる秘策としては到底使えない。敢えて使うとしたら、仲間割れを誘うくらいだろう。

そもそも、真っ逆さまの能力では相手の脳からた信号を、自分の脳が感知するなんて出来ないのだ。出来たとしても、頭からでる信号を理解するなど無理だ。“足を動かす”という信号が、伝わりやすい文字のまま頭の中に入つてくるわけない。その膨大な数の複雑な信号を処理するにも、人の頭ではどう頑張つても無理なことだ。

そんな難しいことよりも簡単な足止めを出来る方法がある。

それは、一人ひとりに別々な五感の情報に置き換えることだ。これなら、別々に違う幻覚を見せるので、お互いに干渉させるわけでもないし、近くに居なくても相手の脳が勝手に混乱してくれる。

というわけで、先に幻覚から醒めたふきは、魔女草ストライガの連中は追わなくていいと葛から言っていたので、まだ幻覚から醒めず、一人、混沌とした似非説明をしている葛を放置して、煙草を買いに行つたのだった。

+

「あのチビのステルス能力、卑怯すぎるだろっ！？」

真つ逆さまの能力により、葛とふきから振り切ることができた魔女草の二人は勧誘する魔女の元へと向かおうとしていた。

「確かにあれは卑怯ですね」

くららが疲れました。と額の汗を拭つた。

「で、これから魔女を勧誘しに行くのか。あのチビ、魔女の居場所までも変えてるんじやねーだろうな?」

「それだと思います。真つ逆さまが能力を使つた時点で、もうあの人たちは使いものにならないでしょうし。それよりもたつた今、その魔女と追つていた捕獲員が戦いを始めたみたいですよ」

「早くしないと、うちらが勧誘するまえに、捕まるかもしれないからな」

「…………」

「どうした?」

「捕獲員なのか、ただの能力者なのか、わかりませんが……、魔女と捕獲員の戦いから、遠ざかるように逃げていく能力者が一人いるみたいで、その人を追つているのが強奪の魔女が近づいて、えつ! ?」

「おい、本当にどうしたんだよ?」

くららが血相を変えて叫んだ。

「この能力者つ、本当に危険ですつ! わたくしたちの仲間にするかつ、もしくは殺さないといけませんつ!」

面を食らつた真つ逆さまはくららを落ち着かせようとする。

「おい、焦るなよ。ちゃんと話せて」

だがくららは落ち着くことはなかつた。

「真つ逆さまは、今戦つている魔女と捕獲員の方に向かつてくださいつ! こっちの能力者は、わたくしが何とかしますからつ!」

そう言つとくららはわき田もくれずにその能力者の元へと走つて行つてしまつた。

相方が急におかしくなり、途中、呆然としていた真つ逆さまは一人取り残され、

「…………。おい、どこで魔女と捕獲員が戦っているか、訊いてないんだけど……？」  
ぼそっと呟いた。

誤字脱字などあつまつたら指摘お愿いします。

どんどんと殺し合っている一人から遠ざかっていく。

ばにらさんを守るために行動したじゃないか？ と体を奮い立たせようとしても、あのばにらさんの獰猛な肉食獣の目、人を喰おうとしている突き刺すような目を見たら、そんな腐った正義感も一瞬で吹き飛び、過去のトラウマ、魔女になつた姉が、殺した両親を美味しそうに貪つてゐる姿が代わりに浮かんだ。そして当然のように怯え、恐れ、逃げてゐる。

そんな僕の黒歴史を思い出したくないのか、現実逃避に近い感覚で、珠奈の様子がおかしいのはどうしてなのだろうか、と考えようかと思いこませたが、考えれば考えるほど余計に分からなくなつていいく。そりやそうだ。トラウマの方が強いもの。僕の思考に恐怖の墨をぶちまけて隠していった。あーあ、本当に情けない。

何故か珠奈は僕が住んでいるマンションの方へと向かつてゐる。そこには、ばにらさんの食べ残しがあって、今、警察、あるいは政府の機関が後片づけをしていることだろう。近づきたくないと今は言えず、ただ黙つて珠奈の後を着いてく。

だが急に珠奈が立ち止まつた。そこは誰もいない、古い空き家の前だつた。

「どうしたの？」

珠奈は僕をその空き家の中に連れ込んだ。

空き家の鍵は何故か開いてあり、僕はされるがまま家の中に入れられる。

靴置き場は広く、その先には廊下が続き、扉が三つあつた。

家に上がることなく珠奈は振り返り、深呼吸をし、決心が付いたのか、満面の笑みで僕を見て言つた。

「あたし、雅樹のことが好きだよ。世界中で一番愛してゐる」

僕はその唐突の告白にたじろいだ。

「な、何、急にそんなことを」

「そんなことじゃない。あたしにとつては大切なことだよ？」

「じゃあ、何で、こんな時に言つんだよ？」

珠奈は話しながら僕に近づいてくる。

「今までは、まだ時間があるからとか、フラれたらとか、恥ずかしいからとか、色々と考えて、躊躇して告白でなかつたけど、あのゴミが現れて、このままじゃ、雅樹を盗られそうで、何とかしなきや、つて思った。でも雅樹があまりにも真剣に「ゴミのことばかり考えているから、本当に盗られちゃうつて感じた。だから早く告白して自分の物にしなきやつて。でも、できなかつた。雅樹を抱きしめたのに拒絶されて、ああ、あたじじやあ駄目なんだなつて思った」

「……珠奈」

「でも、今は違う。あの「ゴミ」と同じ条件で、雅樹好みの女の子になつたんだ」

僕は珠奈の言つている意味、意図が分かるが理解できない。そもそも僕好みの女の子って、珠奈なのに……。

ちょっととまで、「ゴミ」っていうのは多分、ばにらさんのこと

で、ばにらさんと同じ条件つて

「ちょっと待つてね。やっぱり好きな人の前でも恥ずかしいから」照れながら真知は上半身に着て いる服を脱ぎ始め、ついでに肌着とブラまで脱ぎ、半裸になつた。

僕は沈黙した。みとれていたと表現できるかも知れない。

真知の二つの乳房の間、僕から見て右寄りに、ぽつかりと握り拳より一回り大きいくらい穴があつた。貫通はしていないがその部分の中身がドス黒くみえ、ぐり貫かれていたことがわかつた。その穴からは肺と白い肋骨も見えた。そこからの出血はもうすでに止まつているようすで、血が吹き出している様子もない。そもそも吹き出るようにするには、血液を送り出すポンプの役割の臓器が必要だ。そ

れがくり貫かれているのだ。  
それがない。

ない。

ない＝死

死＝動かない

じゃあ、目の前にいる僕の好きな人はいつたい、

何？

「恥ずかしいからそんなに見ないでよ。あとで他の所も沢山見せてあげるから。だつてあたしは雅樹のものなんだよ。好き勝手にしていいんだか」

珠奈の体が僕を真っ正面から抱きしめる。珠奈の胸の穴から出て黒く固まつた血液が僕の服を汚した。珠奈の肌を直に触れた感触はそれなりに柔らかくすべすべしていて良かつたが、温もりは一切感じられず、人は思えないほど、

冷たかつた。

僕の口を真知の口で塞がれた。珠奈の唇は独自の柔らかさがあつたが、

つめたかつた。

僕の唇の間から唾液で濡れた珠奈の舌が進入して前歯に触れた。だけど、

ツメタカツタ。

前歯の奥の僕の舌に触れ、弄んで、口の中を舐め回している。やはり、

Tumetakattaa。

ボクハ、コンナフウニ、オボレタカツタソジヤナインオカ？

「ふはっ」

珠奈は満足したのか長い長いキスを終え、自分の唇に残る僕の唾液を舐めとり体を痙攣させながら恍惚とした表情で僕をなめ回すようみた。だが珠奈は僕の様子がおかしいことに気づいた。

「……どう、したの？」

まさかあたしとこんなことしたくなかったの？　と言わんばかりに寂しげな表情で僕に訊いてくる。

僕は、訊いた。

「……珠奈は魔女になつたの？」

珠奈は屈託のない笑顔で返した。

「うんっ！　魔女フェチの大好きな雅樹のためにわざわざサバドに心臓を渡したんだよ？　痛くて痛くて何回も失神したけど雅樹が喜んでくれると思ったから頑張れたんだよ。大好きな雅樹の為に」

僕は最後まで聞かずに訊いた。

「じゃあ、何で」



「珠奈は、燃えないの？」

「へ？」

言つてなかつたつけ。

僕は能力者で、その能力は、僕が触れた魔女を、再生できなくなる  
死ぬまで燃やす能力だつて。

あと、その能力で、魔女を、人を、肉親を、姉を、殺したことあるつて。

ひとくじ ! M a s a k i A n g o - e × × × × × ( 前書き )

誤字脱字などあつまつたら指摘お願いします。

僕はあの時、セックスという同じことの繰り返しの行為に飽き、嫌気が差して燃やしたのだろうか？

それとも僕の中の良心という名の灼熱の聖なる炎が近親相姦という一人手を取り合って、愛し合って、騙し合って、犯した罪を燃やしたのだろうか？

はたまた僕の能力がたまたまその時に僕の中に眠っていた能力が開花し、偶然が偶然を呼び、いくつもの偶然が重なつて燃やしたのだろうか？

それこそ、恐竜がなぜ絶滅したのか生物がどうして生まれたのかとかみみたいに、いくつもの推論があつて、どれもが正しいと言えて、どれもが間違つていると言える、そんな、どうにでも考えられる絞り津でしかない。そんな排他的なものをずっと考えている。

姉が魔女になり、父と母を食らい、僕が姉を性的な意味合いで食べて、それを愛と偽つた次の日。

僕と姉は世界のすべてから逃げようと逃避行を企てた。  
そんな無鉄砲な計画なんぞ、すぐに破綻することくらい姉の頭だつたら、すぐにわかつたはずだった。しかし、そのころには姉の精神はもうずたずたに壊れに壊れ、僕さえいれば、誰を食ようが雅樹さえ居てくれれば気にしないよ、いつのけるほどボロボロに壊れ、心の支えを、たつた一人の血の繋がつた異性の家族の愛情を求めていた。

だから僕も一緒になつて壊れた。  
さらに愛したいと思つてしまつた。

愛するなら愛する人と同じでなければ愛せない。

それが僕にできると信じてしまった。

その日の晩は、今度は姉から誘つてきた。

愛して、と。

全く、セックスするのに都合のいい言葉があるもんだと、今の僕ならそう言い捨てるような甘美で、甘い蜂蜜の様な台詞に、我が身を忘れさせて誘われる蝶のように食らいついた。もちろん僕はすぐ興奮した。

このときの僕は、当たり前にのように姉を愛そうとした。これからも、ずっと壊れた僕らはそうやって生きるんだと。

けれど、その夢は、儚く燃えた。

罰が下つた。

僕が魔女になつて冷たくなつた姉の体に触れた瞬間、

姉の皮膚、すべてから火が上がつた。

絶叫が上がつた。

僕はその怪奇現象に驚いてとっさに後ろに引いた。

姉が熱いと、僕の名前と助けを叫び狂い燃えながら、熱にもがき苦しんで暴れ狂つていた。それはくるくると踊つてゐるようになつた。

僕は必死に姉から上がつた火を消そうと、必死に水をかけたり、布をばたばたさせたりして火を消そうとしたが、すべて効果は全くなかつた。不思議なことに、姉から発火した火は、僕や他の物を一切燃やさずに姉の体だけをうまく焼いていつたのだ。

最後に姉は、僕に抱きついた。

僕には一切燃え移ることも、皮膚が熱で焼かれることもなく、その業火は、火力だけまして、姉を体だけを上手に焼いていく。

姉は、ここで正氣に戻れた。  
死の瀬戸際で、僕に、言った。

「これが、罰なんだね」

僕は、罰を受けられなかつた。

ついに姉が倒れた。体の水分は蒸発し、人を形作つていた多くのタンパク質や脂肪はすべて炭になり、骨と骨を繋ぐ間接が燃え、もうくなつた両腕が落ちて、バランスを保てなくなり、重力に負け、その場で崩れていつた。

床にぶつかり、姉の形は固形物と呼べるくらい小さくなつた。姉は、夢のみたいに、砕け散つた。

魔女が本当に死んだ。

同時に姉も呆氣なく死んだ。

間違えた、僕が殺した。

そして、狂つて、壊れた僕だけが、図々しく生きていた。

魔女になつた姉を殺して、

魔女にした姉を殺して、

姉を殺して、

殺して、

図々しへ

泣いていた。

グロテスク、性的描写が多数（特にグロ）ありますので注意して  
お読みください。

頑張つて毎日更新してますが、作者の限界が近いので、更新できな  
かつたらすみません。

誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

「くたばれ」

鬼灯はばにらの至近距離まで瞬時につけ、右手に持った金槌をばにらの左肩めがけ、振り下ろした。

「嫌ダワ、痛ソウダシ」

ばにらは振り下ろされた右手首の掴んで止めて、

「ソレニ美味シソウ」

掴んだ右腕に噛みついた。

「くつ、」

噛みつかれた鬼灯の腕の肉は、ばにらの歯がどんどんめり込んで、肉を裂き、血がにじみ出でてきた。

ばにらは、嬉しそうに肉から染み出た鬼灯の血液を堪能する。骨を噛み碎き、肉ごと引きちぎり、そのまま神経がつながっているこの状態で咀嚼しようか、楽しそうに迷い、そして動きを止めた瞬間に、ゴツッ、と首に重い衝撃が走った。

鬼灯が残った左手にある金槌を、ばにらの首、体からの神経が集中している所、めがけて振り下ろし、首の骨を粉碎したのだ。

驚いたばにらは噛みついていた鬼灯の腕から口が離れ、碎け散った首の骨が脊髄を切断したために、脳からの信号断たれた体は、自ら立つことができず、重力に従い、その場に倒れ、受け身もとれない為、顔面からアスファルトにぶつかった。

倒れ込んだばにらの頭を鬼灯がおもいつきり蹴り飛ばす。簡単にばにらの首がおかしな方向に曲がった。

ばにらはうつ伏せの状態で鬼灯を見上げていた。

その状態でニヤリと不気味に笑みを浮かべた。

「アリガトウ。オカゲデ一回死ネタワ」

「つー？」

ばにらの首が元の位置に一瞬で戻り、回復した。

魔女は、自分の体が何らか怪我により、損傷し、生命活動を行えなくなつた場合、自分の体の中に存在する物質をうまく利用して、再生と回復を行う。そして、何事もなかつたように体全体を怪我を一瞬で治つてしまつのだ。

途轍もなく便利な能力だが、欠点があり、体の中の物質が足りなくなれば回復できない。例えば、腕一本切り落とされて死んだとしても、残つたから腕一本分の材料がなければ、生き返る際に腕は生えてこない。バラバラに吹き飛たり、燃やされ続けたりしても回復が出来ない。すなわち、回復が追いつかない事になつたら、つまりそれが魔女の死、である。

鬼灯の両足首が両手で掴まれ、ばにらはその足を勢いをつけて自分の方へと引つ張つた。

「ぐつ！…

鬼灯はバランスを崩して尻餅をつくように倒れ、痛みに顔をしかめる。

「アハッ」

ばにらは笑つて、すぐに足から手を離し、鬼灯に馬乗りになり、首を絞めようと両手を首にかけて、首を折るように締めた。ぎりぎりと首を絞める音がする。

鬼灯は振り払うように左手に持つた金槌をばにらの右頬に振つた。ぶつかつたばにらの右頬はめり込み、陥没。口から溢れた血と何本かの根本から折れた奥歯が左方向に飛び散る。原型を止めないばにらの顔の口からは、血と唾液が混ざつた混合液が溢れて鬼灯の服にジユースをこぼしたように服を赤黒く汚した。ばにらに今衝撃によつて隙ができた。さらに鬼灯は金槌を振りあげ追撃した。金槌でのアッパーは、ばにらの顎を碎き、輪郭をつぶした。さらに上下の前歯が歯茎にめり込みさらに出血せ、上空に血と折れた前歯が勢いよく舞う。勢いがついて、ばにらは後ろ向きに倒れていつた。

舞つた血が辺りに大粒で少量の液体とカルシウムで出来た小石を降らし、斑に赤く汚す。

「はあ、はあ、ざまあみろ」

鬼灯が上半身だけ起き上がり、生き絶え絶えに罵った。

「一回目。ダカラ、ソウイウ物理的攻撃ハ効キヅライツテ、分カツ  
テイルワヨネ？」

回復したばにらは、右足を鬼灯の首にかけ、あとはアスファルトの硬い道路に頭をたたきつけた。

鬼灯は叩きつけられた瞬間に、ガツと、うめき声を上げて、痙攣し、動かなくなつた。叩きつけられた箇所から血がでて、髪を赤くぬめらせる。

「大丈夫ヨ？ チヨツトダケ脳震盪デ、眠ツテテモラウカラ」  
ばにらはゆつくりと上半身を上げて、頭から血を流している鬼灯の姿をどこから食べようか見回し、自分の血と涎が混じつた液を口から垂らしながら、先に鬼灯の中につまっているものを食べようと手を伸ばした。まず、いろいろと剥がさないと中は食べれない。服とか、皮膚とか、肋骨とか。

だが、それぐらいでは鬼灯の意識は落ちてはくれなかつた。

「…………生憎、俺は、能力せいで、意識は、飛んでもすぐ戻るんだよ……くそつ」

鬼灯の能力は、回復速度が異常なまでに早いというものだ。その能力は魔女の回復能力に似ているが、実際は違うものである。鬼灯の場合、魔女と違つて一撃で死ぬくらいの大きな怪我をしたら、普通の人と同じで死ぬのだが、切り傷、打撲、捻挫、ここでは関係の無いものだが、インフルも風邪も驚くべき早さで治つてしまふのだ。さつきばにらに噛まれ、くつきりと噛み痕が残つていた右腕も、すでに治りきついている。そして気を失つてもすぐに回復し、意識を取り戻してしまふのだ。

アスファルトに叩きつけ、とどめ刺せたと油断したばにらの両目、

めがけ、鬼灯の左手の人差し指と中指が迫つた。

ばに、らは、本能的に攻撃を避けることしなくて、受けた怪我はすぐに回復するからなのか、一回生き返ったので判断能力が落ちて、いるせいなのか、見当も付かないが、反射的に瞼を閉じるだけのもつとも自然で、本能的な防御だった。

鬼火は指を一気に引き抜く。糸状の物が一瞬はこぼれ落ちた。さらにつぶれた眼球から血と透明のゼリー状透明な液体がドロツと吐き出でくる。ばにらは顔面を手で覆い、激痛に悶え苦しんだ。これだけでは魔女の体は死ねない。

鬼灯は左足の裏で、まだのつかつているばにらの腹部を蹴飛ばした。蹴飛ばされたばにらは転がり、鬼灯から二~三メートルくらい離れた地面に這い蹲りながら、目と腹部の痛みに悶えている。

鬼灯はゆつくりと立ち上がり、落とした金槌を探し、見つけ、ゆつくり歩きながら、金槌を拾つ。

「体の部位なのに」

鬼灯はゆっくりと、まだ両目が治らないばにらの元へと歩いていく。さすがの魔女でも死なない限りすぐには治らない。

い物を他の部位から補つて治すだろ?」「

なれば死ねず、早くしなれば鬼灯に殺されてしまつ。

「その隙、その部位を形成する細胞を新しい形で再生するらしいんだ。頭割られて脳味噌吹き出して死んだら、そのなくなつた脳細胞が新しく出来て再生するそうだ」

ついに、ちぎれた。ばにらは、また死んだ。そして、待ちに待つた、なくなつた部分、田とちぎつた首が再生、修復されていく。

「そうすると吹き飛んだ脳細胞に保存されていた記憶がなくなるんだ。そりやあ当たり前だけだな。一応、魔女にも、元は人だったんだから人権はある。だから記憶を無くすことは死と同じだ。法でも魔女の死はそう定義され、同時にタブーになっている。捕獲員が魔女を狩るときに首切り落とすのは、一番ベターかつ安全な方法だからだ。そうすれば首がなくなつた魔女は復活できないし、人を襲うことなく簡単に運搬できる。あとで首と体をくつつければ、ちゃんと元通り生き返る。記憶もそのままな」

ばにらの新しい、内出血して赤く染まつた目が鬼灯を探した。

そして見つけた。

「俺は機関に仕えているから、反することはできないし、破れば法律によつて裁かれる。だけど、それでも、反しても、破つても

」

鬼灯は金槌を高く振り上げていた、その姿を。

「許したくないものが俺にはあるんだよ」

鬼灯がばにらの頭に向かつて下した鉄槌は、ばにらの目で捕らえた。

だが、ばにらはもう逃げられない、と悟つた。

「ゴスツ。

陥没した。

おかげでPV5000、ニーク500を超えました。本当にありがとうございます。これからも読んでやってください。誤字脱字などありましたら指摘お願いします。

雅樹は確かにそう言いました。

「何で珠奈は、燃えてないの？」

燃えるって何が？

私は理解できなかつたので雅樹に聞き返しました。

彼は燃やせる物なんて持つてないし、何かの法則で発火し、着ている服が燃えるのかと思いましたが、化学とか物理学とかには滅法弱いので、私のしがない頭では推測すらたてられません。

「だつて、珠奈は、魔女、なんでしょう？」

雅樹がそう言い、私は胸にあいた穴を誇らしげに見せつけてながら、どこをどう見ても、私が魔女じやなかつたらこんな風に生きている分けないでしょと言いました。

心臓がないのに生きているなんて、私の記憶の中では魔女くらいしか心当たりありません。現在の医学は進歩しているといつても流石に居ないでしょ。

「…………」

雅樹は今から自殺してもおかしくない程、暗い表情を浮かべています。

ここ、私は気づきました。あれ、何かおかしいと感じました。

彼が魔女に何かしらの一物を抱えていることは確かです。見れば誰だつて分かります。だからつて魔女が彼の好みとは限らないし、一日惚れという線も、彼がそんな面食いなわけがないことくらい分かつていましたし、単純に、本当に救いたかつただけなんじやないかとも考えられます。結婚しているお医者さんだつて、結婚相手の怪我、病気の為だけに医者をやることなんて、そんなの宝の持ち腐れですし、ましてや、お医者さんの結婚相手が、同姓の患者さんに嫉妬するなんて、お門違いにもほどがある。そんな感じで私自身が途方もない思い上がりをしているように感じました。

じゃあ、何で私は、あの魔女に嫉妬したのでしょうか？

彼があの魔女に見せた笑顔って、いわゆる、営業スマイルと言つやつじやなかつたのではないでしようか？ それなら一応、親しい私が見れなのは当たり前です。それに服を貸したのだって、魔女が着ている服が血で汚れていたからで、新しい服を買うにしろ、彼が文物の服に詳しくないから、魔女自身に店に行つて選ばせようと、目立たない服を貸してやつたんじやないでしようか？

あれ？ 全部、私の一人よがりだつたんじやない？

私はその自分の頭の中に出でてきた仮説を確かめるため、恐る恐る訊きました。

魔女とかそう言つものとか関係無しに、私のことが好きか、と。雅樹は口を開きました。

「 うん」

私は頭の中で何かが、また崩壊しました。  
一瞬で間違いに気づきました。

私は、馬鹿でした。

大馬鹿でした。

どうしようもなく、救いもないくらい、大馬鹿でした。

こんな私を好いてしてくれるのに、私がただ愛されたい、独占されたいと、何かも悪い方向に考えて、こんな行動に出てまでして、彼を奪い取られたかつたと、酔つていた自分をハつ裂きに殺したくなりました。奪い取るもなにも初めから彼は私を見ていたというのに、勘違い、被害妄想までして、彼が魔女が好きなんだから、私も魔女になればかまつてくれると思って、心臓を渡してまで魔女になつて、それで、彼が救いたかつた人を見捨てさせて、こんなことまでして……。

ああ、死にたい。

私は泣いていました。自らの懸かさに泣きました。冷たい冷たい涙でした。

いつも抱き合っているといつに、彼には私の体温も鼓動も何も伝わらないことにも気づきました。それに捕獲員に捕まつたら、それこそ彼にはもう会えなくなる。触れられなくなる。もう一生、こうして居られなくなる。それくらい分かつてはいたはずなのに自分の軽はずみな行動を恥じました。

前に、魔女になりたい、と思つ子もいるんじゃないかな、と自分はそうはならないと高を括りながら言いました。馬鹿で単細胞、頭になにも詰まつていらない私は、彼に好かれたいが為に、魔女になりたいと思いました。そして、心臓がなくなつて、魔女になつて、喜んで、後悔しました。恋する乙女は盲目とか言いますが、確かにそうだったと身にしました。

悔やんでも、当たり前に、失つたものは、帰つてきません。

こんなんじや、もう駄目じやん。

ぱつかりと空いた胸の穴にあつたのは私の心だったのでしょうか？  
その空洞から溢れることない黒く固まつた血液は、私の邪悪な感情なのでしょうか？

私の愛情は、この体の体温のよつに冷たく、彼の心の体温を奪つていいくのでしょうか？

分かりません。分かりたくもありません。取り返しのつかないことをしてしまつたことを悔やんでも仕方がないじやん、前向きに生きよう、とドラマの主人公に向けて、眩いたくせに、自分が体験する、いつも後ろ向きになりたくなるのだと、と思いました。

彼はずっと謔言のように呴いています。

私は泣いています。

壊してしまつたものは、戻りません。

分かつて います。

分かつて いるつ もり です。  
でも、でも……。

「また、悩んで いるの ね？」

彼の後ろ扉が開き、あの女性が近づいて き ます。ああ、あの人は  
私は、その女性に い ました。  
私の心臓を返して く ださい、と。  
女性は い いました。

「それはあなたが魔女に な りたいと、私に頼んでき たからして あ げ  
たの よ？ それにクーリングオフ制度なん て ある分けないが ないじ  
や ない。病院で手術後にお医者さん に そん な こと 言えると思 う？  
返す返さないの 前に、あなたの心臓はもう、おいしく頂い ちゃ つた  
から、もう ないわよ」

私は喚き散らしながら、返して、返してと連呼しました。

女性は呆れた ように い いました。

「あなた、それは虫の 良い 話だとは思 わ ないの？ それに心臓を返  
したとしても、あなたの体の定置に 戻すこと な くて、私にはできな  
いわよ？」

私は泣き崩れました。流石にここまでわんわん泣いて いると、さ  
つきまで、嘘だと狂つた ようにぶつぶつ言つて いた彼が気づき、後  
ろを振り返つてその女性を見ました。

彼はその女性を目を見開いて、驚いて い ました。

「……珠奈、この人は、誰？」

彼が訊いて き たので、簡潔に、私を魔女に した人と 答えました。

彼は私が発した一言で、溜飲を下げたようでした。そして、飽き  
れ口調で言います。

「ああ、なんで珠奈が燃えないか分かったよ。そうか、そういうこ  
となのか、そうだよな。僕がおかしいんじゃない、狂っているわけ  
でもない、えり好みして燃やしたわけではないんだっ！」  
どんどんと飽きれ口調から、怒りのはらんだ強い口調に变化てい  
き、

「やうですね？」

彼は女性を睨みながら、同意を求めました。

「ええそうよ。雅樹君

女性は微笑みました。

どうして、彼の名前を知っているの？

「そうですね

「捕獲員の有佐百合子さん」  
雅樹は、その女性の名前を言いました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6899x/>

---

まじょがりっ！

2011年11月18日03時20分発行